

大支那系

ドを入れて夜中の照明となしてゐるものもあるが、しかしそれにしてもまだ今日之が現物をまのあたり目観し得るのは幸ひである。中以下の家庭にありては燭を用ひるうちは事實少なく、従つて大抵のうちでは夜になれば照明の方法を講ずることなく、さながら山中動物が巢に入りて眠りにつくと同じやうな式に、やつてゐるのである。田舎の農村、片田舎に入れば夜になると同時に巷は暗黒の世界となるのが一般である。町に街燈を點じ街路の照明を考へるなどはよほど進歩した町に於いて始めて之を見ると云ふ情態なのである。

されば支那畫に夜遊の圖に宮廷の夜の燈籠を點ぜる圖を見るなど云ふのは、これは大變な上流の光景を描寫した物になるのである。普通月夜玉笛を聞くと云ふやうな月夜の事は畫題にもなつてゐるが一般の場合では夜の情態はすべて畫になり得ないのである。それ故支那畫の夜遊といへばいつも宮女を侍らしめてゐると云ふやうな宮廷禁裏の有様でなくては描かれなかつたと云ふ實情が存してゐるものと思ふのである。

かくて調度の描寫を本位にして支那畫を考へて來るときは宮廷上流の事だけしか畫にならないことになる。ところがそれよりもつと廣い山水花鳥、人物、と云つたもので之を文人畫風で以つて採り入れる事にすればいくらでも畫題を多く採ることが出来るのである。

支那畫に見る風俗の觀察はこゝに必ずしも之を上流方面のみと窮屈に考へるのではなく出來るだけひろく又自由濶達に見ようとするものである。自分はこゝに必ずしも支那畫を以つて支那文化の發露の方便にせんとする考へはない。あらゆる方面の山水自然の風景であれ、動物であれ、風俗歴史であれ、何でもよろしいのである。たゞこゝにそのうちの風俗の部類の窺はるゝもののみ採つて來て之を考へて見ても實に支那民族の何とも云へぬ偉大なるものが窺はるゝと云ふことを力説したいのである。たゞその相貌の描寫のみと云はず路上の風俗宮廷の生活、室内の風俗調度類一つとして可ならざるものゝないものである。こゝに自分に感じたるまゝの懐ひを述べて支那畫に反映したる支那古來の日常生活の一斑を述べたに過ぎぬのである。

風俗・趣味

支那古名畫に見る風俗

十六 支那古名畫の趣味

六十三 名流將來の古名畫

昭代の御盛事と時を同じうして空前の文化的美學が昭和三年の晩秋の美術期を飾つた。即ち日支兩國に傳はる唐宋元明四朝古名畫の展覽會が開催さるゝと共に民國朝野の名流二十一人の一行が之を好機に數百點の珍卷墨寶を將來して發會式に參列し彼我互に講演に、鑑賞に、驩交、清談を恣にせられたことは日本の歴史あつて以來全く始めての快事である。展觀の點數はその目錄に見ゆるものゝみにても三百六十一點、唐宋のものは主に日本側から多く、元明のものは支那側から比較的多く出品せられてゐたが、何れも希世の珍品と稱せらるゝもので誠に粒選りのもの許りであつた故兩國斯道研究者にとつては非常なる參考と刺戟を與へてゐた。確かに此度の美學は日支文化史上に特筆せらるべき有意義の企てであるのみならず、その時局を超越してすらすらかゝる雅催の實現を見るに至つたことそのことが又兩國の國交上にどれ位優しい潤色を増して來たことかと思ふと衷心喜ばしい氣持ちがしてならぬ。



由來支那に遊ぶ者が支那の古名畫を系統的に纏めて清鑑しようと思ふ時は先づ北京（今のペイピン）に行つて紫禁城内の文華殿の陳列を見るが普通で之が最も捷徑であり又最も要領よく研究の出來る方法だとされてゐる。民間にそれ以上の名品の秘藏せらるゝものがあつても纏めて見られず、それも近年は續々他の美術品と一緒にアメリカ邊りへ散つて行つて了ふものが多い爲め次第に減つて行く一方なのである。それに文華殿の方も今はさに聞くと、陳列替の場合などは代用品とさし替へらるゝものが少なくないの

で眉唾だなどと云はれてゐる。ところが此度の陳列ばかりはその系統的の資料としての點で又その筋の正しく信頼の出來る質の點で更に又その三點に於て實に至り盡

支那古名畫の趣味

大支那大系

せりと云つて差支ないのである。その豊富な資料のうちには丁寧に見返して見ると沈南蘋の花鳥十
六幀の摹寫ものらしいものを始めとして、唐吳道子筆と稱せらるゝ送子天王圖卷であるとか、宋、
牧溪の山水などの如く多少問題として研究の餘地のあるものまでをも挿入し自由討究の材料に加へ
てあるところなど、その用意の周到さ加減が見えてゐる。

しかし全體から云つて唐、禪月、十六羅漢圖の枯蒼幽玄味の溢れてゐる御物と云ひ、傳吳道子、
山水圖の國寶に石恪、二祖調心圖の國寶と云ひ或は降つて、明、仇英、金谷園、桃李園圖の對幅と
云ひこれらは帝室博物館が此の際特別展觀の爲めに思ひ切つて陳列せられた二十八點六十四幅中で
特に遠來の雅客、鑑賞者の目を牽いてゐたものであつた。わけても晋の石崇が金谷園に賓客を會し
大いに園中に飲し詩を賦し、成らざる者は罰として酒三斗を飲ましめたと云ふ故事から蘭亭曲水以
上に名園の名を恣にせるあの六朝、園中の神韻幽趣の描出されて遺憾なき仇十洲の妙筆の如きは
支那癖の自分を吸ひ付けて低徊去るに忍びない迄にされたのであつた。

支那名流將來の珍品揃ひの古名畫は日本側のそれと一緒に府の美術館の方に陳列されてあるが先
づ第一室に入ると全館を壓してゐる感じのするものは今回の呼び物として喧ましい閩立本の歷代帝
王圖(梁鴻志氏藏)であらう。晋、顧恺之の女史箴の圖を見た感じと似た畫趣を聯想せしむる所もあ

風俗・趣味

つて、その唐畫として申し分がなく何となく頭が下がる。その構圖に描寫の線の使ひがそれに設色
の點など細部に亘つて見ても全體としての調子の高い所が見られ實に神韻が溢れてゐる。しかし詳
しい批評は専門家に委ねるとして自分は之を風俗上の稀世の資料として、衣冠の様式から齟齬模
疊沓の類に至るまで細かく見て來れば見て來るほど貴重な手掛りを得る。殊に吳主孫權や晋武帝司
馬炎邊りの注意深く描寫されてゐる所を見るとその八字字髭の相貌の表現から左右の從者をして兩
手を引かせその寬衣、お振り袖の姿様にまで皇帝としての威嚴莊重の趣を見せてゐる所など殊に
興味が深く、かの過去現在因果經の繪卷を見る時の感じとは違つてこの方は著しく沈重の趣の
勝つてゐるところが特に印象を深からしめてゐる。

參考品として掲げられたる同室の呼物は清、石濤の山高水長の大輻であらうがこは八尺紙を二枚
つぎ合せた文字通りの大輻で圖は匡廬、五老峰を背景に廬山南麓の景致を取扱つた優品である。出
品者は自身南畫行脚、往年廬山に遊んだ翠雲道人である。南畫の觀賞は身親しく其境地に遊んだ
體驗がなくては眞に徹底した觀賞の出來るものでないと思はるゝがその點で自分も人一倍之が氣
に入つて眺められたのである。

尙全體の上から見て調子の高く眺められたものは、宋、牧溪、漁村夕照圖(根津氏)宋、馬遠、
支那古名畫の趣味

大支那系

夏珪の山水(黒田侯並岩崎男)宋、趙大年、寒塘集禽圖(早崎氏)梁楷、樹下讀書(黒田侯)許道寧、松山行旅圖軸(王衡永氏)李成、喬松平遠圖軸(山本氏)劉松年、著色山水軸(山本氏)などを始めとし、唐、壁畫の燉煌石室觀世音功德(山本氏)に、宋、燉煌、雷音寺五枚もの(古田氏)も亦雄物たるを失はぬ。山本氏の壁畫に見ゆる人物の坐像は唐代その跪坐せる風俗の日本式そつくりなる點を留意すべくは唐朝人物描寫の上に貴重なる一資料を提供せるものと稱すべきである。

六十四 唐宋元明の名畫を前に

支那の風光清趣を描ける宋、蕭照、虎邱圖卷(朱益藩氏)に、宋、王銑、萬壑秋雲圖卷(關冕鈞氏)の如き此種の畫題に對して之を味ひ見るには漠然と唯單に畫道の氣分のみを基礎として鑑賞するより、實地に自ら江南は蘇州あたりへ遊び虎邱に至り驢馬の手綱をひきつゝその景趣でも愛でた體驗を本としてこれを見るときはどれ位深刻に之を理解し又消化し賞味せらるゝことか判らぬ。現に自分達にしてもかつて四川三峽の裏山に遊び、秋雲模糊の間に萬壑奇嶂の隱顯出沒するその實景を目のあたり見て來たその目で以て宋、王銑の畫を見るときはその筆端の苦心の判るばかりでなく、觀賞をしてゐる自分自身がいつしか萬壑畫中の人となり畫面に同化せられたと云つて

風俗・趣味



北平萬壽山長廊壁間に見繪る畫

(その二)

もよい位の氣持ちになるのである。その畫を描かんとする時は宋、元から明、清の畫伯文人吟客の何れも皆その實際の風物環境の中に身をおき胸に萬年の自然の力を充滿磅礴せしめ止むに止まらなくなつたその幽情をかうした力ある筆端に出してゐるものだらうと察せらる。この意味からすると支那の古名畫は大自然その儘の氣韻の發露に成つたものだといへる。名作と云はるゝものは總て皆之であると云へる。勿論描寫の上の用筆、遠近、濃淡法などは或る程度までその約束に従ふべきものでもあらうが根本はその實景が表現してゐる天地間の神韻そのものを拉し來たつて之を寫出せんとするものであつて、支那畫の眞價は實にこの點に出發しこゝに基礎を置いてゐるものと考へられるのである。なほ場内見渡す限り宋畫の白眉として數へらるゝものには徽宗皇帝の絶品鸚鵡圖軸(龐萊臣氏)

支那古名畫の趣味

大支那大系

や柘榴小禽(根津氏) 乾隆内府舊藏の五色鸚鵡圖卷(山本氏) 白梅小禽圖(早崎氏) などがあつたり又無款ではあるが宋人畫冊の續き物(李宣龔氏)の出品があつたりして何れも人目を集めてゐる畫冊はその畫風から嚴密に評すると明初あたりの摹したものではなからうかと察せらるゝ節もあるが、然し唐宋の寺小屋の場面を描寫したり機織の光景を紹介せるあたりなど當時の社會生活を纖細なる手法と設色とで以て寫生的に現してゐる所はうれしい。宛かも宋代の日常生活に即した題材を正直に取扱つてゐるだけにかなり人氣を集め一般日本人の鑒賞心を唆つてゐるやうである。とかく日本では帝展などの入選畫を見ても支那船らしくない船の長江にうかべるものを見たり六朝の塔でも何でもない塔をよい加減に持つて來て見たりと云ふやうに寄せ集め式をやつてゐる弊のある昨今の日本畫界にありては、徒らにその氣分本位のみで片付けることなく斯うした滅多に見られず又内容のしつかりした畫冊をよく研究しておく事は非常な參考になるものと考へらるゝのである。元時代に這入つた名畫の中で一番支那で騷がれてゐるのは云ふ迄もなく王蒙の珍幅であるが。陳列品中にも、その松谿得釣圖(邵福瀛氏)であるとか、夏日山居(龐萊臣氏)であるとか素庵圖(關冕鈞氏) 青下隱居圖(狄平子氏) 乾隆内府舊藏、泉聲松韻(山本氏) 山水(陳寶琛氏) 其の他、蕭龍友氏沈瑞麟氏等から出てゐるものなど何れも皆王蒙としての呼物たるを失はない。又火

風俗・趣味

災の厄に罹つた痕跡を留めてゐる畫卷ではあるが黃公望の秋山無盡圖(王衡永氏)は山本、笹川兩氏のものに比べて優つてこそぬれ決して遜色のない名作である。又錢選が陶淵明の柴桑翁圖卷(關冕鈞氏)は廬山南麓のその舊跡を訪ねた經驗を有する自分にとりては一入印象が深く、又元畫としては八釜しい倪瓚には西林禪室(山本氏) 六君子(龐萊臣氏) 山水(加藤氏)などの優品が出てゐて何れも結構なものと思はれた。又任月山の琴棋書畫圖の四軸(大村伯)に柴適齋の秋景山水(阿部氏) 鄒復雷の春消息(郭葆昌氏)に柯九思の竹譜冊(張弧氏) 檀芝瑞の木竹(徳川伯並に蜂須賀侯) 李享の花百草蟲圖(金潜庵氏)などは何れも得がたい逸品揃ひであるが中にも女流閨秀畫家の鼻祖と云つてもよからうと噂されてゐる阿加加の觀音圖(酒井伯)に至つては全く異彩を放ち萬綠叢中紅一點で珍しく眺められた。尙例の自分が特別の興味を覺えてゐる元代風俗の資料としては趙孟頫の鬪茶圖軸(黃介壽氏)の淡彩で描かれてゐるものがあるが如何にもその路傍の茶擔ぶりの情趣が生きうつしに描出されてゐて面白くやさしく眺められたのである。元畫は尙日支各地でその逸品名作を鑒賞するの機會は多いが何と云つてもその元畫の氣韻の高いものはと云ふと王蒙と倪雲林の二者でないかと思ふ。兩者の畫技は神域に入つてゐるの感じがす

大支那大系

る。自分は南船北馬の漫遊自適のうち常に南方の山中幽境に入つては王蒙の筆致を思ひ出し北方の寒林平遠の孤客となつては雲林の畫韻を腦裏に泛べてその景趣を愛し低徊之を久しうして味つてゐるわけである。今こゝに一堂の下にかうした王、倪、晁、畫圖の府に身を入れ連日咫尺してその韻致に接してゐらるゝとは何たる恵まれたことであるかと云ふ感じを禁じ得ないのである。かうして唐から宋元邊りまでの名畫を大觀して見るとそこには争はれない各時代時代の畫風に判然たる特徴があり、それが畫面に明瞭に溢れてゐる所が見える。殊に宋代の山水墨畫にして無落款の名作に出くはすこと多いが大抵は傳夏珪、傳馬遠と稱されてゐる。當たらざるも遠からざるものであつてその宋畫の面目は髣髴として見えてゐるのである。下手に後人が之に夏珪などと記入などする必要はない。後人記入の落款などは折角の名畫を却てけがして臺なしにして了ふ恐れがあるのである。

六十五 明畫の風俗

明代に入つての陳列は沈石田、仇英、唐白虎あたりから謝時臣、文徵明、董其昌、藍瑛とこのあたりの名作が最も多く出揃つてゐるが又王建章、倪元璐、盛茂燁、戴進、吳偉と云つた處の雄物か

風俗・趣味

らして珍しい所では王緘、顧雲巢、傅山、王鐸に李流芳、徐天池、徐霖、黃道周、宣德帝あたりの傑作と思ほしきものもかなり出てゐる。恐らくこの唐宋元明四朝の展觀で一番賑はつてゐるのは此の明代の爛熟期に於けるかうした諸名家の作品であらう。ところが今之を出品者の側から見てみると最も盛な蒐集家として自他共に許されてゐるのは前農相山本悌二郎翁であらうが翁が愛藏の戴進の松巖蕭寺圖軸や沈石田の高枕聽蟬圖を始め乾隆内府舊藏の折紙付きの名畫の最も多く出てゐるのはよく目立つてゐて、鑒賞者の齊しく敬服感謝してゐる所である。古名畫の保存がとかく肝腎の本場の支那に困難にして日本にその安全地帯を求めてゐる事情を見ることは民國の爲めに衷心惜しむ所であるが、これも紐育や市俄古あたりに流出するに比してはまだしも東洋人として慰めになる事と思ふ。尙支那側の大立物では關冕鈞氏を推さなくてはなるまいが、その出品になれるものは場を壓して最も多く宛ら西に關先生あり東に山本と並び稱してもよい位である。又斬雲鵬、狄平子、徐世昌、張孤、王一亭、恭親王、蕭親王、陳寶琛等の諸名流の出品名も色々の意味でこれ亦よく人目を惹いてゐた。かうした名品揃ひの陳列のうちで先づ山水畫に就いて之を見ると題跋で畫面が殆ど埋められてゐる王跋の秋林隱居圖（山本氏）であるとか王建章の川至日昇圖（岩崎男）瀛島浮槎圖（篠崎氏）そ

支那古名畫の趣味

大支那大系

れから顧雲巢の劍閣圖軸（王遊永氏）に文徵明の煙雨聽秋圖軸、雲山軸、橫塘聽雨圖軸、以上三點
 山本悌二郎氏）また陳紹英の水墨山水（岩崎小彌太男）と云つた大ものに關思の月夜行旅圖（岩崎
 男）また、李士達の山亭晴眺圖（山本氏）に盛茂燁の山居圖（哈少甫氏）董其昌の盤谷序卷（山本
 氏）などは沈周の蕉石讀書圖（龐萊臣氏）に同じく山水讀書圖軸（黃時青氏）などの畫致と比べそ
 の景趣風韻、筆致の妙所も味はゞれて餘りあるものゝみである。
 明畫の山水には尙藍瑛の例の比較的點體を多く用ひてゐない溪山問奇軸（三條公）であるとか、
 倣北苑山水圖（山本氏）や李流芳の水墨山水軸（篠崎氏）に黃道周の平沙落雁圖軸（關冕鈞氏）揚
 文驪の山水卷（山本氏）あたりが注目せらるゝがしかし又その筆者の書道の方面でのみ認められ山
 水畫などでは殆ど知られてゐなかつた王鐸の山水（張弧氏）に同じく倣董源軸（關冕鈞氏）の出
 るのは大分珍とせられてゐる。又山西省大原城内で自分ども頗る多數の名作を見てゐた傳山の
 軸、乾坤草堂圖（關冕鈞氏）と云つたやうな珍奇で又懐かしいものゝ陳列を見たのは衷心快事とす
 る所である。

又花鳥、竹石の類には呂紀の花鳥圖（大村伯）に陳道復の菊花圖（加藤氏）周之冕の花鳥圖軸
 四幅（大村伯）姚綬の竹石軸（篠崎氏）などの名畫が出揃ひ、又唐寅の美人圖軸（袁勵準氏並に

風俗・趣味

本山氏）などのものもありて何れも名畫清秀の韻致を見せてゐる。人物では仇英摸、倪高士小像
 卷（郭葆昌氏）と唐寅の歐陽文忠公像（徐世昌氏）が最も畫伯連の目を奪つてゐた。かくして山
 水花鳥、竹石、人物の各圖題に就いての天下の名畫と云ふ名畫の集まつてゐる此の陳列を今全體
 に互つて見渡して見るに從來自分共の見てゐる通り何と云つても既に宋元を降つた明畫となると
 そこには又宋元に味はれない所の優しい氣分が時代の生んだ空氣として畫面に溢れてゐる。それ
 故、明畫ではその山水風物を描寫したものにしても一見そこに明畫としての氣持が直感される。
 陳列品中でもその目で以て見てゐると取り別け文徵明の秉燭話舊圖軸（黃時青氏）に赤壁舟遊圖
 軸（山本氏）仇英の梧竹草堂軸（龐萊臣氏）漁樵耕讀圖卷（篠崎氏）吳偉の漁樂圖卷（白石氏）
 に松林九老圖（靳雲鵬氏）と云つたやうな諸點に見ゆる畫韻は歴然とその筆致が看破せられる。
 謝臣の春夏秋冬の四幅對にしてもそれが明代傑作のものとして仰がるゝ丈に一見して其特色が看取せ
 るゝのである。
 吾人はかうした結構な明畫を各時代の諸名畫と比べ同時にこゝに鑑賞することが出来るのである
 自分は明畫に對するかくの如き氣持を今參考品として陳列された清朝の釋道濟（石濤）の傑作山
 水大橫軸（關冕鈞氏）なり同じく山高水長圖（小室氏）の大幅なり同じく溪山釣艇圖軸（山本氏）

三三〇
なりの豪放潑刺たる筆致にてらして考へて見るとその間又恐ろしく違つた明代のやさしい畫韻を感
受せざるを得ないのである。尙參考品中には石濤の外龔賢、八大山人、郎世寧、張之萬、惲格あ
りのそれぐすぐれた風格の變つた資料も陳列されて自由に比較鑑賞に便せしめられたるは吾人の
最も多とするところである。

十七 支那古名硯の觀賞

六十六 趣味の國交

論理は人生を乾燥無味化する。條理整然として一滴の水も洩らさぬやう、ぎつしり疊みかけて行
かうとする時は論理の力を是非共假りなくてはならぬ。科學萬能の時勢にありては此の論理が流行
し、一にも論理、二にも論理、論理でなくては夜が明けぬ風潮を作つて來たのである。ロジックに
合はぬ話は時代おくれであり、あたまが古いやうにあたまごなしにやられて了ふ。學校教育に於て
も一から十まですべて論理一點張りできたひとげてゐるものだから、論理に合はぬ話などはすべて
無價値の如く思はする教育法がとられて居る。何と云つても國を擧げて今日は論理萬能の世となつ
てゐるやうである。

二二が四、二三が六の究理で行くことは云はずとも知れた最も大事なことである。之を敲き込む
ことは放漫に流れ易い少年、少女、青年の硬教育には爲めになることで、これは事新らしく説き立て
なくとも誰も皆百も承知してゐる事である。又表面正式に事を進むる場合にはそれで行く可きこと

大支那大系

も判りきつてゐる。然しそれだけでは此の世はいけない。何の爲めの人生、何の爲めの學問であるか考へて見たくなる。人生は論理の學問の爲めに有してゐるものではない。いつもかつも二二が四、二三が六ばかりで人間が一生を送つて行かなくてはならぬとするなれば殺風景極まるものとなる。今日の學校教育なるものはその處に殆んど着眼されてゐないのである。論理以外に人生にゆとりを持たせるべき大事な趣味教育と云つたことには文部省のお役人當局始め殆んどその風韻の必要を説くものなく、又之を外部に現はしてくれてゐるものがない。

人生にゆとりをつけ人生を美化せんとするものは趣味性の涵養に努むべきである。二二が四ばかりでは人生はたいして甘味も何も出て來はしない。法律の如きものは、人間社會に、行ふ可き必極のものである丈に、人生に對してゆとりを持ち、趣味的色彩を帯びた人によつて取扱はれなくては本當の物にならぬ感じがしてならぬ。學校では民法、刑法、國際法、國際公法などすべて論理づくめでのみ教授をし又當局もその學んだ型の通りのことをどこ迄も運用させることで相場がきめられてゐる。日本人のゆとりを考ふることに出來ない潔癖性からすると殊に峻嚴過ぎる位にこれを守つてゐるやうに見える。

前にも云ふ如く物には條理整然と行くことは大事なことではある。しかもその必要なことのみを

風俗・趣味



東都支那餘慶堂に於ける著者小竹一氏
堂主早川芳太郎氏及古び玩翁

ビジネス的に運用して行けばそれで事足れりとなすは悪いことではない。けれども今日の社會はそれが極端に行き過ぎて少しのゆとりもつかなくなつてゐるかのやうな觀がある。人生を美化し趣味化する心掛をなぜつもらないものと考へてゐるのであらう。國際的接觸の場合の如き殊にこの趣味を媒介とすることが事實上どれ位有意義であるかわからぬ。又それが本當の國交にも資するわけになつてゐるのである。決して今日のやうに外交事務を取ることのみが外吾人は非常な不満を感じざるを得ないのである。二二が四とか二三が六とか云ふ論理の型のみをつ

大支那系

き付けて相手を理に於てやり込めてさへおけば自分の方は勝つた。優勢な立場になつたと云ふ如きつまらない小さい誇りを抱くやうなものは小國民と云ふべきものである。理に於いては一時その屈辱してゐても情に於いて反抗心を唆つてゐれば何の役にも立たぬではないか。理よりも情の方が數倍の底力になり永遠の厚誼を全うする所以の具であることは云ふを俟たぬのである。かく云ふときは國際間には趣味の情的方向をさへたゞ放漫にやればそれで能事了れりとなしてゐるかの如く早合點をするものもあるかもしれぬが謂はゞ自分は料理の味付け法と云つた理で之を主張するものである。今日の論理屋はたゞエツセンスのヴィタミンAだのカルシウムだの云ふものゝみで行かうとしてゐて、五味八珍の妙趣の方は等閑に付してゐるかの觀がある。國際趣味と云ふ大きな事柄は國交上のビジネスと相並んで最も重大視されなくてはならぬ問題である。否一層力強く打込んで、之に嵌まつてやる可き性質のものである。之で以つて外交上の一轉期を劃することも不可能ではない位のものである。とかく世人は表面、會議室の事務だけを片付けて於けばあとは餘計のことだ。外交圈内には無關係のことだなど云つたやうな素振りを見せて去つて了ふものがある。これなどは甚だ心得ぬ殺風景極まる人間だと評されても仕方がないと思ふ。否むしろかゝる人は人間として味のないお氣の毒な人であると云ひ得るのである。

風俗・趣味

この國際趣味のことをよく高調する爲めにやゝ手前味噌のやうな處へ脱線しかゝつたけれども要は今日のすべてが餘りにゆとりがなく理屈攻めにのみ陥り、教育の上にも、國交の上にも潤ひの缺如せるものがあるやうに感ぜられる故にこの點をこゝに力説したわけである。先づ趣味の趣味たる特徴は元來國家を超越せるものなることを特筆せなければならぬ。當面の實際の問題、懸案などちがひ氣詰まりの感じは少しも伴はず、どこ迄語りつゞけても後日に累を遺すとか、内兜を見すかされるとか、國是を揣摩臆測せらるゝとか云ふ如きことは一切ない。いくら相手に突込んで行つても所謂「重大な結果」を醸すやうなことは決してない。當に光風霽山月を見るが如き風懷で、さしはりがない。又趣味の集りなど催さるゝ時は敵も味方もはめを外して寄つてたかつて打興じ大變氣分を緩和させるものである。外交は趣味に生き、ビジネスで殺さるゝと云ふモットーも事實あるやうに思はるゝのである。少なくとも趣味は人を引つけ又吸ひ付け得る力を有するに反してビジネスは人を遠ざけ忌避する力を有するとも云ひ得る。されば小外交を超越して大乘にうつり、大外交を行ふ上には此の趣味の運用を取り入れることが眞の妙諦である。同時に小論理から出でゝ大論理に行く上にも此の趣味性の涵養をぜひ必要としなくてはならぬのである。小外交や小國交、小論理は今日以後の國際生活、文化生活の上にはだんゝ意味をなさなくな

るものであると云ふことは深く信じて疑はないのである。

六十七 文人趣味の高調

趣味は國境を超越してどこへでも無制限に行渡る性質のものである。又その趣味に浸るものは始めから身分、勳位、官等、階級の別などは眼中におかない。そこに氣樂なよいところがある。國によるとか、位階によるとか云ふ考へが挿まつてゐては何にもならぬ。かゝる趣味は、本當の趣味ではない。たゞ然しその國の歴史、風俗習慣、又その人の廻りの環境の空氣によつてはそれが色々變化するものであると云ふことは勿論のことである。

所謂支那趣味なるものは漠然たる云ひ方であるが日本人にしてこれが趣味に深入りすることは少しも妨げない、いくら深入りしたからとて差障りの出来るものではない。たゞそこで迄の趣味の理解が中々容易でない。これは西洋のオーケストラやダンスの趣味のわかつてゐない日本人にはいくら國境のないわざだから自由にやれと云つて見た所で始まりぬのと同じわけである。趣味の理解は上述の歴史、風俗、習慣、人情、個人の環境により支配せられることは云ふまでもないのである。支那人と雖も歐米日本に長く留學してゐたものは、支那趣味の少しも解されてゐないものがある。

無理のない話である。毛筆のにぎれない支那人もゐるのである、西洋婦人で日本の衣装をつけ下駄を穿いてゐるものがあるかと思ふと、日本人で歐米に三四年もゐたものは足に下駄が穿けない。穿くと痛くてやりきれないと云つてゐるものもある。

支那人だからと云つてそのすべてに支那趣味を認むることは或は無理かも知れぬが、しかし多くの場合に於いて、支那人には支那の或る方面の趣味で以つて向かふならいつでも接近が出来る。わけでも文人趣味の鷹揚な風懷で山月を語り雨を聴き、琴を弾じ詩を賦する。又書畫を評する。必ずしも麻雀をガヂヤ／＼掻き廻はす方法でなくても、いくらでも、風流を共に楽しむことは出来るのである。球を撞いたり、シャンペン香賓を抜いたりする洋館ホテルに於ける遊びばかりでなくとも、清遊の方法はいくらでもあるのである。又相手かたの方でも單に外交部の諸公ばかりと限らず又大官連中のみと限らず、民間からもいくらでも共に楽しみ共に談ずべきものが見出さるのである。官をやめて耕讀第に引込んでゐるもの。永年閑雲野鶴をきめ込んでゐるもの。讀書人、文人、墨客集藏家、醫者、大和尚とあらゆる方面にかなりの風人がゐるのである。

こゝには主として文人趣味のことに就いて述べるのであるが支那に見る此の方面の分野は頗る多岐多様に亘つてゐる。北京方面だけでこれが蒐集してゐらるゝ材料に就いて云つて見ても中々色々

大支那大系

の分野がある。即ち

その一 古名硯

その二 古墨主として明墨、方于魯、程君謨等のもの

その三 筆紙、筆架、水滴、文鎮

その四 印材、印泥、玉器

その五 扇面、古寫經、紺紙金泥また麻紙等のもの

その六 書畫一切その他古拓類

その七 陶磁器、堆朱、漆器、玻璃、鼻煙壺に至るもの

その八 古銅器、尊、彝、爵、罍、鐙等のもの

その九 古碑、碣、出土、瓦器、石人石馬

その十 緯絲、穀絲、緞綢、絨毯

その十一 書籍、古版本、寫本

その十二 殷虚出土、龜甲、獸骨遺片

この外紫檀黒檀の家具、書卓、椅子、寢臺より、大きなものになると廟宇、亭榭、池畔庭園、橋

風俗・趣味

梁何でも數へ得るであらう。

また必ずしもかう云つた品物建物に據るときめなくともよろしい。所謂文人氣分に浸つて支那の文雅清高の情趣に接して閑雲野鶴を事としてゐる。それでも結構文人生活の要諦を得て居るのである。一々品物を蒐めなくては趣味に浸り得られないと云ふやうに狭く解しなくともよいのである。

世には又口を開けば支那の軍閥を論じ、治國平天下を叫び、南北統一説に氣焔を吐くと云ふものがある。所謂従來の支那通、支那浪人と云つた人々のうちにも尙よく詩を賦し書畫を愛し、支那の山水を語ると云ふものが澤山ある。天下、國家を論じ尙且つ文人墨客の趣味を解するもの、これは結構である。何だつてよろしい。支那文人の趣味と云ふものは頗る廣汎に渡つてゐる。日本人の考へてゐる思想とちがひ支那の文人の第一條件なるものはかなり廣い。日本の畫家、詩人、書家、古美術蒐藏家と云つたやうに別々に存してゐるのではなく、支那の文人は一人にしてこれら何もかも兼ね有してゐるものが多いのである。つまりそれ故に少なくとも、「支那文人とは詩文に長じ書を能くし畫才の練れたるもの」之を文人と考へてゐると見らるゝのである。支那文人を理解するにはこれらの特徴を先づ解すべきは論なきことである。その學問の造詣の深きことや藏品の多きことは必ずしも條件としないのである。無論その深く且つ多きに越したことはないけれども。そしてこれら

大支那大系

の第一條件をそなへた人々であつたならば必ずその気分情趣と云ふものが文人式であつて文人の気分を漾はせてゐるのである。世人はやゝもするとゴルフに出掛けたり、テニスをやつたり、球を突いたりするものは、此の文人趣味を理解し得ざるものなりと云つてゐる者があるがこは誤りである結構よく兩立し得るものである。人あり、又曰く、文人趣味の理解は老人の餘技なりと。そして若手の之に近づく可からざるものゝ如く敬遠主義をとるものがあるも誤まれるの甚だしきものと云はざるを得ない。若いもので文人趣味に浸り得ないと云ふやうな理屈を云ふものは考への間違つた人である。

但し今日支那の事に關係せる若手連中はその餘りに文人趣味の方にかけては無關係過ぎるやうである。文事は即ち老人のすることに見て取つて文人本來の意味に理解がない。文人趣味なるものは思ふに之を大きく云ふならば支那大陸の自然を理解する神隨であるのである。大陸氣分を美しく理解するには先づこれである。文人と必ずしも交らなくてはならぬときめてかゝらなくともよいかも知れぬ。しかし文人趣味の了解の出来る人であるならば支那の社會の根柢がよく判ることがある。又支那人の國民性を十分に理解せんとするには此の文人趣味を知り抜くことが大事な要素となつてゐるのである。支那街の毎戸に見る門聯の句を玩味し之をよく文人風に味はつて見る丈でも頗る興

味のあるものである。

官民の間に於て、とかくそのビジネスマンの間では此の文人の趣味など云ふことが全然かれらに浸交渉なものでもある如くに考へられ、之を無用視するものがある。之を不必要視するなどは謂はれのないことである。本來人間の仕事の潤ひと云ふものは此の文人趣味から生ずることが多い。文人趣味の判つてゐない人には潤ひもゆとりも足りない。話にゆとりがない。精神生活にもゆとりが足りない。つまり人間味が缺けてゐるわけである。所謂支那流の味はどうしても此の文人式の趣味が最もふさはしいのである。今日學校で支那向きの教育を授くるにしても、支那の地理、歴史、經濟、交通などは教へる。しかしその反面にその最も大切なるこの支那氣分、支那趣味と云ふものは教へるの必要さへも感じられてゐない。従つて支那の事にたづさはるものに趣味性から發足して支那人に接せんとするものがあるかと云ふにそれは甚だ少ない。こは邦家の爲め實に惜しむ事柄であつたと考へる。此の意味からしても支那文人趣味の理解と云ふことは頗る重大なる意味を持つてゐるといふ首肯せられるのである。

風俗・趣味

六十八 愛 硯 趣味

支那古名硯の觀賞

大支那系

支那文人趣味のうちには色々の方面のあることは上にも述べた通りであるがそのうちでも、文房具に關する趣味は又格別である。支那は文字の國と云はるゝ文に、硯の趣味、筆紙墨の趣味、印材の趣味と何れも皆相當に、盛に愛玩せられ又之を自己の生活の内部に取り入れて十分に愛玩する。心から之を愛用するのである。特に古來文具中の王と稱せられてゐる硯の如きは支那文人の最も愛撫する處のものである。

支那の硯はその形からして既に圓く又は幅廣く出來てゐて、墨の磨り方を「の」の字なりに圓くゆつくりと磨り味ふやうに出來てゐる。これは日本硯の形の細長く幅狭く唯前後の方向にのみ窮屈に出來てゐるのとは選を異にするのである。同じく何れも實用向きに出來てゐるものであつても、支那の方のは潤くゆつたりと作られてゐるが日本のは狭く長く作られてゐるのである。その數多きうちのことゝて支那古名硯中とても細長きものもあるにはあるが、概して云へば支那硯は愛玩的の形に出來てゐる。質はとにかくとして單に形の上だけからいつても一見日本硯と支那硯の相違せる所は明白に區別せらるゝのである。

若しそれ形から一步を進めてその彫刻だとか、石質だとか、又古色だとか、故事來歴に就いて云ふならば千變萬化であるが、又著しく日本のそれと相違せるところである。そこで日本硯にも日

本硯としての特徴があり、又その愛すべき處もあるが支那硯には文人としての趣味の深いものが多く出來てゐる。

風俗・趣味

日本へは宋の代より支那の古硯が傳來し所謂鎌倉端溪と稱して鎌倉時代に盛に這入つて來てゐる雪の下地方から出土するものはこれである。世に云ふ所の支那古硯と云ふものは、唐又は六朝の頃ののものも色々あるべきわけだが、大抵は宋以後のものである。端溪、歙州、その他種類は多く瓦硯も多いが何れにしてもその古さから云へば宋時代から以後のものが多い。従つて愛硯家として知られてゐるものも唐の李賀の如きものもあるが、多くは宋以後である。蘇東坡を始め宋元明清とそれぞれ有名な愛硯家がある。殊に金冬心、高鳳翰、吳蘭修、吳繩年、紀曉嵐と云つた硯銘の上にその名の喧傳せらるゝものが随分ある。しかしあまりにその有名過ぎた名前傳へられてゐるものには怪しいのが多い。いつも見る所の例の、

建安十五年硯、大漢十年硯、王右軍硯、米芾古硯、東坡硯、董其昌硯、朱彝尊硯、黃莘田硯、乾隆御硯、顧二孃硯などの類はあまりに名のみ立派で却つて興のさめるものが多い。來歴や在銘は古硯第一の品位を定む可きものであるから之に重きをおく可きは勿論だが、さらばと云つていつでもその硯銘のみからすぐそれと速斷するわけにもまゐらぬのである。しかし日本には日本本

來の古硯以上多くの古唐硯が彼の地から渡來して居るので、支那古硯の趣味は徳川末以來今日にかけて大分普及してゐる。又近來硯譜、硯誌、硯史などの文献もよほど渡來したので一層その方面のことが詳細に研究せられ、石質のこともかなり明かに判るやうになつた。

日本に來遊せる支那の雅客で、端溪水巖の逸品の二三面ぐらゐは之を鞆に入れて携帶し時々愛玩せるものがある。故金紹城君の如きも日本に來て宿では卓上に名硯を出して愛用してゐられたのを見た。東都日本人側にも故宗星石伯の如き山口子の如き、又島田重禮博士の如き、また故加藤拓川翁の如き、故伊藤鼎翁の如きその他犬養木堂翁、故加藤正義翁、藤村義苗翁、武内金平翁、故和田豊治翁など、云ふ愛硯家が輩出し、近來また蜂須賀侯や淺野侯などの愛硯趣味に入らるゝあり又一般世間にもひろく趣味の普及を見んとしてゐる。もしそれ東都以外京阪地方から中國九州、臺灣にかけての地方の方を見んか、かなり猛烈に之が蒐集に力を致せるものあり、又よく石品の比較研究を試みてゐるものもある。

自分共も折にふれ日本内地は固より臺灣朝鮮に又滿洲、支那各地に意にまかせあるき廻り漫遊の途次隨分各所に古名硯の秘藏又は陳列を拜觀するの機があり、殊に支那各地方文人の藏硯家は大抵之を訪ね、又陳列の現場へも出かけて行き、又舊藏家の遺硯の觀賞とあらば田舎へも構はず出か

けて行つて見る。九江十里舖の李盛鐸の故宅なども訪ねて行つて見たり又濟南、萬其誼翁の硯室をも訪ねて見たりなどした。時には又硯山として宋代から知られたる安徽省歙州の故地山境にも分け入り採掘の現場をも一々たしかめて見たりなどしたこともある。かれこれするうち過去三十幾回の漫遊で既に四五萬の古名硯を支那人の處で涉獵拜觀をなしたのである。長江方面でも洞庭方面でも青島方面でも又錢塘紹興方面でも到るところ個人又は陳列の處を拜觀するのチャンスが出來、またその藏品の中の秘藏のものをそのまゝ鑑賞するやうなこともあつたのである。

支那民族との接觸交際は平生の心から打とけたる國民的交際にある。必ずしも表面の八釜しい外交的接觸のみではない。形式的の國交を重ねることのみが重大な意味を有してゐて、その他の平素の國民接觸はつまらぬ。又その價値もないものゝ如く軽く視んとする傾のあるのは吾人の贊する能はざる所である。一方正式の事の行はるゝ反面には必ずや私的交際と趣味的接觸が十分に行はれなくてはならぬのである。出來得るならばその家庭同士の接觸までも進めて行かなくては嘘である。十分双方の心持ちの通じあふ處まで行き、腹臆なく肝膽相照して語り合ふ處まで兩方の情緒が進んで來てゐなくては嘘である。本當の國民外交とはこゝを云ふのである。正面正式に堂々と交際し外交をやると云ふ檜舞臺のみが外交ではない。趣味的に又家庭的に行く方法を無視する如き態度は、

味趣・俗風

大支那系

甚だ核心に觸れない誤まれる考へと云ふべきである。

古視の趣味は高雅であつて一朝一夕に會得し得られぬなど、幽玄視するものがあるかも知れぬ。しかし支那の文人又は文人に近い人々は皆その趣味を解し、少なくともその古視に對する何等かの考へを發表し又筆に之を書き記す丈の素養を持つてゐる。従つて多くの紳士はペン、萬年筆黨であつても而かも書齋の卓上には端溪の名視の二三は紫檀の蓋子に入れて愛玩してゐるのである。その愛玩せるものに對して互に趣味を語り合ふこと愉快なことではない。況して遠來の客のありて之とその趣味の話をするは一見十年の知己の思ひがある。又話の上は何等さしさわりと云ふものが生じない。謂はゞ文墨の交はりと相似たる交はりであつてどこ迄行つても續く。又それからそれへと紹介もされ、主客相交じりて石品を論談し年代を品騰するのである。本來古視のことなどは既に國境を超超しての話であるから支那人とか、日本人とか云ふ區別など立てゝ考へる如き氣分もなくなつて了ふのである。趣味の友、心友とはこれを云ふのである。

古視愛玩趣味が取りなす縁と云ふものは意想外なものである。詩文、書畫の方の趣味だつて同じことである。すべて趣味からスタートした交際は美しく、光風霽月の情緒がある。東洋の外交界には是非とも此の氣分を理解し之を實行してもらひたいものである。友人の岩村成允君などは洵にその辦法によつて好印象を支那側に與へてゐたのであつたが、轉動の止むなきに至り惜しい事をした思ふにこゝには單に愛玩趣味のみがよいなど、狭いことを云ふのではない。何だつてよいがかう云つた文人的の風韻ある樂事でも以つて十分に支那側の趣味性となじみ合ひそして暖い懐のうちに抱かれると云ふ處まで漕付けて行くことが必要である。まさか當事者邊りでも氣付かぬでもあるまいが之を實行せんとするものゝ少ないのは物足りなく感ずるのである。

硯の道樂ぐらゐ世間に冷めたくて重くて固い道樂は天下にあるまい。どちらに轉ばせておいても大丈夫である。いくら寝かせておいても虫のつく氣遣ひがなく、いくら愛してゐても溺れる心配はない。いくら摩擦してこすつてゐても熱の出ることはない。こすればこするほど濃厚にはなる。けれども危ぶなげは斷じてない。重もたいからむやみに門外に持ち出すこともならない。これほど世に安全な道樂はない。家庭の平和を破るの心配などは毛頭ない。國際的に之を運用すればするほどその親善を増すばかりである。これが日本からは古來七八十種も産出してゐるが支那の方は尙多くそしてその石品がよく濃墨もよろしい。支那へ出かけて行つて硯を磨し文人墨客と硯品を談ずる。普通の金石の交りにも増して高雅の趣があるのである。

かう云つた愛硯趣味を國交上に應用するはその人の心から本氣で自然に湧き起つた行爲でなくて

風俗・趣味

支那古名硯の觀賞

大支那系

はならぬ。付け膏藥や、人の入れ智慧などでは駄目である。その事と互に相混和し合つた氣分の發露でなくてはならぬ。かくして始めてその趣味的情誼、氣分が十分に相通じ従つてその結果が自ら國交上にも及んで來るのである。

六十九 北平名流の古硯展觀

支那に客中支那各地の古名硯を短日月の間に觀て了ふことは不可能である。個人個人の處では、いざその愛藏せる名硯を見せるとなると云ふと逸品を選び出し、古書、拓本を比較に出し、また明墨、仙紙をそばにおき或は水盤に洗硯の水を用意すると云つた調子に中々大變である。その鑑賞の事に力を入れることは一通りではないのである。自分は別段日本を代表して見に來てゐる積りでも何でもないが、持主の方ではそのつもりでかなり準備に取りかゝる。有りがたくはあるが實はその爲めに氣の毒でかなはぬ。

北平だけの個人の愛硯珍硯を見るにした處で容易でない。武英殿の式にちやんと陳列していつでも見られるやうに棚においてあるならば、よろしいが一々態々出して見せるのでは却つて氣の毒である。主人は却つてしんみりとそうして語り合ひたいと云ふものもある。それはそれでよろしい。硯

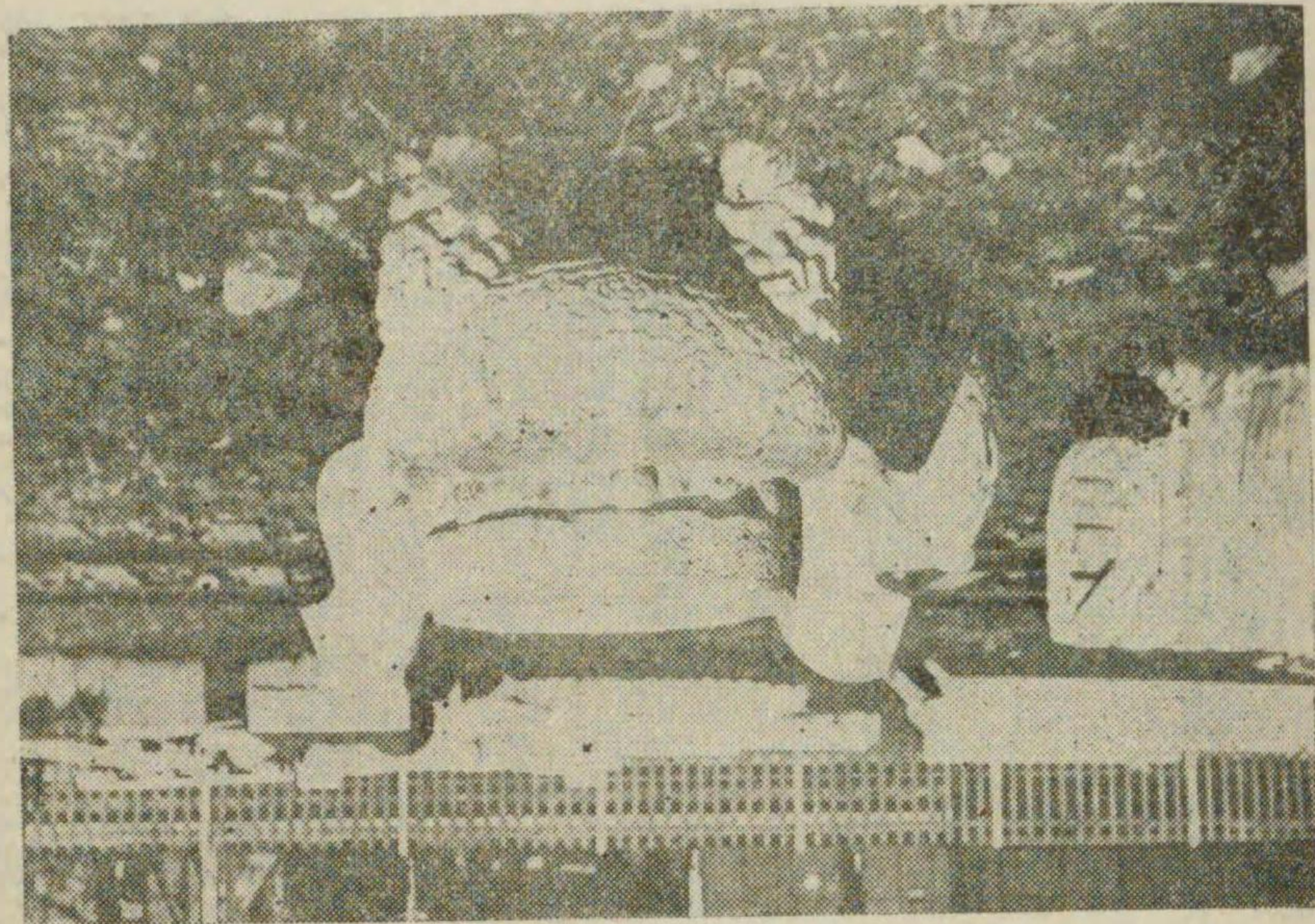
によつて親善を圖るのは殊によろしい。しかし多くの石質を集め端溪水巖魚腦凍なら魚腦凍のみの

比較でも試みてみたいと云ふときは一場の下に悉

くの珍品を持寄つてもらふに越したことはない。そこで北平で同志と相圖りその一々の邸宅を巡遊して廻つたりすることの代りに支那側の趣味者の諒解を得、こゝに第一回の「日支聯合の古名硯陳列會」

を催したのであつた。そして支那側からの發起人としてはその顔觸れに周肇祥翁、故金紹城翁、楊晋翁などがあつた。日本側は審計院の土屋法學士、加治華耕君、に自分どもであつた。そして之を支那新聞に發表し、部下の愛硯家は日支兩國の會の下に各自名硯を持寄り出品陳列せられたき旨を記したのである。固より一定の鑑査をして餘り意味をなさぬものは斷ると云ふ制限をした。ところが愈定日になると甘

風俗・趣味



乾隆時代の彫刻に成る大石の香爐

支那古名硯の觀賞

大支那大系

肅省の韓軍一君などからも洮河の緑石の今日出た新石があるから之を出品しようといふもあり、天津から持込む者があり、浙江省からも出品申込みの手紙が再度も来たといふ盛況を呈した。北京在留の文人にして定刻までに會場に出品して来たものは次の如く三百餘面に達したのである。

第一回中日名硯陳列會出品目錄（抄）

◎袁勵準氏出品

一、青花子石硯

硯質溫潤青花滿身上

端一活眼燕友暈微作

雲紋有五雲捧日之奇

二、宋燈泥石承硯

此真宋燈硯蓋有篆書

石函二字的係宋人刀法

三、子石九龍硯

有趙寒山一銘

此硯楮圓如玉璞四周琢

九龍常以雲物刀法渾

穆得未曾有

四、歙子石牛硯

歙硯難得子石此硯作全

牛形頭尾角咸具

刻工亦極精古

五、滿青花大硯

硯形略如風字上方燕友暈

下方青花余戲拈滕王閣賦

句意擬之曰落霞秋水硯

六、花落燕歸

黃莘田珍玩款

硯材敦厚硯質溫柔硯背淺琢双

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那大系

燕落花靜細如含元人畫本且青花
一曲斜泛落花取流水落花之意
琢池凸凹如掌最合古法邊際細鏤
波紋幾以荇藻尤為幽靚余戲以晏
小山無可奈何花落花古以曾相識燕歸
來詞意名之曰 花落燕歸硯

◎楊拜蘇氏出品

一、端石紫腴硯

大西洞石

王漁洋云石在水中溫如紫玉氣韻涑
厚隱々有青花濃細其眼圓大青碧
相間時帶黃赤暈數重此希世寶也
此硯有馬奮為端州守王長物

二、宋青州紅絲石硯

此硯綠質紅理間呈黃色燦爛

如五色雲發墨無此宋歐陽文

忠推為天下第一之青州紅絲石

即此物也有元人 字

會藏日光堂

三、宋澄泥石圖硯

製作古雅硯質堅緻而潤武

英殿古物陳列所亦有此硯

確實為宋物明清均有仿數

視此遠遜

四、端石銀河硯

魚腦橫亘硯中有層暈廻轉

相環生氣勃々上下兩方有馬尾紋二

如一串鵝鶩其外胭脂火捺圍之

真大西洞無上々品舊藏潘代遂初堂

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那大系

◎周養庵氏出品

一、松崖墨雨硯

端溪舊坑水巖石青花散亂

有斜風細雨三狀背刻松花

石甚工

二、粗羅紋硯

歙州舊坑羅紋極粗

而質細膩下墨發光不滲

三、喜上眉梢硯

舊坑歙州石長方眉子製爲秋葉

形上綴蜡子好詞料也

四、晉永康專硯

文曰永康元年五月廿日楊州丹陽

秣陵王氏制作陰文專罕見清

光緒中紅甯府出土

五、北齊瓦硯

有天保八年造字河南新出土

六、唐紫石硯

紫石有文如羅白斑如眼形

製古樸河南即唐塚出也

七、宋王大受硯

大受字宋可江西饒州人工

詩葉水心弟子也

八、伏牛井田硯

端溪舊坑石背有綠斑如拇

清色常山人王厚琢王莊

銘卡兆清曾藏

九、疊翠硯

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那系

清康熙癸丑朱彝尊鑑製

滿洲納蘭氏

十、清莊有恭硯

端溪舊坑水巖石有青花

魚腦火捺翠斑莊銘

所謂萃水洞之精華者也

十一、清林琮製硯

瑞溪舊坑水巖石齊壽一銘

豐山梁氏舊藏

十二、鹿巖精古舍藏硯 拓本第一集

計二十五開凡二十六硯

皆紹興周氏所藏

而養庵自銘者

十三、宛平查蓮坡硯譜

查浦號蓮坡工詞清初

居天津水西莊

計十二開凡二十四硯

十四、大興朱氏硯譜

朱筠字竹君號河博學

能文章著有筠河集

計十三開凡二十七硯

十五、清四詩人硯拓本

四詩人者徐鉉汪士鋐

洪亮吉胡澂也

硯藏紹興周氏

◎王廷璋氏出品

一、梅花古納硯

金農畫孫星衍題

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那大系

二、松下仙人硯

三、双桃硯古澄泥

四、端石鸚哥硯

◎熙寶臣氏出品

一、井硯（附拓本）

黃任刻

二、井硯（附拓本）

黃莘田刻

三、峽雲嶺月硯

林鹿原刻

四、漢磚硯

朱文正贈院文達之品

◎張文祁氏出品

一、宋澄泥虎符硯

古銅式

◎楊漱谷氏出品

一、澄泥古硯

◎韓軍一氏出品

一、甘肅洮河硯三種

◎金紹城氏出品

一、紫琳三腴硯

◎程清氏出品

一、端溪

◎蕉葉白火捺魚腦凍銘曰

海天浴日

◎故林萬里氏出品

一、端溪宋双龍硯

二、端溪歙刷總硯

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那系

三、端溪小魚腦硯

四、端溪大魚腦硯

五、端溪大青花硯

六、端溪小青花硯

◎三六橋氏出品

一、明端溪停琴觀瀑硯

端溪大壁銘曰文三橋

二、清端溪雙鳳研

青花納蘭成德舊藏

◎陳伏廬氏出品

一、宋澄泥 六稜

◎王文敏氏出品

一、四川蒲江石

◎邵厚夫氏出品

一、關微草堂硯譜

◎楊壽杞氏出品

一、山東尼山長方研

二、銘曰海天浴日

◎熙寶良氏出品

一、古鐘硯 端溪

◎寶沈厂氏出品

一、洮河綠石蟹硯

二、宋銀泥款石硯

三、唐荊川刻銘端石硯

四、凍眉公澄泥硯

高南阜舊藏

◎岩村成允氏出品

一、未央宮瓦硯

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那大系

二、乾隆端溪寶研

三、鑿黃天然研

四、端溪硯誌 吳蘭修

五、端溪硯誌 吳繩年

六、宋端溪天然研 豬肝色虫蛀

七、歙州長方研 金星羅紋

◎國本一瓢氏出品

一、枯葉小研

◎高田又四郎氏出品

一、青玉方研

二、明坑端溪方研

三、唐豆斑研 出土

◎林屋治三郎氏出品

一、六朝瓦硯

◎牛島吉郎氏出品

一、端溪方研 阮文達舊藏

◎平林正幹氏出品

一、宋長方歙研

◎佐藤汎愛氏出品

一、葫蘆青玉研 清田仙品銘

◎秦喜一郎氏出品

一、端溪長方研 黃龍

二、端溪方研 火捺魚腦

◎加治研農氏出品

一、紀曉嵐 硯譜

二、後藤石農 硯の栞 日本版

三、謝氏硯攷 不完本

四、大極小研 唐三彩

支那古名硯の觀賞

風俗・趣味

大支那系

- 五、歙州小研 羅紋呂紋
- 六、歙州長方宋研 水波羅紋 黼黻刻
- 七、小寶研 均黑
- 八、古瓦研 李唐時代
- 九、傳黑端小研 產地不詳 歐陽芳舊藏
- 十、山東紅絲小研 霞采杉本班 神品
- 十一、明坑端溪寶研 潤澤豐和 磨墨絕佳
- 十二、宋銅研 大史式
- 十三、端溪水巖寶研 海天浴日刻 火捺青花紋
- 十四、端溪仔石神品 火捺魚腦凍 青花胭脂暈
- 十五、雙履研 六朝青銅
- 十六、鳳蛋寶研 明坑蘋藻紋 金龍紋
- 十七、端溪古坑方研 明坑豬肝色
- 十八、宋端溪長方研 綠豆眼柱

風俗・趣味

- 十九、松花江長力小硯 康熙年製
- 二十、明坑端溪研 豬肝色乾隆刻
- 廿一、端溪七星研 火捺魚腦凍 燕支暈
- 廿二、端溪長方古研 明坑火捺
- 廿三、常山長方古研 朱勇舊藏
- 廿四、歙州長方研 卵石難紋
- 廿五、端溪長方研板 五采釘檳榔紋 韓調舊藏
- 廿六、歙州仔石 長眉子羅紋
- 廿七、古歙州兩面研 金銀蝠斑
- 廿八、長方抱真研 山東鼉磯島石
- 廿九、瓦當式泥研 漢千秋長安
- 三十、端溪自然研 火捺層雲紋
- 卅一、明坑天然端研 黑雨青花
- 卅二、傳歙州寶研 葡萄斑 趙南星銘

支那古名硯の觀賞

大支那大系

- 卅三、端溪長方研 火捺魚腦
- 卅四、宋歙州寶研 長眉子羅紋
- 卅五、宋歙州小研 刷絲羅紋 銀星
- 卅六、沙研 乾隆雕蓋
- 卅七、綠石寶研 陝西洮河
- 卅八、宋端溪小研 太史式鴨子刻
- 卅九、宋長方歙州研 瓠子羅紋
- 四十、端溪長方硯板

◎土屋禎二氏出品 駝蛋暈

- 一、端溪水巖研板 火捺魚腦凍 青花紋
- 二、乾隆均窰
- 三、宋端溪龍池研 太史式眼柱

——(以下略之)——

此れ等の出品は選りに選つた粒まりのものである。何れも貴重なもののみである。貴重品である

風俗・趣味

から取扱上こちらに手滌があつてはならぬ故に、定款以前その出品者は主人自ら自動車であつた。二條胡同の大和俱樂部の庭前に持込んでもらつた。何分時間は豫告の如くストリクトに民國十四年九月十三日午後一點鐘と云ふことにした。一點鐘より五點鐘正に至る四時間と限定したのであつた。さすがの大陸氣分の支那人ども、その時ばかりはかなりの殺到振りを見せ、續々會場から陳列場へと押しかけて見える。そして陳列會の閉會と同時に各自それく持ち歸つてもらひたいと云ふ觸れ出しを出したのであつた。會期中は愛硯家自身は皆自分の名硯のそばを離れず、中には名硯のそばに拓本やら古人の題跋などの軸物を掲げ、質問者に一々鄭寧に又慇懃に説明に餘念なきものもあり、日本の洗硯會の時と同じく清水を以つて頻りと硯面に潤ひを與へて火捺、青花、胭脂水暈を水巖の面に浮び出させしきりと之を鑑賞してゐるもあつた。

北京の社會日報社主林萬里翁の如きは巨軀を擁して終始愛硯六面を陳べた卓側に踞し、端溪の説明に最もこれ努めてゐられた。その後暮年ならずして翁は奉天軍の反赤化事件の筆禍が祟り奉軍兇手の爲めに天橋路で慘殺の悲運を見たのは氣の毒に堪へぬ。同翁が名硯會の記事を日報紙上に載せてゐるものがある。當日の様子の一般がよく知られるからこゝに採録する。

日本文學士後藤朝太郎君。日前來京。此君爲日本嗜硯大家。自云嗜硯成癖。幾視爲性命。迭次

支那古名硯の觀賞

大支那系

來草。均親至吾國產研各地。如廣東之肇慶。安徽之歙縣。湖南之灤溪。山東之青州等。足跡殆遍。且曾考其山川。尋其泉流。一生所收研石。其產地咸一一經過。考證甚詳。後藤君之辛苦。可謂不負石硯矣。昨日在單三條俱樂部。開中日名硯展覽會。京中蓄研之家。咸應約而至。各携所蓄到會陳列。琳瑯滿目。洋洋大觀。後藤君請余演說。因倉卒未有預備。略陳大概而退。即請後藤君演說。賀君爲任翻譯。君娓娓清談。聽者忘倦。自云與高南阜極相似。高氏嗜研甚深與己同。蓄研之多。亦同。南阜工左手書。君書亦左手。又歷舉日人蓄研。如犬養毅。如武內等六人。皆號稱與石爲友者也。又云中日以地理人種之關係。感情最洽。余竊願以研爲之媒。俾兩國士大夫。可以深相契合。近今學校青年。多習蠻行文字。視研漸輕。其實文房諸友。以研爲最。日人結婚有用研一雙爲賀者。受者疑之。君爲之解曰。以墨摩。研以研受墨。摩擦益久而益濃。而研不傷。譬之琴瑟好合。歷久而愛情愈益深固云云。後藤君語帶諛諧。雅而多雅。此等枯窘題目。能如是發揮盡致。可謂難能矣。君語畢。記者復起立答詞。謂中日兩國。能在文學上。往此結合。爲金石之交。吾人固甚願如後藤君之所言。聽者聽之四時餘即散會。來賓如袁珏生。楊拜蘇。寶瑞臣。熙寶臣。許修直。金拱北。三六橋。王廷璋。楊歎谷。白堅甫。陳伏廬。皆有佳石。余陳六硯於中几。中外人士。頗加注意。其實余之所陳亦至尋常。諸君所列。各有其獨到之處。

風俗・趣味

不能第其高下。余所最注目者三六橋。袁珏生。寶瑞臣之所藏也。日商西湖堂。亦逸品。尙當日是來觀者。以俱樂部之陳列會場。講演場。紅部屋すべてに溢るの盛況を示したのであつたがそのうちには次の雅客の顔ぶれが見えてゐた。

- | | | | | | | | |
|-----|-----|------|------|--------|------|------|------|
| 許卓然 | 狄定甫 | 寶熙 | 賀劍禪 | 管雲輕 | 周肇祥 | 袁其鏞 | 賀嗣章 |
| 鄭兆榮 | 劉奇 | 余天民 | 譚啓愷 | 趙學魯 | 楊晉 | 熙寶臣 | 徐涵生 |
| 陸定 | 韓軍一 | 袁勵準 | 吳綺川 | 查修 | 包括 | 程清 | 陳煥章 |
| 王笠漁 | 陳伏廬 | 林夢陶 | 岩村成允 | 白堅甫 | 王廷璋 | 山口察常 | 高木陸郎 |
| 金紹城 | 李瑞齡 | 張文祚 | 陳漢第 | 鄭晴 | 林萬里 | 張文武 | 林藻鑑 |
| 楊歎谷 | 林仲易 | 郤福瀛 | 中野江漢 | 平林正幹 | 今關壽齋 | 白伯延 | 三多 |
| 王韻笙 | 吳霖生 | 鮑行生 | 王廷璋 | 牛島吉部 | 翁銅士 | 小林和介 | 本庄繁 |
| 趙汝鎌 | 楊壽樞 | 土屋禎二 | 西田善藏 | 安藤萬吉 | 周槻 | 夏雲 | 沈伯棠 |
| 徐萬里 | 凌之潔 | 魏志傑 | 後藤石農 | 外三百八十名 | | | |

支那古名硯の觀賞

支那大系

ち出したらよかつたかも知れぬと思はれた位であつた。

もともと文雅の會のことであるから、ひっそり靜かに陳列し出品の比較を試みんかと考へたのである。日支愛硯家のしんみりした小會でもやるつもりであつたのがツイ北京の天地はさすが文墨のことにかけてはこの通り盛に行くところである。一時東京丸ノ内工業俱樂部、保險協會邊りで雅備をやつたときでもこれである。同じやうなものではあるがしかしこれも趣味普及の爲めにはよいことである。折角の持寄り會であるので十二分に深くしんみり味つて見たいと思つてゐたことは残念ながら果たし得なかつた。が硯の趣味の宣傳には大いに成功をした。出品陳列場の方ではあちらこちらから話しかけられるので、からだ一つでは足りない。講演會場の方では鈴が鳴り出したので開會が宣せられてゐる。林萬里翁や、楊晋翁、陳煥章翁、賀嗣章君あたりからせき立てられて講演をやらと云ふ風であつた。でも忙はしいのはいくら忙しくてもかまはぬ。目的が相手に十分の趣味的満足と與へるにあつたのであるからよいのである。

又石品の方に就いては山東紅絲石始め端溪の水巖、青花紋各種に就いてかなり詳細な意見を十年の知己林萬里君その他と交換し相語り合ひ、尙その述べ足らぬ處は講演の時に諸諺交じりに之を語り加へた。そして、硯なるものはさわれば冷めたいものではあるが、こすればこする程濃くなる

兩國の親善は此の硯の如く互に楯こすりあつて濃くなるやうありたいものだと言ふ國交論まで持出して硯談を結んだのであつた。

鹿爪らしい話もよいにはよいが時には風流韵士の集まれる席上かうして色々話に潤ひをつけた方がよいと信するのである。趣味で集まつてゐる者ぐらゐ心のおけないものはないのである。古硯の會を國交上の意味に用ひたのは慣例にはない事かも知れぬが、支那側でも日本側でも支那古名硯を愛するのあまり双方でこゝに落合つて來たのだから仕方がない。文雅の心は又期せずして自らそこに來たのである。硯の趣味には國境も議論も何もない。始めから悠然としてこゝに解け合つて來るのである。

思ふに雙橋の無電問題だとか、關稅會議だとか、かう云つた方の表向きの事はすべて理屈が先きになり論理を楯にとつてゐるから事が八釜しくなつて了ふ。時には趣味の會でも間に挿さめて、心の轉換をやるのが何よりである。無電だのフェデラルだの、三井だの議論のむし返しばかりをやつてゐてはいつ迄経つても同じことであらうと考へる。こは言葉は簡單であつても意味は深長なのである。

風俗・趣味

支那大系

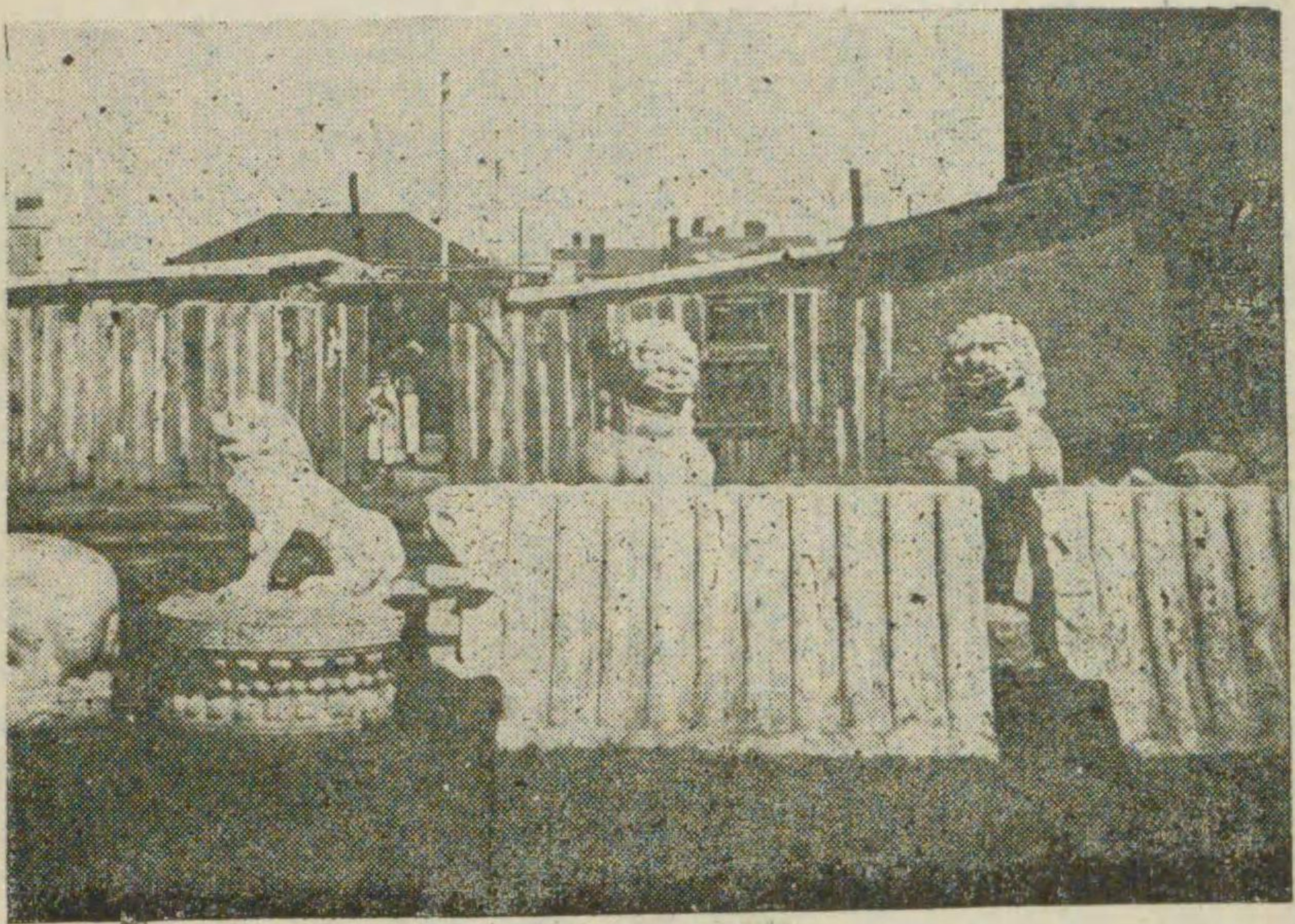
七十 文房具中に於ける端溪歙州の位置

硯と云へば世にそは端溪かと稱せられ、端溪とし云へば名硯の代表の語となつてゐる。道理で北京名流の持寄り會を備して見ても上述の出品目録に見えてゐる通りすべてが端溪本位である。これは北京瑠璃廠に出かけて延古、尊古、典古、式古、掃葉山房あたりの古玩店に行つても大體その通り同じことである。四牌樓や、後門邊りに出かけても「硯臺」を少しく漁つて見れば大抵これである。それ故に端溪の名が一層ひろがり又その石品が認められるのも偶然でないのである。

北京中日聯合の古硯會には端溪以外の名硯と云へば多少の歙州、澄泥、瓦硯、紅絲があつた位のものである。比較的日本人側は端溪の一方に偏せずすべからざる石質を集めようとする傾向が見えてゐるが、北京あたりの支那文人の處では端溪萬能の傾向がある。それ故に袁勵準翁、楊拜蘇翁、周養庵翁、林萬里翁、金紹城翁、三多翁、熙寶臣翁等の支那文人側の出品されたものは端溪に最も重きをおき、又その端溪のうちに傾る秀逸なるものが場内で異彩を放つてゐる。且つその持主はそれぞれその特色を一々明記して自分が之を愛玩する所以を擧げてゐる。又その傍には硯譜をおきて古人の著録のうちに見出さるゝ旨を證明してゐる。その邊はよほど學者的態度であり又一層深くそ

れの由來々歴を重んずるの風潮を示してゐるのである。

風俗・趣味



乾隆時代の彫刻に於ける樓牌の蓋と華表の上頭獅子飾

支那古名硯の觀賞

端溪に次いで歙州硯である。歙州は個人的に文人をその書齋に訪ねて見てもあまり多く藏してゐるものを見ない。従つて陳列のときにもさほど多くは出なかつた。日本に渡つて來てゐる古歙州にしてもそれは少ない。羅紋、龍尾總體を通じて考へて見ても端溪の十分一にも及ばない。しかし少ない丈にどこでも珍玩せられてゐる。従つて歙石の聲譽は端溪に劣つてはゐない。東坡は歙州石に同情をして端溪と歙州の二美人が宮廷に寵を得てゐる佳話を物語り歙州の寵愛日に衰へ端石之に代はるの有爲轉變を暗示してゐるのである。が事實數は少なくなつて居る丈物は益尊ばれてゐるのである。元來歙州の磨墨は非常に濃やかであつて端溪のそれとは味がちがふ。

大支那系

端は端としてよろしい處があり歛は歛としてよろしい處がある。従つて硯の様式や又彫刻からそれ
ぞれの區別がある。蓋子にも又その特色がある。大抵の場合その蓋子は手で之を取り去つて見な
くともその形から様子を見ればその感じで以つて中味が端石なるか歛石なるかの鑑別もつく。又時
には電話などの話だけでも全然初心の人々の要領を得にくい話の筋のうちから端石歛石何れかの區
別も大體わかる。これは四五萬もの澤山を見なくとも感じの上ですぐ判るのである。

日本では正金銀行の武内金平翁の端歛その他すべて六七百面もあるあり、藤村義苗翁の四百點、
土屋禎二君の三百點山口子の百餘點、故和田豊治翁の二百點、(今は喜多又藏翁の手に)又故伊藤鼎
翁の二百餘點などを始めとし大養木堂翁の處にも五六十點を下らないらしいものがある。がともか
かくの如く多く愛藏せられてゐるものは支那にも相應にたくさんある。四百五百と云ふのは見當
らぬが二百三百と云ふ程度のもは隨處にある。しかし手入れなどの十分に行届き眞に朝夕面倒を
見て手づから可愛がり珍玩することの出来るのは百點内外が手頃であるらしく思はれる。紫檀の蓋
も町寧に拭うてあり、毎朝自分の顔を洗ふとき一緒に清水で洗つてやると云ふものもゐるのである。
端溪歛州共に不公平のないやうに寵愛をしてゐるのである。陳列會に出品されたものなどからして
その大體を見ても實に手入れがよく清潔に蓋子も拭はれてゐる。却つてどうかすると日本人の方に

風俗・趣味

は二百三百五百と寶藏してゐても梅雨期の手入れが出来なかつたり、又指し物の蓋がバラバラに損
じ外れてゐたり、蓋が縮んでいくらどうしても中味が出なくなつてゐたり、甚だしきに至つては微
の生じて白き斑點が硯面の側に一パイ出来て洗つてもどうしても取れないと云ふやうに甚だしくな
つてゐるものもある。實に目も當てられぬひどいものがあるのである。

日本では山口子、故加藤正義翁、松方正作翁又正金の和田榮太郎翁などは愛硯の方の潔癖家だけ
にいつもこさつぱりときれいに手入れが出来てゐてうれしい。支那でも湖南長沙の易演村君の如き
その澤山愛藏はしてゐても手入れを怠つてゐるものもあるが、しかし一般から云ふと概して常に手
なれて感じのよいものもいつも愛玩してゐるのである。

北京の古硯陳列會で特に感じたことは此の頃誰れでも支那の名硯は大分日本に来て了つて支那に
よいものは残つて居るまい位に考へられてゐたのであるが事實はこの豫想を裏切り支那は矢張り何
と云つても大國である。あれだけの古名硯がそろひも揃つて依然として北京の文人の手許に珍藏さ
れてゐる。そのうちの最上の部のもで今日日本の愛硯家の手にあるものも随分ある。決して日本
に傳來してゐるものが劣つてゐるとは云へぬ。殊に端溪水巖の魚腦凍に至つては武内藤村兩翁並
に土屋君の處に之を求むならばよいものがいくらでもあると云つても過言でない。しかし青花紋の

大支那系

名品に至つてはまたかなりの逸品が、支那一流文人の處に秘藏する所となつてゐることが判つたのである。しかしそれは端溪に就いての話である。安徽の歙石に至つては玉帶であらうが魚子であらうが羅紋のよいものなど大分日本に來てゐる。取て北京一流のものと比べて遜色はないと云ひ得るのである。

澄泥に至つてはその逸品は日本にも少なく又北京にも少ない。貌州の鱗黄激泥の名品となると殊に少ない。黄泥、朱泥、白泥これらはいくらかある。が尙十分の研究と蒐集をつゞけて行きたいものと考へてゐる。

山東の青州紅絲石は北京ではその出品者も少なかつた。そして濟南城内あたりに見るやうな繊細な絲目のものはあまり見なかつた。紅絲こそ近年日本に多くわたつて來て了つたのではないかと思はれる位である。支那には目星しいものは殆んど見出されなかつたのである。

洮河の綠石は松花江の綠石と同じやうにこれ亦極めて少ない。しかし今日甘肅省の韓軍一君から現代の洮河石を出品してくれたのは非常によい参考となつた。洮河と云へば既に唐代で盡きて後世はなくなつたものとのみ考へられてゐた。今この新石を見出したこと丈でも此の名硯會を催したその甲斐があつたわけだと思はれるのである。尙韓君は北京で自分に云ふには折角のよい催しであ

風俗・趣味

つたからこの出品の名硯を集め、中田硯譜とでも云ふものをこの際作りたといつて奔走せられてゐられた。甘肅省のやうな僻遠の地から又えらい熱心な愛硯家が出たものである。かくて文房具中この古名硯に關する趣味の會は大要了解せられたことと思ふ。端溪や歙州が文人を引きつける力と云ふものはかくの如く非常なものである。すべて支那の人士は趣味の爲めとあらば城を傾けても構はぬ。十分に打ち込んで來るのである。その間に色々のことはあるが要するに敢へてどこ迄もはまるのである。支那人の國民性、民族性にはかう云ふゆとりのあるよい處がある。ゆとりのある風流な方面が奥ゆかしく眺められるのである。

日本ではそれをば支那の民族性の研究の足りない爲めか又その方面のことを輕んじ十分に理解せんとする氣分のない爲めか。ツイいつ迄も之を棄て、顧みないのである。そして趣味から國交を進めることをしないで理屈で行くことを以て本當の奥の手でもあると云ふやうに考へられてゐるらしく見える。これでいけない事に若し氣がついてゐるならば、一日も早くその方面の開拓に着手してもらひたいものである。

又平素その方面の風懷を有するだけの準備を必要とするのである。又かゝる風韻のある催しを理屈ぬきに時々やると云ふ氣運をば今後、國民全體の上に漲らせたいものであると深く信じて疑はない

いのである

十八 文人の幽齋

七十一 文人の情趣

北平は趣味の都であるから之を趣味的に味つて見ようとするならその方面でも無限に見るものがある。殊にその時代もの、古玩、文墨、書畫の方面の嗜好を持てる支那紳士文人墨客と云ふものは非常に多い、特別に文人顔をしてゐないものでも、ひと通りのテーストは何れも皆持つてゐる。又これに對する理解は十分持つてゐる。さてこそ日本人でも少しくその方面に心得のあるものは北平滞在の二年三年のうちに必ずや洛陽の馬を撫しクレイ・フィギュアの古玩を眺めて一種の快感を感じるに至るのである。

北平の個人の邸宅を訪うて自分共の趣味に合ひその興味ある文人的材料の多く秘藏されてゐたうちは數限りなくあるが、そのうちでも特に印象に残つてゐるところは左の數氏のうちである。

金紹城翁邸（民國十五年九月上海にて物故せらる。東城錢糧胡同）

許卓然翁邸（元印刷局長）

文人の幽齋

大支那系

毓朗貝勒未亡人邸（西四牌樓大街）

羅惇曼翁邸（前門外草廠頭條廣州會館）

楊漱谷君邸（東城、明の辛未狀元楊慎三十五代孫）

周肇祥翁邸（西城頭髮胡同、參議院議員）

邵嵩年翁邸（東單、溝沿頭）

楊晉翁邸（西城銅幌子胡同）

鄧初翁邸（後門三眼井三十三號）

程清翁（前門外）

その外大和俱樂部に開かれた中日聯合の古名硯陳列會の席上では林萬里翁（民國十五年奉天派の爲め殺害せらる。）袁勵準翁、陳煥章翁、寶熙翁、三多翁を始めとして幾多の文人どもにも會談何れこれらの風流韻士の愛藏せらるゝ珍什稀品は殆んどその人自身の生命の如きものと見てもよるしかるべく又實に愛撫措く能はざる所のものであつた。今一々これらの珍寶逸品に就いて挿話を叙述する丈の暇もないが、とも角も流石は支那である。中々の稀世の珍品がまだ北平には澤山残つてゐるものである哉と思はしめたのであつた。

風俗・趣味



江浙省內運河を心中とす水郷の綠蔭

文人の幽齋

日本人の眼では風人の愛玩するものに對する批評があまりきつぱりし過ぎて必ず、それを贗物か否かの二大別にす。そして曰くあれは模本だから駄目だあれは偽だ一刀兩斷的に劃然區別して考へ、そして偽をむやみに嫌ふの癖がある。こは日本人の潔癖性から來てゐるので容易に改めることは出来ない事であらうと思ふが、支那に行つてゐてもその考へが餘りにつき時は文人の趣味とは相容れなくなる。支那人の思想からすれば多くの場合に「物は模本でも少しも構はぬ。相當氣韻の生動してゐる努力の作であればよい。又年代が相當に經つて

大支那系

ればよいのである。必ずしも八釜しく云はぬ。眞蹟を隔つること紙一枚と云ふやうな批評もある位である。と考へられてゐる。支那でも随分詮議立てをすることもあるのであるが然かし日本で云ふ程に鋭くはやらない。婉曲であつて而かも肯綮に當つたところを行くのである。そして又批評の仕方よほど複雑で巧妙なものである。

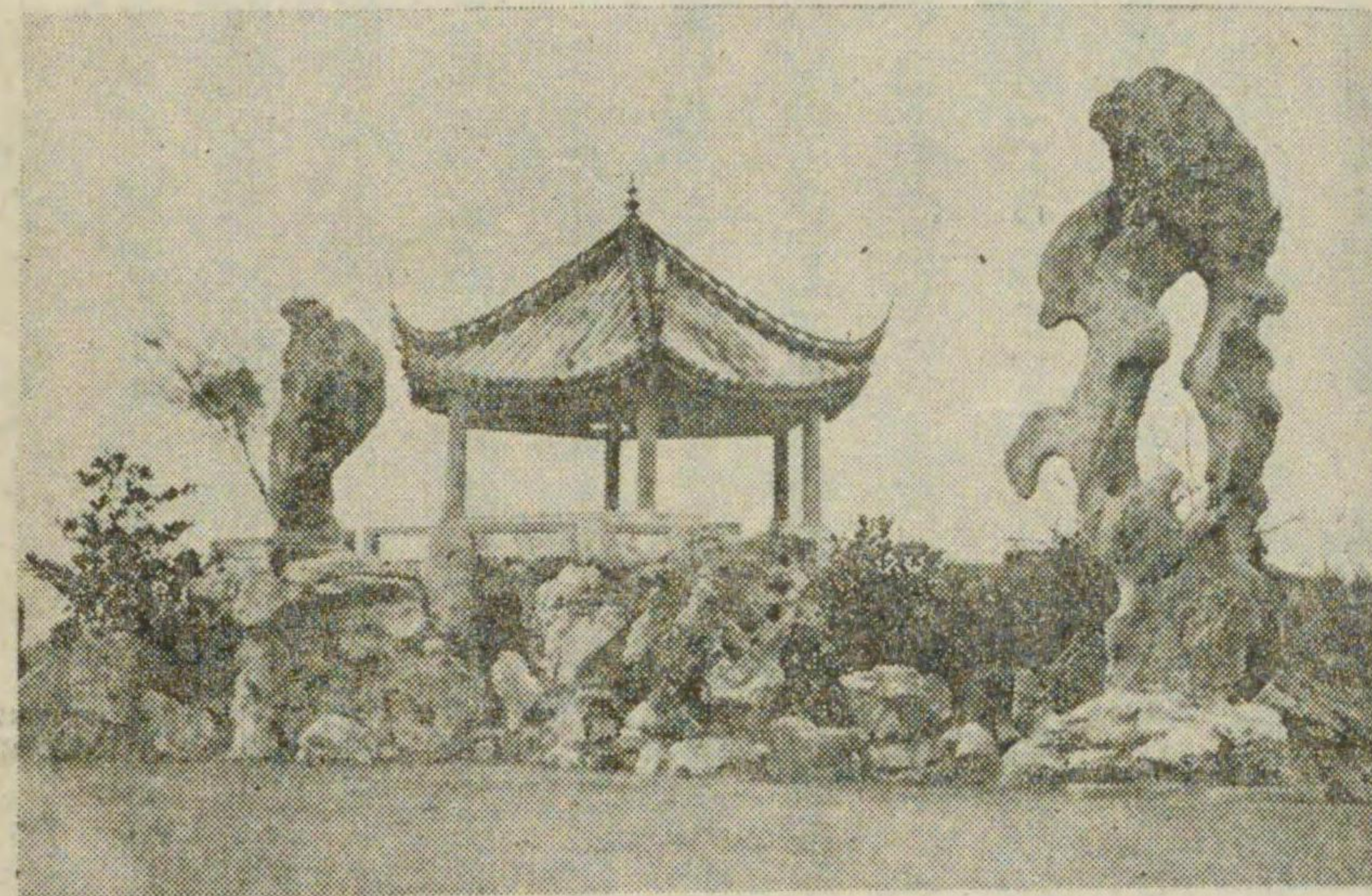
北平に遊ぶ雅客は期せずして延古齋だとか、尊古齋だとか掃葉山房だとか式古齋、典古齋だとか名のある瑠璃廠の店頭やその後邊兒の部屋に遊びに行つてこゝで珍品を清鑑しようとする。けれども瑠璃廠にはよく聯絡がとれてゐて稀世の珍品の陳列せらるゝこともないではないが少ない。極めてよい品物となると個人の邸宅にあるのである。

その方が多いやうである。個人のうちと云つても大抵その古玩の種類にもよることである。富翁の邸ならば畫軸、扇面、書卷、文房具と云つた様なもの、劉驥業君のうちならば田黄凍、雞血のその他各種の印材類、若し許翁、楊翁の邸ならば古硯と云つたやうにそれ々々専門的特色があるのである。

かやうな譯で印譜なり、書畫帖なり、法帖なり、卷軸なり、古銅器、陶磁なり、古錢なり、金石龜文の材料なり、古鏡なり、實に色々のものが特色を以つてコレクトされてゐる。中には孔明の陣

太鼓と云はれてゐる銅鼓のみを蒐藏せるものもあり、石鏡、布刀、古泉に傾注せるものもあり、洛陽の孟津の出土の馬、人物を畫せるものもあると云ふやう

風俗・趣味



江蘇省無錫梅園に見る大湖石と涼亭

な譯である。支那はかくの如く動亂續きの際であるから古玩を集めるやうな気分になりさうなものではない如く考へらるゝが事實は却つて逆である。動亂の際のことゝて却つてこのやうな時に田舎から物が出る。どさくさにまぎれて出る。又よい逸品、大もので米國へ持出さるゝやうなものも出ることがある。六朝石像の首の優品などが國外に運び出さるゝものはかなり近來多いやうである。

北平邊りで個人的招待を受け又度々遊びに行つてよく知つてゐる古玩、書畫の類は物の眞偽はとにかくとしてあまりその問題に觸れなくなつた。その問題を超越して親交を深くしたい方の氣分が濃厚になる。

文人の幽齋

大支那系

その強ひて切り込んだ質問を受けた場合の外は先づ研究的態度でいつも謙遜でゐるに限るのである
又多くの品數に當たつてゐる經驗のあるものには容易に勝てないのである。又書畫類であるとその
題跋の點、舊藏者の圖書印刻の蹟、御覽の印の眞偽、石渠寶笈の印のこと落款のしらべ鑑識がすぐ
出來なくてはならず、又古名硯ならばその金冬心にせよ、高鳳翰にせよ、乾隆御物にせよ、趙之謙
にせよ、その邊の刻銘がすぐ判らなくてはならぬのである。

文人墨客でその度々あつて氣心の知れてゐるものであれば、之を訪ねてもいきなり奥の書齋に通
される。そしていきなり名品、最愛の珍品を出して見せる。又豫め名品を出して陳列して世話の
ないやうにしてある場合が多いのである。そしてそれに對して突込んだ質問のある場合にはこちら
からも相當突込み又引かけても見て心の奥の方を語り合ふことが出来るのである。ところがえらい
主人公であつて、主人の方から品物をまだ目の前に出しもしない先きから、

「私の愛藏する天下第一品を見せませう」

「自分の秘藏する此の品物の右に出るものは恐らくあるまい」

「四百餘州を通じて皆之を所望しないものはないのだ」

など云ふやうな天狗になつてゐる主人には一等閉口するのである。文墨の道は互に謙遜の態度

を逸してはならぬ。又ドグマであつてはならぬ。研究の將來のあるものは必ずや辭を低くして相語
るのである。

しかし盛茂燦でも鄭板橋でも、又唐寅でも似ても似つかぬひどいものをメンタル・テストのつも
りで先方が壁にかけ書齋に入るやすぐいたすら半分に來訪の客に向かひ、いかにも引かゝる如く試
驗的に、

「いかゞでせう此の三幅は……」

と來たやうなときはこちらの腹の底でもすぐその事がわかりひどい物だなど云ふ氣持ちでもした
ならば、

「どうも稀に見る盛茂燦だ。自分のあたまにある盛茂燦とは全然ちがふ。いかゞでせう」

と逆にたゞみかけて見るがよろしい。うつかりワナに嵌まり込むと落第して了ふ。落第したら見く
びられる譯であるからあとからいくら出して見せるつもりで居ても、主人はあと見せて呉れる勇氣
がなくなつて了ふのである。速い話が、書畫でなく、かたいもので例へば宋代の端溪の太子式のも
のか、仔石の天然硯でも出して見てもらひその上で主人からまだあと色々逸品を出して鑑賞を仰ぎ
たい位に考へてゐる矢先き雅容がもし萬一之を指して、

文人の幽齋

風俗・趣味

大支那大系

「この歙州はよい名硯だ、珍しい」云々

など云つたとしたなら烏を驚とまちがへたと同じわけになるので此の一言で興が醒めてしまふ。それ故個人の邸宅を訪ねて支那の文人と語るときは、多少ともその方面の智識は初步の程度にもせよ持つてゐなくてはなるまい。それでなくてはでんで物に對する理解も何もつくまいと考へるのである。

だからと云つて支那文人との交際を又怖がつてゐては進歩しない。或る程度まではどこ迄も學問をして行かねばならぬ。又支那人と云つても皆が皆よい眞物のみを持つてゐるわけでもなく随分ひどいものをつかんでゐることもあるのである。實際にその悪意でもなく又試験的などでもなく主人公自身不明の致すところで驚を烏だと思ひ込んでゐるやうなこともあるのである。氣分のみで惚れ込んで手に入れたやうな物には時々いかさまもののある事がある。だから北平の文人のうちにあるからと云つて必ずしも侮ることは出来ない代りに又必ずしも恐るゝにも及ばぬ。氣が引けることはいらぬ。自分はかつて四五年前に山東濟南城內、萬其誼翁の邸内に古硯を拜見に出かけて行つたことがある。例によつてまた書齋の手前の大客廳に六七十面も陳列されてあるのを舊知の渡瀬二郎大人と見に行つたことがあつた。之をひとわり鑒し了つて自分の思ふ所をそのまゝ述べたところが

萬翁云ふ。

「閣下は硯石のことはよく研究をしてゐることが判つたから後邊兒の部屋に秘藏品のみ陳べてある所があるからどうぞこちらへ」

と大きく出られたことがあつた。これだから叶はぬ。自分はこれ迄支那や日本で既に五萬からの數を見て來た。それから安徽邊りの古來の硯石の産出する舊地の現場へも探險しに行つた事があると打明けてやりたく思つた位であつた。これは獨り萬翁計りでなく、かうした氣分で高くとまつてゐる文人もかなりゐるのである。萬翁はもと陸軍中將、軍人あがりの文人なのである。或は文人がもとで軍人の方は餘技かと思はるゝ位文房具の事にくはしくよく話もあひかなり面白く古今の名硯につき語り合つた次第であつた。

一日北平西城頭髮胡同の周養庵翁の家から古硯、古牌を見せるからとの事に車を驅つて友人と之に赴いた事があつた。周翁の大客廳其ものは金石を以つて飾られ四周の壁には古牌の拓を掲げ、室には中央に古硯の五六十面、賞觀用の水盤に水をたつぷりとそれから周圍に六朝隋唐以來の墓誌銘、碑、碣が列べられてあり又古墳より發掘せる土器類の各種が安置されてあつた。北平大學第三院國學研究所の陳列品などでもないが然かし選りぬいたよいものがあつた。硯は端溪歙州殊に端溪

風俗・趣味

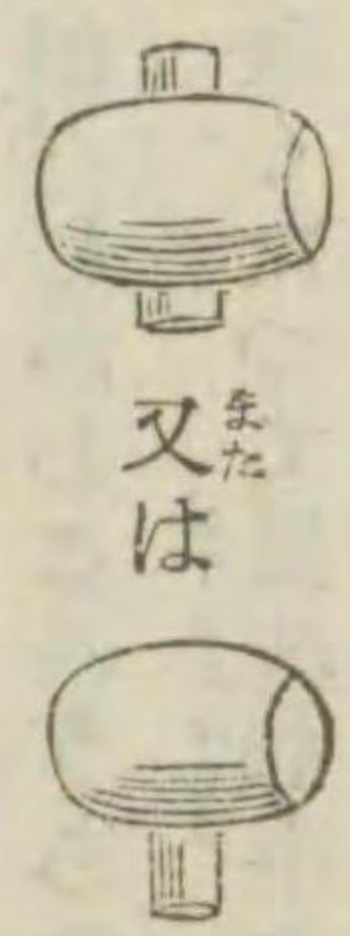
大支那系

の水巖の逸品在銘のものなども多くそして青花、火捺、檳榔紋、鸚鵡眼のそれなど頗る見ごたへのするものが最初から出してきてある。決してメンタル・テストの考へはなく、赤裸々に逸品ぞろひであつたのは愉快であつた。硯石研究の談話中たゞ紅絲そのものが端溪に就いて見出されると云ひ、全く紅絲らしいものを取り出されたのであつたがこは山東青州の紅絲石とは全然別の硯なるを辯じ、それによつてその語意のまぎらはしきを物語つておいたぐらゐることはあつたがあとは何等異説を挿むことは双方共になかつた。

周翁は先般も日本へ渡來せられ、東京上野の日華繪畫展覽會の時に度々あひ、北京でも繪畫美術方面の重鎮となつてゐる老紳士であることは世人も知つてゐる通りである。同翁の陳列室にあるものによく見るものであつて而かも未だ支那名を聞いてゐなかつたものがある。諸葛孔明以來陣中敵軍の來襲を豫知する場合に地中に埋めおき一部分その口もとの處のみ地面から出しておくものであると傳へられてゐる。さう云ふものが折よくそこに發見せられたのである。これは瑠瑠廠あたりには餘り見ないが、個人の集藏品中には出土品として時々見るものである。大きは大は三尺餘のものより小と一尺たらずのものもあり色々あるやうである。周翁珍藏のものは二尺餘りのものであつたと記憶するが、その名を聞いて見ると、

風俗・趣味

「ツオコウリン……諸葛鈴（孔明の鈴）」と云はるゝものであつて遠距離の進軍状態、方向も之を地中に入れて耳を當てゝ窺つてゐればよく判るのである」云々
これは面白い話である。日本へは支那の出土品は河南の馬だの人形俑の類は大分参考品として來てはゐるが、これ計りはまだ來て居らず、日本の學界へも全然傳はつてゐない。珍物なのである。



又はこのやうな形をしてゐる物で自分のこれ迄見たものは之に釉藥のかゝつてゐるものは見たことがない。すべて悉く素焼きのまゝである。こは疾くに日本の考古學界に紹介さるべきものであつてまだ知られてゐないものである。果して諸葛孔明の時代に巴蜀荆楚の地方で用ひられてゐたことがあつたか、どうかその邊の軍事上の事はよく調べて見た上でなくては確められぬにしても相當年代の經つてゐるものであることは明白であつてかなり古い時代から戦争、軍事の際の必需品であつたであらうと云ふことは推測し得らるゝのである。大體かくの如き事を周翁の寶藏品中より發見したと云ふことはもつつけの幸であつた譯である。

個人々々の自宅を訪ねてその愛藏品の展觀を許してもらふと云ふことは北平滯在中の客として必要なこと、その方面に學術的又趣味的に興味をもつもの忘れはならぬ事柄である。同時に、又それは蒐藏家に對する禮でもあると云へる。趣味の方から云へば國家を超越して四海朋友の譯で

大支那系

ある。「友あり遠方より来る。またたのしからずや」であつて遠來の珍客には萬障さし繰つて見せてくれる。本當の支那人にはどうかすると色々魂膽事情もあつて必ずしも簡單に見せるわけに行かない場合がある。ところが外人はそこへ行くと都合がよい。その代りにその物に就いて豫め胸に相當の準備が出来てゐなくては先方を失望させるわけでもあり又こちらでも恥をかくことになる。それで先づ少なくとも左の件々を、辨へておくことが大事である。

第一 その古玩、出土品、美術工藝に對する心からの趣味を持つてゐること

第二 その實物と實物の背景をなす學問上の知識と理解とを有すること

第三 その實物の觀賞に就いて相當の經驗に富み鑑別の心眼を有してゐること

第四 文雅の心の持主であり、公平無私であつて而かも禮儀と辭令をわきまへてゐること

これらは云はなくとも知れ切つたことではあるが、しかしこのうちのどれ一つ缺けても主客雙方が共に不愉快になる恐れがある。支那人は文人でなくたつて風流韻事を樂しむ性格を有してゐるからたとひ軍閥のガリガリに見えてゐるものでさへも、その心持ちで接して居る方が相手の心を理解する上にも便利である。この四つのどれも有しない人はさう云つた趣味津々の界限に出入する資格のない人であると云はれてもしかたがないのである。

更に進んだ話になると文人の交りには、その席に古書畫、古玩、出土器の外に豫めちやんと立派な新しい書畫帖の置いてあることがある。別の卓に墨もよく磨つてあり帖と筆、筆洗の仕度などされてゐるところが見えてゐることがある。心のうちでは、

「ははあ、仕度が出来るな」

と云つては見るがなるべく近くに寄らないやうに用心をしてゐるものもある。けれども主人の所望するがまゝに支那人どもは、

「待つてゐました」

とばかり何の苦もなく平仄をすらすらと行く。久保天隨翁の詩作よりもつと速く、電光石火と評してもよい位に行くのである。自分では近寄らぬやうに用心してゐても、はたの支那人どもは或は蘭竹を、又山水をと鄭板橋や藍田叔そつちのけに筆を運ぶ。畫がすむと自賛を入れる。速いこと速いこと、とてもかなはぬ。だんだん怪しく形勢不穩。じつとしてゐられなくなる。一番の初ばじめなら謙遜の意味で斷りもしようがお詰めとなると座を白けさせないやうに又一座の期待をも裏切らないやう揮毫しなくてはならなくなる。こゝが大事なことなのである。もしも合作のときなどかうなると中々の骨である。内心では、

風俗・趣味

支那の美術史

大支那大系

「折角の錦上に花を添へる丈の自信はないし、さらばと云つてぶち毀しもやりたくない。全然やらすに外の事で御茶を濁すわけにもまゐらない。ハテ困つたことだな」
 と思ふせば詰まつた悲劇を感じることは日本游客のうちには時々ある。若し少しでも筆を下せば支那人のことだから實にみな辭令でほめちぎるのである。本來やれる丈の自信もなくてこゝに出席をしたのだからかうした苦惱を見る結果になつたのである。自分は時々かゝるチャンスに日本の畫伯連が大きな聲では云へぬが席上衆人環視のうちで頻りと筆の穂先きを硯面の上で揃へてゐる計りで少しも勇氣が出ない。何を考へてゐるのか。まさか筆毛を揃へるが爲に出て來たわけでもあるまいに實際考へさせられる事がある。精神的には丸で書齋に囚はれてゐるの觀があるのである。實に同情は表すが今少しく大膽に且つ風懐に富んでゐてもらひたいものである。
 文墨の士、雅會を催す如き場合には、これは上述の用意が一層必要なのである。これは特に畫帖が出されるとか、畫箋紙が擴げらるゝとか云ふ場合は人を苦しめるとか、試験するとか云ふ惡意の企てにとつてはならぬ。もともと風流韻事の遊び群賢ことごとく集まつて、幽情を暢舒すれば足れりて何の遠感もいらなければ、情自ら成つて詩に現はれ畫方に出る丈のことである。特に書かされるとか恥を残すとか八釜しく考へないであつさりと恬淡な所を墨色にうつせばよい。要するに此

風俗・趣味

の印の清游の好印象を書に畫に形へ現はしておけばよいのであつて彫彫らしく考へない方がよろしいのである。又考へるべく餘儀なくさせると云ふは主人側の本意でもないのである。
 日本人はともすれば人の前でむやみに謙遜のつもりでその度を過ぎて或は座席の上下をいつまでも譲り合つたり、又請はるゝ畫帖に遂に遠慮の度を過ぎて了つて一筆も染めないで歸つて了ふやうな人がある。一應は謙遜して言うて見るのも奥床かしくてよい。殊に國際的に支那人の多く集まれる場合では餘りに圖々しくやるのも見にくい。けれどもそこは奈斯良夜何と云ふ主人の側の氣分をも汲んであつさりとやる方が主人に對し又他の客に對する禮でもある。つまりしほらしいのもよいが之には程度があつたものであることを繰返して云つておくのである。
 又大事をとる習慣の人は宿に歸つてから別に改めて書いて贈ると云ふ類のものもある。それも悪くはないが即興の聯想を期する記念の目的には添はなくなる。それ故何としても遊びに出かける時は携帶用の軽い平らたい圖書(關防、落款)の印材は用意して持つてゐなければならず又旅行中はその翌朝は先きへ旅立ちすらすると云ふこともある故、印だけをあとで宿まで取りに來てもらふわけにもいかなくなるのである。もしそれかう云つた揮毫畫作の趣嚮なく、單に考古資料や書畫古硯などの清鑒のみに了るとか。それともあとは庭内の別席にて清宴でも張らるゝやう用意されてゐる

大支那大系

如き時は却つてその面倒はなくなる。壁にかゝれる古人の聯でも誦じそばの倪雲林の山水を賞し又入口の王夢樓の書軸でも味つてゐればそれ丈であとはやがて用意の五味八珍をいたゞく榭亭の方へと請ぜらるゝのである。一晚に會を二つ約束してあるものは宴席半ばにして熱い手拭の來たとき顔を拭ふなりすぐ席を外して左右兩側の客や主賓に挨拶し、主人には豫め含めて諒解を得てあるので目禮をしてその儘失禮して行つてしまふのである。北平あたりのやうな交際社會の忙しくして又その事に慣れて居る文人どもはどうかすると中席することがかなりある。これも少人數のときにはそのやうなことは餘り見ないがやゝ大勢の會になると席を離るゝものが二三人は大抵あるやうであるこの邊の習慣もよく豫め承認してゐれば何の事はないのである。

個人としての文人墨客の幽邸で見た逸品はそのみちみちの名品である時は大抵いつ迄も自分の印象に残る。五年たつても十年たつても忘れないのである。後日幾年かを経て再び同品又は酷似のものを見たり、又日本某氏の處で見たりすることがある。思ひがけもない處で古玩書畫に再會する時ぐらゐ懐かしいことはない。殊に又鸞鳳瑞樹の薄肉刻りの端溪硯板の一対ものがその片われものとして一つが北平黑卿の裏に拜見された後約五六ヶ月も経つて全然縁もゆかりもない南支長江筋などにそのあとの片われに邂逅することなどがある。本来一緒に必ずあるべき筈の姉妹硯である

にその風流を解しない持主がどうかすると、例へば一方を賢者に全憲の記念にとて之を贈呈した爲めあと他の一方のみしか今残つてゐない云々など話さるゝものがある。自分がかゝる場合には、老婆心ながら云つておく。

「本来これは一対で函入りになり體をなしてゐたものである。彫刻の圖案から云つても確かに相對してゐるものである。之を二面、同じものが重複してゐる如く思つて一方を餘計のもの如く考へて他にやつて了ふなどは硯の性を破壊したものである」

と説いてやるのである。しかしともかく一人の文人の處で見たものと酷似したものを他の處で見ると時は之をその友に報じてやりそのものの許に還らしむやうなことを勧むることもある。

尙若し文人の愛藏品珍品の拜見に出かくる時には自己の愛藏品にしてその餘りかさばらない程度の小品ならば乗り物に入れて持参し來會者の批評を求めて見るも一興である。大いさ二三寸程度の六朝鍍金佛であるとか、又小さい鍍金の虎符の如きもの又小硯、文鎮、搬指の類のものならば結構である。洗硯會の如き陳列中に一點を加へるつもりで之を持参するも妙である。これらは同好の士の集りであるならば主人に對する禮であり且つ研究の爲めにもよい事である。若しそれ寫眞のカメラでも持参し得るならば一層妙である。その各品を撮影し又主客一同を撮影してその日の好記念と

風俗・趣味

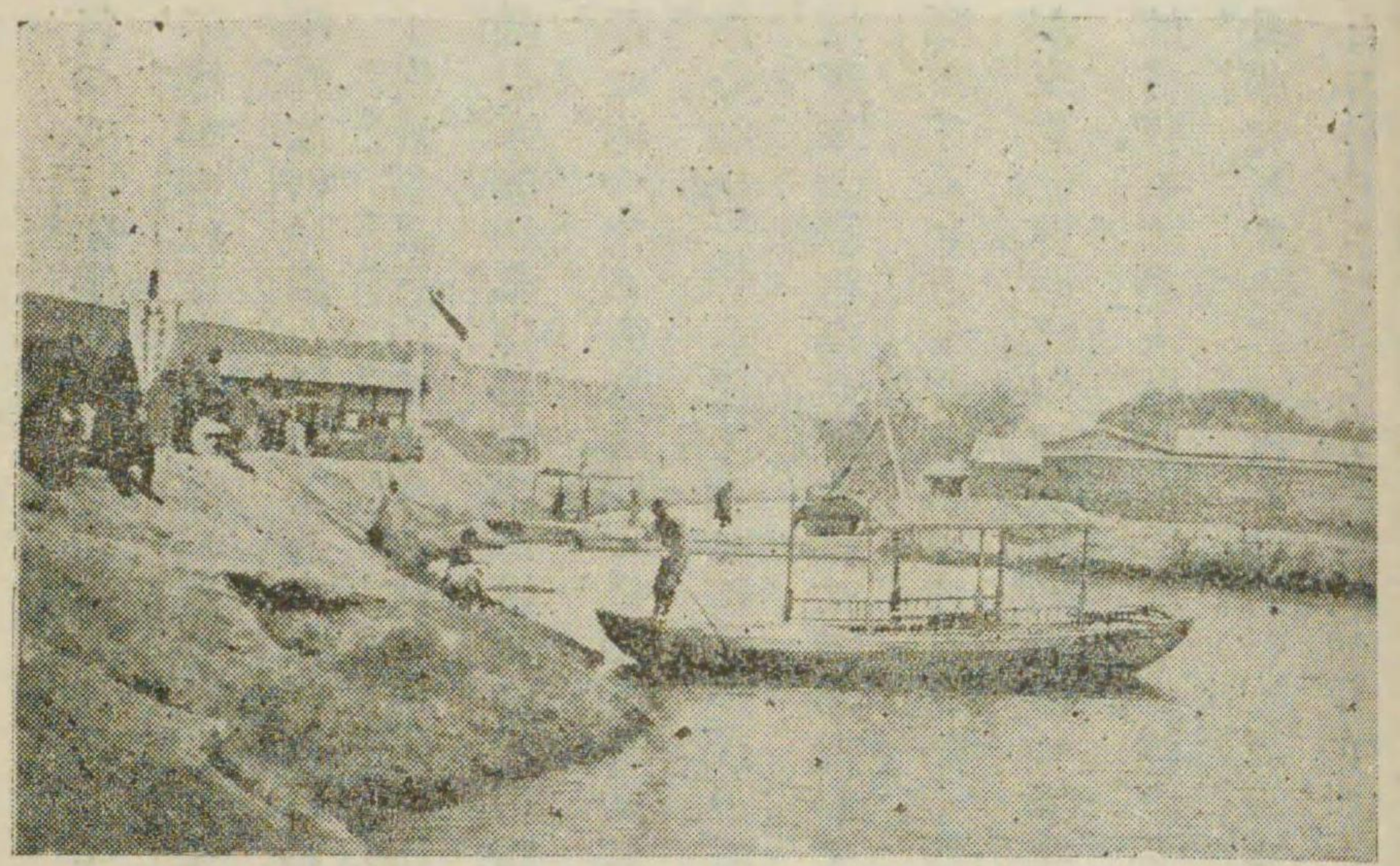
大支那大系

なす如きは最も有意義のことであると思ふ。
 唯謹しむ可きは日本の煎茶家の寄り合ひのあとなどのやうに歸途必ず名器のとき落ろしをやり皮肉やら婉曲な駄評やらを加へて悪口すとか云ふやうなことは考ふ可きことである。蔭口とかこきたなき批評とかは文雅の士の齊しく忌みきらふ所であるからその邊には特に注意があつて然るべきことと思ふのである。

七十二 水村山郭の詩韻

支那が文字國と考へさせられて居たのはよい加減なものである。狭い意味の文人墨客又は學者の書齋或は文淵閣、文瀾閣、天一閣など云へる圖書館の側からのみ見る時はさも四百餘州全體が文字國なるが如くに眩惑されてゐるとも云ひ得る。けれどもその方面を違へて、否更に一步を進めてひろく支那各地を實地に行脚して廻つて見ると、どうして文字國など云ふことは斷じて當らない。論語や孟子は固より赤本黄表紙式の一見哈哈大笑その他の卑俗なものでも普及してゐる範圍と云ふものは洵に狭い。交通のかなり便利な田舎でも先づ自己の姓名さへも筆の執れないと云ふ手合ひが八割乃至九割も占めてゐる。

風俗・趣味



北平城外アチルニ水の郷に見る舟

文人の幽齋

日本の盤居してゐる漢籍からのみ支那を見る。英京師圖書館や商務印書館の蔵の書から支那を見る。そうすると支那はえらい文字國のやうに見える。けれども一度城外に踏み出して支那社會の實相に觸れて見ると、支那のアンテイ文字國と云ふが眞の支那の眞面目と云ひたいやうな氣持ちがしてならぬのである。支那は遠くで蟄居でもして眺めてゐる間の方が花である。現實に行つて見たら文字國など口ひろい事を云つてゐた手前が氣恥かしくなる。それといふが自分で自分の言に對する反證をいくらでも擧げ得る材料が開展されて來るから仕方がないのである。露骨に云へば今も昔も文獻を離れて支那四百餘州を大觀すれば日に一丁字のないのが原則として事實であつて九牛の一毛ぐらゐりもつとパーセンテージの少ないものが字を知つてゐるに過ぎぬ。まして況んや田舎に出かけて

大支那大系

行つて康熙字典の事など話に出して見たところでテンデ理解がありはしない。これは各地方の孔子廟が春秋は固より年中草薙々で狐狸の巢となつてゐる現實の社會相と共に支那の精神文化の案外なのに驚かされる有力な材料なのである。

自分が最近山東齊魯の故地に遊び田單の故地を訪ね、即墨の知縣鳳文祺翁との面晤のあと、即墨の文廟に参拜しに出かけたのであつた。知事から案内まで付けてくれたのはよかつたが孔廟の内庭と云つたらとても踏み込めたものでなかつた。實に廢頽して狐狸どころか蛇蝮の巢くふ所となり無心の檜柏も仕方なしに生ひ茂りて、康熙乾隆あたりのありし當時の黄金時代を偲ばせてゐるに過ぎない哀れな状態を見せてゐたのである。山東の膝下でさへも、曲阜の文廟の盛事一つを以つて類推することを許されざることかくの如くである。實にたよりない話である。否かくの如くあるのが支那社會心理の常態原則であつて北平や曲阜のその如きは例外と見ると云ふ考へになつてゐれば失望も落膽もないのである。つまり日本で考へてゐることを眞逆さまにいつも裏を考へて支那の世相を見てゐて丁度よろしい。眞正面からのみ莫迦正直に律義に考へてゐると云ふことはよい加減なものである。こゝに氣がつかずに支那民族の心理を掴み得た如く思ふのはお芽出度い方である。文字のことも之と同じやうなものであつて、その文字現象の裏面觀を云へばあきれる程のことがある。

。耐用の鞍轡の袋杖、餘里、蘇戸に撒げらるゝものを見ると一見その戸々住宅には文字の讀み得る人が居る如く見られる。試みに家の主人に就いてその文字のことを聞いて見ても聞く支那野暮である何となれば毎年田舎の村夫子達が佳句を紅紙に書いてくれたのを譯判らずに求めて來て正月之を門に貼付する丈のことである。又城内に出かけて行つて大晦日の晩買ひ求めて來たと云つてゐるものもある。要は形式的に紅いものを門に貼つておけばよいと云ふに止まる。その發音や意味のことなど少しも念頭に止めては無い。いやはや御尤も至極のわけである。

里閭の庠序學堂のあることは古來八釜しく書物には記されてある。支那といふ所は書物は書物、社會は社會で、別々に行はれてゐる面白ところである。權威と底力とは二者のうちそのどちらに多いか、俄にきめにくい。けれども事實は何よりも有力であるとの眞理が許されるならば、學堂で兒童の讀書、咿唔の聲の洩れ聞えてゐるといふ所は田舎に這入ると洵に少ない。滅多に農村なんかでは見當らないのである。無限にひろい支那の山村水郭のことであるから、之を一概に斷定するわけには行かないがしかし何と云つても教育の事にかけると神經質な日本人のあたまで考へてゐるやうな緊張した空氣は更にはない。實におつとりしたものである。唯ボーとして磅礫たる氣宇が漲つてゐることを痛切に感ずる許りである。

風俗・趣味

犬支那大系

かやうに見て来ると支那四百餘州の山村水郭は目に一丁字だも辨へたものゝ居らず、殺風景極まるものなるかの如く速断せらるゝであらう。然かり或はその觀察も眞理であると云ひ得る。片田舎の旅行のつまらぬと云つて江南の田舎さへも足を踏み込むもの少ないのもその爲めである。紹興から蘭亭、慈谿、餘姚のあの邊でさへも振り向くものが殆んどない。そして北平だの上海だの武昌長沙あたりにのみ接してゐる。都會地もよろしいが自分は田舎は田舎としての特別の趣を感受してゐる。決して殺風景どころか、趣味津津たるものがあるのである。そのたとひ平沙萬里人煙を絶つと云ふところにしろ、又孤帆遠影碧空に盡くる所にしろ無限の面白味が湧き起る。自らその閑雲野鶴をきめ込んでゐるわけでもないが、興は自ら煙波の間に在り、行く所山水に隨ひ、實際、江山待つあるが如き感じがしてゐる。支那大陸の大自然は吾人の幽情を暢舒し、桃花流水は確かに自分共を磁石の如くに牽きつける力を有してゐるかの感がある。田舎の気分は棄てがたいところがある

湖水經秋平似鏡

蓮花破曉白如霜。

借問行路人四面雲山誰作主

坐觀參釣者五湖烟水獨忘機。

書卷莫教春色老

柴門不爲俗人開。

兩卷一生顔氏樂

清風千古伯夷賢。

などその田舎に見る気分は、これらの聯文の示す如く、たしかに琴を抱いて鶴去を看、石に枕して雲歸を待つといった気分が漲つてゐる。田舎の大自然の情趣に對して片くるしく窮屈に之を批評してはならぬ。大自然そのものは一種の文字であり文章であり詩賦であると考へなくては嘘である。唐詩を味つて見ても、その心持ちはよく理解される。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

李 白

故人西辭黃鶴樓

煙花三月下揚州

孤帆遠影碧空盡

惟見長江天際流

江村即事

司空曙

罷釣歸來不繫船

江村月落正堪眠

縱然一夜風吹去

唯在蘆花淺水邊

西庭春望

賈 主

日長風暖柳青青

北雁歸飛入窅冥

岳陽樓上聞吹笛

能使春心滿洞庭

文人の幽齋

風俗・趣味

大支那系

峨眉山月歌

李白

峨眉山月半輪秋

影入平羌江水流

夜發清溪向三峽

思君不見下渝州

水郭山村を辿り辿つて峨眉山月の映する岷江の流れに棹し唐の李白の下つた同じ水上を渝州、即ち今日の重慶まで下つて見た。或はまた輕舟に身を寄せて朝に辭す白帝彩雲の間をやつて千里の江陵（荊州）一日にして還ると云ふところをも體驗して見た。かゝる經驗を今日實地に自分でやつて見ると八釜しい文字などはどうでもよい。山村は高くその兩岸に聳ゆる峰の上に、あの白雲生ずる所あたり人家が見えてゐると指顧されるのである。文字よりも詩よりも何よりも先づ自分共の韻趣を咬るものは此の大自然の景致である。又それに配せられたる山村水郭の風致である。江南、洞庭の水郷も悪くはないが、三峽以上の詩趣は又となくよろしい。流轉の江上に遊んで居ながら陸翁や井井居士と白帝城を話題に指顧談笑してゐるやうな気分になつて了ふ。文人であるないの論はどうでもよい。その大自然そのものがすべてその畫中の人間を文人化して溶ろかして了ふのである。されば支那山村水郭に漲る文人氣分の魅力と云ふものは、たいした底力を有するものであると禮讚せざるを得ないのである。

風俗・趣味

それ計りでなく時には頼る快心の字を江上に讀むことがある。たとひその文字は村夫子が書いたのにせよ、誰れが書いたのにせよ。誰れだつてよろしい。その文字の意味が全く氣に入る。文人墨客の風韻を漾はせてゐるのである。長江は潯陽江の迹なる琵琶亭の古刹のほとりの舟遊びに不圖民船の苦の兩脇を眺めて見ると天下の廬山をパツクに舟居の聯が振つてゐる。聯は大きくはない。さゝやかな木札の如きものであるがその聯文に曰く。

高枕隨流水

雲水無拘束

輕帆任遠風

江天任去留

とある。飛んで江南は浙江に出て、錢塘江から運河により蘭亭のほとり樓公、禹王廟から曹娥に渡り、錦江の義渡で渡し舟に乗る。百官の驛に出る爲めには是非とも此の義渡によるのである。が扁舟の聯文その筆蹟覺束なく白紙に書いて貼り付けてある。清風徐ろに來たつて水波興らず。客と曹娥の昔しを語りつゝ不圖その聯文の句を讀む。曰く、

波平兩岸潤

風順一帆懸

と對岸百官の工程重地閑人莫入の札のかゝれる衙門の牆外桃花の紅なる色も鮮かに眺めらるゝのと併せ落花流水の風情は此の渡船の上に十二分に味ふことが出来るのである。岸に着き丘上の茶亭

文人の幽齋

大支那大系

に憩ひ錦江緑野の春色を賞する誠にわるくない。兩岸の景趣であつてひとりで見えてゐるなどは勿體ない氣持がしてならぬ。

七十三 萬家の春聯

北平城内、チエンメンワイ(前門外)は大柵欄の邊りから南へかけて、大晦日の晩に夜市の光景を見がてら銀ブラをやつて見る。あの寒い嚴冬の大地に冷えるのを物ともせず紅紙の年聯をうんと所せばき迄に陳べてゐる。一々之を讀んで見るのも大變であるが、楹聯大全か何かから轉寫したものも多數あるらしい。各種各様の聯句が面白く揮毫されてあつて、墨色もアセチリン瓦斯に映えて美しく見えてゐる。先づ始めに讀まれるは

百年燕翼惟修徳 萬里鵬程在讀書。

萬年民國長和樂 一統山河際太平。

徳行動天地 著作壽山河。

暮春之初蘭亭修禊 七月既望赤壁泛舟。

と云ふ類のものが一對づつ展げられてある。又その重なつてゐるのを見ると吉星高照平安宅とか千

紫萬紅總是春とか云ふやうなのがいくつでもある。その長劍一盃酒、高樓萬里心と云つたやうな五

字句のものの方が多し。更にその内容の方から見ると、その商賈各方面のものを總べて取りそろへ、酒館、人參店、藥材店、浴堂、照相館、成衣局と各界のものがある。その次に見ゆる

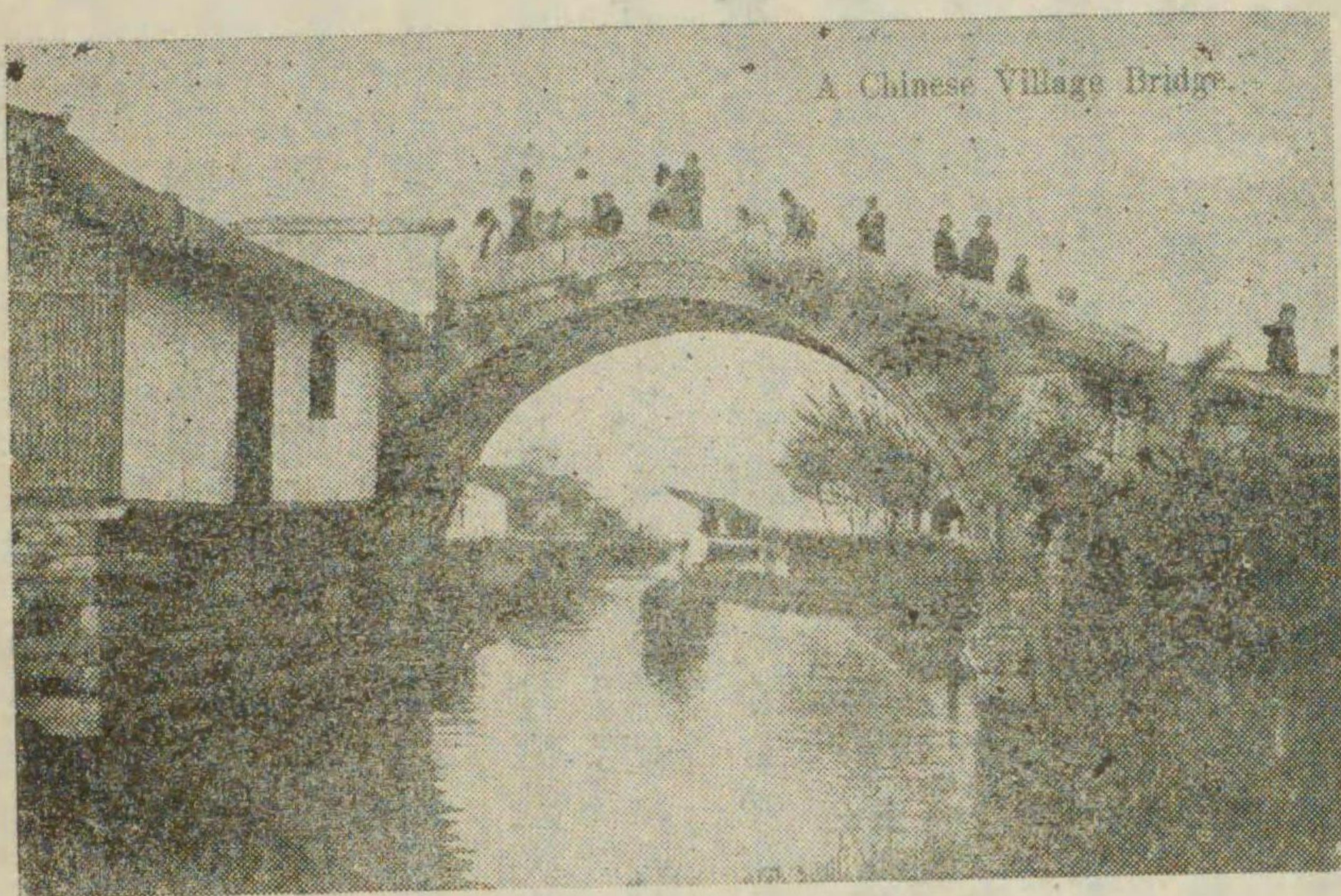
美味偏招雲外客 清香能引洞中仙。

浩歌不覺乾坤小 酣飲方知日月長。

などとあるは李白の遺風を傳ふる吟香閣あたりに向くものであつて、一見直ちにその酒館用たることを知るものである。聞香下馬など云ふや、挑發的のものもあつたりなどする。大抵その句意を察すればその聯の應用せらるゝ所が判明するのである。例へばよく見るものであるが

架上丹丸長生妙藥 壺中日月不老仙齡。

風俗・趣味



江蘇省蘇州田舍運河架石橋

文人の幽齋

支那大系

石池春暖人宜浴 水閣冬温客更多。
(藥材店) (澡堂)

秦鏡如懸機關參透 廬山在此面目留眞。
(照相館)

雞距鹿毛花開五夜 鼠鬚麟角筆掃千軍。
(筆店)

夏鼎商彝陳列滿座 隋珠和璧價值連城。
(古玩店)

翰墨圖書皆成鳳采 往來談笑盡是鴻儒。
(書局)

などと云つた風に、それぞれ適切なものが出来てゐる。さればその文字を一見しただけで以つて甘受最宜和五味とあれば糖行に向くものたるを知り、松柏多材持大廈などとあらば木行に應用せらるべきを知るのである。固よりこれらは中にその據り處のあるものもあつて、王羲之の蘭亭序から摘録するとか、その他古人の佳句から取つたものも色々あつて存外風韻に充ちてゐるのである。月並の東壁圖書府、西園翰墨林。など云ふはさらにあつて珍らしくもないが中には随分興味の多いのがある。君子不憂貧などと云つたやうな負け惜みの強い句が貧家の門前に讀まるゝなどは殊に面白い。城内大街胡同の各所に見る對子は正月に貼りかへらるゝので冬季北平に遊んでゐると殊に興味が多い。支那は各省各地すべて原則として年聯の古風の行はれてゐる筈であるが、しかし北平が一等

風俗・趣味

よくこの古習を守つてゐる。又よい句が北平に一番多く見出される。地方では地方にもよりけりであるが、北平ほどまとまらない。たまによいものもある。けれども農家などでどうかすると之を出さないうちもある。朝鮮邊りでも咸鏡道の方へ行くと門聯を目撃するが白紙を用ひてゐるので興がさめる。凶事のあつたところでも白紙を用ひてゐるのは變だ。折角掲げる位なら紅紙を用ひた

いものである。
支那各地年聯の情緒は洵に人心を和げる。又いかにも支那らしい風習であつてこれは永久に保存したい。たとひその毎戸その家で書くのではなく前門外あたりで買ひ求めて來るものであつてもよい。又その文字の意味が了解されてゐないのも少々困るが、それにしても正月が來れば之を必ず貼り代へると云ふ美習は慥かに支那の文字氣分、文學氣分を漲らせる所以であつて、自分共は特に之を嬉しく感ずるのである。ともすれば新しい青年などかゝる古習はやめて了ひたいなどと叫んでゐるものもあるが考へのない話である。行路の人の心はこれが爲めにどれ位美化せられ文人化せられるか判らぬ。この爲めに教化せられるときよりは山川風物すべてがさう云つた氣分を漲らせてゐるところへ、この聯を見ればいかにも調和した光景を毎戸に眺めらるゝわけであつて、その全體の風流味は支那古來歴朝文學の餘韻を民國の今日に漾はせてゐるものとも解せらるゝのである。

大支那大系

門聯はひとり正月のときのみに限らず冠婚喪祭の際には固より雙十節國慶日のとき又は開店祝賀故人の追悼などのときにもかなり思ひ切つて立派なのが掲げられる。時としてその室内に用ひらるゝ金色燦爛たる對子にしてその戸外に掲げらるゝこともある。かつて雙十節國慶日の前日四川省は省長鄧錫侯驃威將軍のところに遊び翰墨談に耽り古印を玩賞したりなどしてゐたとき、邸内の一房に文人どもの墨戲が始まつてゐるらしかつたのでその方へ行つて見た。ところが四十恰好の文人姿をした先生が頻りに卓によつて羊毛の大筆を弄してゐる。上海吳昌碩翁や王一亭翁あたりの運筆とは違つて中々に敦厚な氣分を浮べてねんばりとやつてゐる。しかし次から次へと譯なく片付けて行くところ慣れたものである。日本見たやうに、人に吞まれたり紙や筆に吞まれて澁つてゐるのとは違ひ、巴蜀の空にかゝる彩雲をバツクに涼しくすらすと書いてゐる。かなり長い紙聯であつたがその文字に

四萬里版圖山河依舊

五百兆民庶日月重光

民族共和紀念雙十節

萬民有慶永享太平年

と、或はまた異彩放開雙十節。共和永樂萬千春なども書いてゐた。たいして氣にとめたり頭をひねつたりはしないのである。鄧錫侯四川省長が遠來の客にとて親しく揮毫してくれたものは次の聯で

後藤先生雅正

雙自千里而來將利吾國

商聞四海之內皆是弟兄

晉康鄧錫侯□□

ある。これに雙十佳節の爲のものでなく専ら自分の爲に物せられたものであるから入蜀記念に東都自宅の支那室に吊して楽しみ眺めてゐる。曰く、

風俗・趣味

文人の幽齋

東都鹽谷青山翁古稀翰墨帖を携帶して行つて四川の名流に讀を書き入れしてもらつたのも此の雙十佳節前後の事である。支那各省城内に見る聯文の書は之を單に出來あがつたものみに就いて見るのでなく、その揮毫をやつてゐる書齋なり又その文房具の出し散らかされたる場面を見ることは一層興味のあることである。勿論坊間齋ぐ所のありふれた聯などは墨汁を歙州の圓硯に流し込み無雜作にやつてゐるのでかゝる場面などは却つて興のさめるものである。が大體に於いて支那の聯なるものは各地方共に之には相當熱をこめて書いてゐるのであるから之によつて文人氣分を味ふことは面白い。もしそれ趙之謙あたりのもので出宰山水縣讀書松桂林（光緒八年二月之謙□□）と云つた類のものになると新しいものではあるがその筆蹟の見事なので専門家の間でも喜ばれるのである。又必ずしも物は紅紙でなくとも板に彫刻をしたもの、青貝の螺鈿の施されたもの、又壁に塗

り込みにした聯の、石刻にした聯など色々のもがある。何れであつても結構なものである。こゝには山東曲阜孔令貽あたりの聯の筆蹟を寫眞で示したのであるが餘白がないので割愛をしておく。

七十四 文人幽居の情

文人の風格は山月にも齊しく世塵を超脱して清香の氣分を常に漾はしめてゐるが、又其所に懐かしみがある。漫漫たる長江を舟で上り彭澤縣で五柳先生の故蹟を左岸丘上に眺めるときには陶淵明歸去來の風懷を思ひ出す。更に潯陽江頭の遺址から廬山に遊び香爐峯から五老峯、含鄱嶺の突兀たる大自然に接しそれから南へ急轉直下、白鹿洞書院やら秀峰寺、李白の飛流直下三千丈の瀑布を打眺め更に又羲之の歸宗寺あたり迄すべて巡歴したあとで例の五柳先生の後裔のゐる柴桑里を訪ねて見る。

柴桑里の山峽に入ると竹林があつてそこには今日陶家の子孫だと自ら銘打つてゐるうちが二軒ある。どちらが總本家であるか戸籍しらべはとも出来ないがどちらだつてよろしい。云ふがまゝに聞いておけばよろしいのである。それよりも更にその竹林に沿うて峽中へ奥深く入ると淵明石に醉ふ



西江省九江廬山山下に見る農村收穫の時光景

文人の幽齋

と云つた醉石の蟠踞してゐるのが小瀑布を前にして溪谷に跨つてゐる。蔦がづらをつかまへて足場を求め求めしつづ漸く石上にあがつて見た。淵明を崇拜し淵明にあやかる逸士の連中の石刻が磨崖でいくつでも見出される。五柳先生の此に酒を携へ石に枕し假裝してゐた六朝晉の時代の氣分がそのまゝ今も残つてゐる。誰れ人の之を訪ふたやうな形迹もなければも岩間を傳はり迎り迎りて流るゝその小瀑布こそは十間ばかりの小規模のものであるとは云へ如何にも淵明氣分を代表してゐるものと云へる。此の幽谷の詩趣は位置が廬

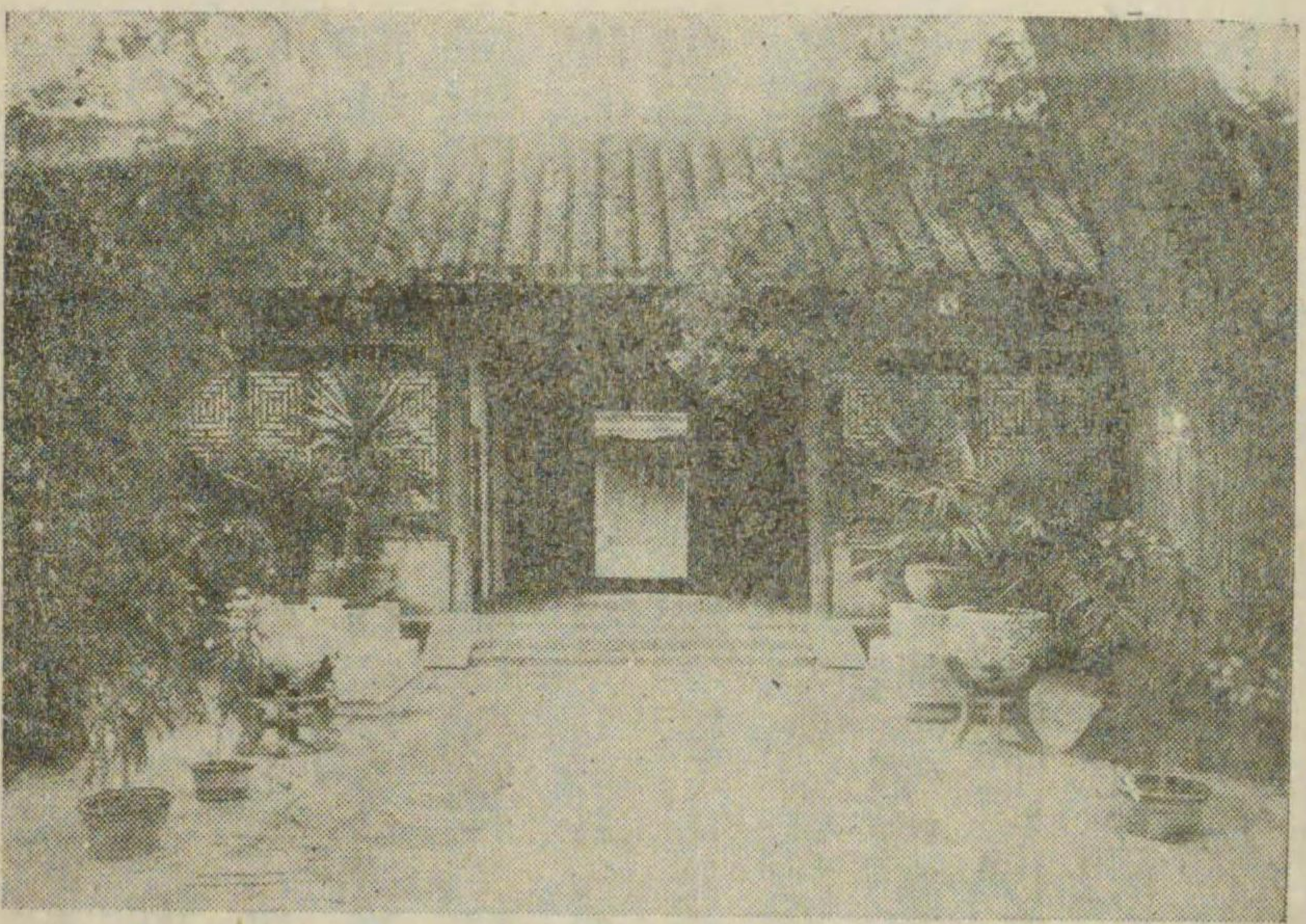
大支那系

山の避暑客などから荒らされない偏避のところにある丈に、よく昔の佛をそのまゝ傳へてゐるのである。

東林寺西林寺の前に在る虎溪三笑のあとの邊りからして又十里鋪の周濂溪の墓陵の光景邊りなども皆その當時を物語れる懐しみのあるもののみである。けれども南麓の柴桑里はとりわけ文人氣分の濃厚であつて淵明の風格を偲ばせ當時の幽居の秋の情緒を味ふには持つて來いの處である。思ふに支那の文人墨客の詩賦著作はすべて皆かゝる實際の遺蹟に持つて來て照し合はし熟讀玩味すべきである。固より日本流の日本語讀みや訓讀ではなく支那音でその音調を味ひ樂しみつゝその情緒の深い處をキヤツチしたくては嘘である。日本の今日のやり方では定めし淵明も地下に顔をしかめてゐることであらうと思ふ。

又王羲之の墨池のある歸宗寺は柴桑里から程遠からぬ處にあつて羲之の石刻、拓本などを見るこゝとが出来るが果して本ものかどうだか。それよりも浙江會稽道は蘭亭の故蹟の方がゆかしい。酒の名所の紹興から舟行半日にしてある驢馬で山陰にまで分け入る。わけのない處である。親しく行つて見るとかつて癸丑の歲東京、京都で蘭亭會の雅催の開かれた際天下の珍卷、寶軸がたくさん集まつた。之を見て自分は其の蘭亭序の文意と併せ考へてゐた蘭亭などは丸きり違つてゐる處である

風俗・趣味



北平内城上流家庭内小景、槐樹の蔭に君の子の遙

ことを知つた。千四五百年を経てゐる晉代と民國の今日とであるからたしかに霜星の上に大變な距離はあるわけではあるが、それにしても支那歴代の畫家文人の描いた蘭亭繪卷の光景はあまりに想像に勝つてゐる。曲水のありさまも大變違ふ。今は梅林の多くして曲水の水も豊かに溢るゝばかりで全體が清楚に出來てゐる。昔の繪に見る國柄は何れも皆あまりにこてこてと濃婉に出來過ぎてゐて清香の氣分に乏しい。流觴曲水のほとりに群賢を畢く集め幽情を暢舒したと云ふ氣分はこの實際の景趣を見て始めて成る程さうであらうと思はれるのである。朝鮮慶州跑石亭の曲水の遊びの石組みなども浙江の本當のものとは構造も規模も丸きりちがふ。浙江の山中のかなり大きな溪流をそのまゝ境内に利用してゐるので實に盛なものである。驢馬をとどめて江南の

文人の幽齋

大支那系

張雨耕君とふたりで十二分に鷺池の石刻や、曲水のほとり飛亭、後庭に遊びて幽情を暢舒しスケツ
チをとりなどして王右軍の當時の情緒を髣髴せしめ得た氣持がしたのであつた。
又方角はちがふがすつと奥の方では四川の幽境に這入つて見ると文人の遺蹟を見出すことがな
り多い。先づ第一に杜甫のゐたと云ふ四川の夔州（今の夔府）に行つて見た。前後四年間に杜
甫がゐた間に宅は三度遷つてゐるが、そのうちの一つに白帝城と云ふ有名な處のあることは世人の
周知のことである。今日學校の教科書類に挿畫として入れられたるは白帝城でない。別の東方の丘
陵をそれと間違へて平氣で示してあるのである。杜甫の時代の白帝城は文風塔を隔て、西方の山
中腹に今もその城壁の廢墟の如くになつた輪郭がそのまゝ雲霧の間に見えてゐる。城壁の中は殆ん
ど廢屋も留めない位になつてゐるが杜少陵集でも引合ひにその故地を捜し求めたら面白いことと思
はれる。尙又三峽を越えて奥地叙州宜賓縣に進まんか。宋黄山谷の謫せられてゐた涪溪と云ふ處が
ある。文人の風格のあるものは罪を得て謫徙せられるとその爲めに地方地方で悲歌慷慨の作が出来
後世に名を遺すことになる。四川三峽の奥の如き天下の絶景の處に追ひやられたのは表面は流罪で
あつても實は游學を命じて配所の月を眺むるの機を與へてやつたものとも云へる。謂はゞ適材適所
のわけであるとも云ひ得るのである。妙な理窟であるがかやうにも考へられないことはない。

風俗・趣味

詩人と云はず畫人と云はず又學者と云はず世に名をなしてゐない文人で田舎の山村水郭に文人生
活を送つてゐる者は甚だ多い。日本では殊に詩人、畫伯、書家、學者とこまかく八釜しく區別が立
てられてゐるが、支那の文人は少なくとも詩書畫の三拍子揃つたものを云ふのである。實際はその
上に風格があり學問のあるものがその文人と云はれてゐる場合が多い。詩文に長けてゐて書畫に堪
能であること云ふ丈ではミニマムの條件なのである。潮州へ流さるゝとか涪州へ徙さるゝとか云ふ異
郷の地に謫せらるゝときはその土地の山川風物が際立ちて鋭く題材に使はれ後世にもその爲めに宣
傳せらるゝ結果になる場合が多いのである。又支那はその山間僻地に這入るとたとひ畫は描けない
ものでも南畫の心持が十分に理解されて來て詩文書道に長じて來るやうになる者が相當に多い。又
文人墨客としての資格のある韻士または高士と稱して尊敬すべき人々もかなり澤山ある。今日田舎
でその風流な文墨の雅會の催さるゝ時に集り會して來る者を見ても如何にその文人肌の人士の多い
かゞ判る。一方に目に一丁字なきものは山村の八九割を占めてゐることを上に述べておいたのであ
るがしかし又その文字のある人となると頗る又造詣も深く詩作上の活躍となると殊に眼覺しい腕を
見せる。そしてその即席の詩は興に乗じ若しやその文人がもと廣東人であると廣東音で（北平の朱
祺翁の如く）又浙江人であると浙江音で吟じあげる。四川音は北平音と殆んど區別のない位に近い

文人の幽齋

大支那系

がそれにしても四川にあつて峨眉山月半輪秋の唐詩を土音で以つて聞かされる丈でも幽情を唆らるる氣持ちがするのである。

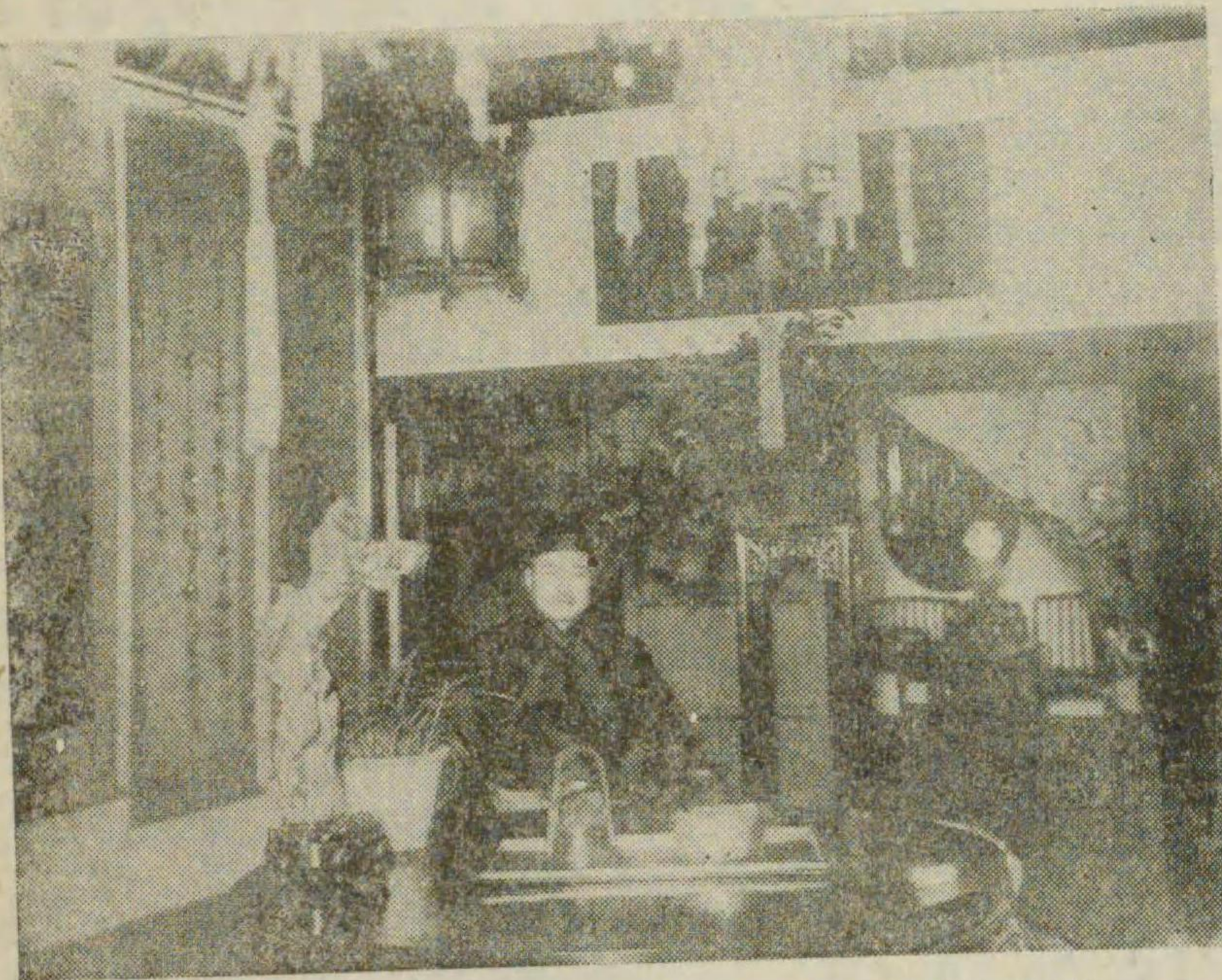
要するに支那では特別に文人と云ふものが仕立てられるのではなく自らその環境の呑みりとした悠悠迫らざる生活振りと山川風物の大陸的氣分が自ら文人質氣を作り上げて來てゐるのである勿論過去の歴史も之に手傳つてゐるわけではあるが、ともかくも支那文人は一種特別のもので日本の如き骨がましく細かい事にうるさく取り合つてゐなければ社會生存の出來ないと云ふやうな舞臺には、支那文人のタイプは容易に生れて來ないであらうと思はれるのである。

七十五 文人の書齋

長沙と蘇州と上海の間を去來してゐられた故葉德輝老先生が嘗て蘇州城内は曹家巷泰仁里六號に居られたときのことであつた。自分は一日蘇州に遊んで老先生を訪ふた。先生は節山大人の恩師として又説文小學の方面で造詣の深き老先生として知られてゐることは云ふを待たない。泰仁里の樓上、書齋に通される。四壁圖書にて溢れん計りの群書のうちに納まりそろそろ談話が交はさるる。長沙と蘇州の比較を四方山話の如くにして語り出ると葉先生には書棚から宋史列傳を取り出され、

その四百四十五卷文苑しを繙き指して云はるるに

風俗・趣味



東都牛込船河原支那室に納まれば先生の風懷

文人の幽齋

「此の地は乃ち我が祖宗の地で」

「宋史にもこの通り見えてゐるが宋少保葉夢得と云ひ我が第六世の祖の居たところで自分はその三十三世孫に當るわけで」云々
とまた語を轉じて、大連圖書館の松崎翁の事に及ぶ。曰く、

「松崎鶴雄與鹽谷溫同在門下、問字、松崎左門下尤久。(中略)。東游極所心喜、但秋景不如春景、明年櫻花時節或者可以與諸君子作十日遊耶。」

などと溫容親しみの情濃やかに語りつづけてゐられたのであつた。そこ迄はよかつたがやがて虎の巻と覺しき手帖を取り出され支那諸名流の

運命、天命、壽命の論などを書き記したる處を讀みあげられ八卦の講釋が始まり先生年來のその壽命に關する千里眼的中せる實例まで證據を擧げて逐一説明せらるるに至つた。そこでこれは矢張り東洋獨特の精神學であつて心眼で直覺するの秘法を會得してゐらるる先生である哉と云ふことも察せられたのであつた。つまり老先生には劇のことから小學、八卦に至るまで頗る多方面の趣味を披瀝せられてゐられたのであつた。爾來說文解字、龜甲文字等のことに就いては數度文通を辱うしてゐる。ところでその後上海で吳昌碩翁と坐談の間に蘇州葉翁の噂をしてゐたら始めは吳翁高年のせゐでもあるか一向に思ひ出されない。色々說文暗誦の得意の造詣のあることなど特徴のある處を話し出したところがやつと思ひ出したと見え、吳昌碩翁は破顔一番、あの老顔の上顎を前に突き出し顔面筋肉を面白く動かし文人畫を描く右手の五本指をそろへ上顎の處へ當ててそつと廂を作つた手付き。吳翁殊更らに語少なく、

「これでせう、思ひ出しました」

と哄笑。こゝに葉老先生の人相話などをしては禮を失するわけになるかも知れぬが吳翁の手付きで暗示された如く葉翁はひどい反齒で上齒が廂の如く出てゐる恰好であられたのである。極端なる反齒でそれを特色としてゐらるるのであるから一度會へば誰れも忘れられぬほどである。

浙江吳山の下の清河坊にも文人で面白い張先生がゐる。この人の特徴は右手に六本の指を有して母指が二才並んでゐるのである。當人は平氣であるが、わきのものは氣になつて叶はぬ。これも一度會へば忘れられぬ。文人にはかう云つた特色の顯著なものが時に見當たるのである。又湖南の長沙の城外白沙井と云ふところに易演村と云ふ文人がゐる。圖書館長をしてゐる人だけに、自邸に於いても書齋は書物の中に埋もつてゐる。少しも頓着のない人でおつとりした好好爺である。書齋は人に少しも掃除させないものと見えて文具類でも何でも塵にまみれてひどくなつてゐるのだが全く平氣である。その萬事にボーとした處に文人氣質のよい處が現はれてゐる。人にもよりにけりであらうが概して江浙浙江方面では文人もこさつぱりとして書齋も清楚に出來てゐるが奥の方に這入ると必ずしもさうでない。上海佛租界にゐる章太炎翁の如きは文人と云ふよりは文章家と云ふ方であらうが、かなり書齋や身なり共に構はぬ方である。それにしてもまたよい方でその書物棚のうちに埋もつてゐる點は同じやうなものである。その猫背で散髪をしない風貌と云つたら實に何とも云ひやうがない。それでゐてあの通り天下の明文、毒舌を揮ふ筆端の鋭さは夙に世人の周知のことであるから贅するの必要もあるまい。そこへ行くと福建の陳寶琛老先生などは實に穩やかなものである。今は宣統廢帝について天津に出かけられ羅振玉翁などと皇帝のお相手をしてゐられる

系大那支大

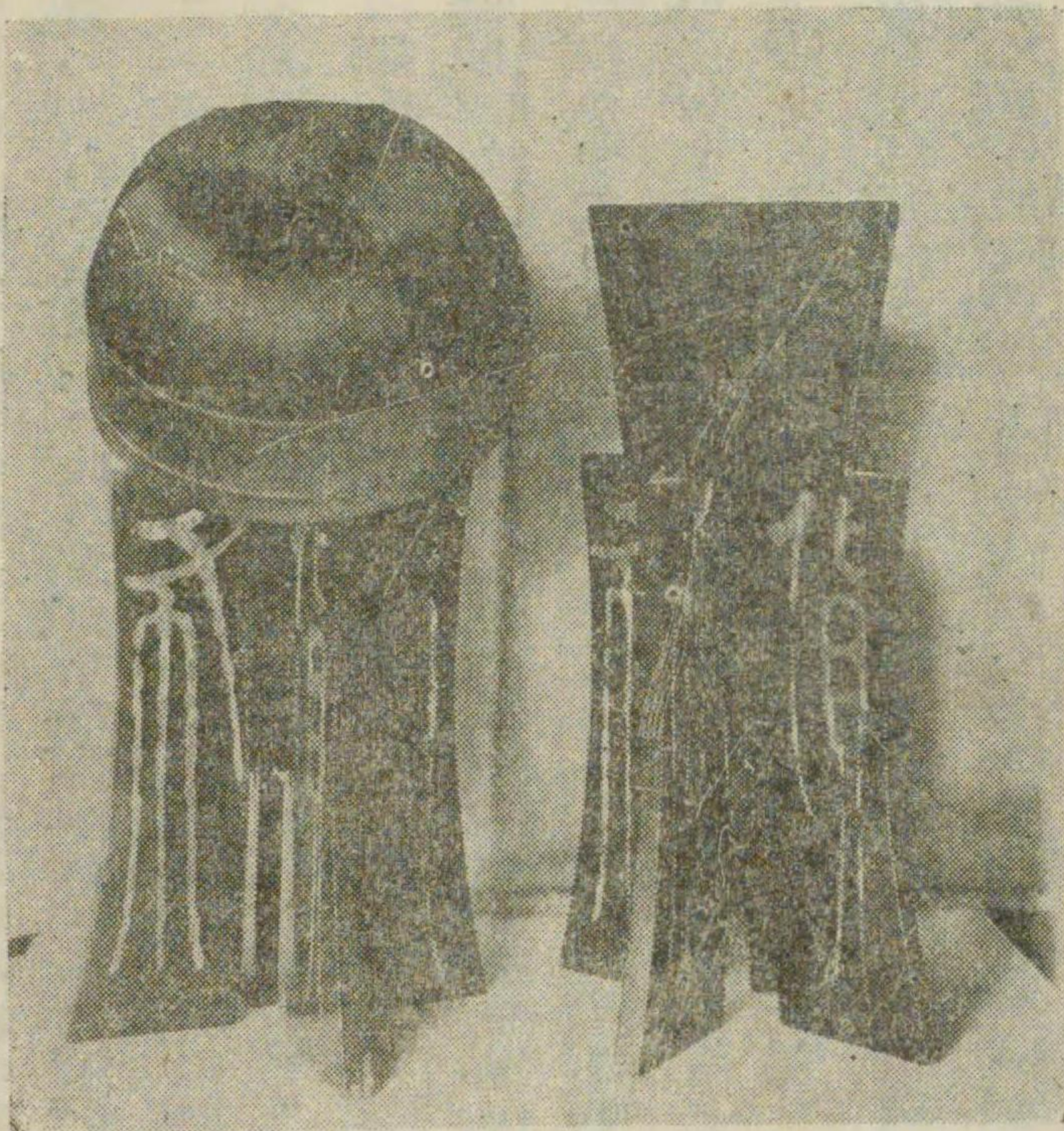
わけであるが北平にゐるるとき、自分は劉驥業君など、一日翁を訪ねたことがある。書齋で翁から年糕の御馳走などになったこともある。翁の面目は今も躍如たるの感がある。王樹相翁先生や柯劭忞先生等の如き碩學とは數度會つてはゐるが特にその邸内書齋に訪ねたことはないからこゝに觸れずにおく。

支那ではやゝもすると書物本位、殊に經學本位の學者は篆刻とか書畫とか詩文とかを弄ぶ文人を下ざまに見んとする傾がある。經學が天下の經綸に資することを今日鼻にかけてゐるわけでもあつてもよいと考へらるゝ位に物をいつも高所大所より見てその風韻に生きてゐるものであるから吾人はかゝる今日の傾向の改善せられんことを希望してやまないものである。經學が偉いでもなければ史學が偉いわけでもない。文藝書畫古玩の方が或は支那古代文化の粹と云ふ點から見一段上に在ると見ても差支ないのである。餘りに書物本位になり過ぎる文人よりは書物を超越したる洒脫な文人の方に却つて氣韻のあり調子の高い文人のゐることがあるのである。

七十六 文人を訪ねて(その一)

先般大塚博士に三上參次老翁先生が歸郷を経て北平城内に入らるゝと云ふ或る日曜日の朝のことであつた。自分は當時北平に居てその日先約があり、北平は東城東單牌樓、溝沿頭、邵大人の書畫拜觀

味趣・俗風



代古は架帽、帽碗と架帽る見に家舊の北湖
のもるたせは合組を形布貨の

の清遊にと出掛けて行つたのである同行の中に明の楊慎三十五代の孫と云ふ楊漱谷君や白堅君それに中根齋翁に當時公使館在勤の岩村成允君と文博高橋亨大人とが居られたのであつた。楊君は當年取つて四十一歳名門の出だけに書畫翰墨の鑑識にかけては北京第一流との定評ある文人氣質の好紳士、目下史的畫譜に就き浩漭なる大著述に取りかゝつてゐられる篤學の士である。

主人の邵氏の家は相當な名家であつて彼の有名な王同龢大人と親戚關係になつてゐると云はれて

文人の幽齋

大支那大系

ゐる位であるから其の藏品書畫文墨の珍什は相當又見ごたへのするものが多いのである。それを拜見に出かけた。同行の面々も亦相當皆具眼の豪の者、楊君の如きは殊にその見識に於いて當代鳴り渡つてゐる八釜しい此の方面での驍將である。自分はすべて此の方面は素人でその珍品重寶を鑑すると云ふことよりは此の主客の取り合はせが實に興味ある文墨の催しで洵に獲がたいチャンスであると面白い感じを以つて喜んで臨んだのであつた。

邵氏の門を叩き看門に案内せらるゝまゝに奥に通り客廳に納まる。主人出でて挨拶がある。客廳卓上には三四面の古硯が陳列せられ明の燒物も室の一隅に飾られてゐた。壁には書幅の聯など周圍に掛かつてゐる。夥計が茶を運んで来る。主人より煙草を請ぜられる。そろゝ藏幅に就いての話を皮切りが始まる。それではと次の後邊見の室へと隣りの房室に行つて見る。

見ると書畫帖の大型の寶物、緞子の装幀もの、紫檀の板の装幀もの、見るからに凡物でなさうなものも次から次へと卓上に現はれる。自分は畑違ひの書畫でも數多く見せられてゐるものは何となく直覺的に眞偽の判斷がつくやうな氣もするが先づよほどの逸品で快心の作といふものでなくちやピリツトあたまに來ぬ。

これは相當な重寶だと判れば落款など後人の記入であらうと無落款であらうと構ふところなく小

風俗・趣味

首を傾げて味づて眺めて見る。そして先づ始めに愛藏者たる主人公の考へは如何にと探りを入れてきて見る。主人公が始めから莫迦に自慢して得意顔に取り出して來たものであらうがあるまいが一日黙つてよく視つめて見る。楊君や中根翁の腹藏のない處の批判も仰いで見る。高橋、岩村兩老兄の意見も聞いて見る。デモ直覺的にこれは怪しいとにらんだものは誰れも皆同じ歸結に論斷せられるものである。大抵これなら合格しよう、氣韻が高いの、掛けて見られるだけのものであるのと言つて居ても楊漱翁君に耳打をして「どうでせうこれは」とやると楊君はすぐ、プハオ(不好)と云ふ「なぜでせう」と色々わけを聞き正して見ると尤もと肯首せられる節がある。研究になるから色々互に評論をするのである。材料に使つては洵に濟まないが先づ婉曲な辭令で互にひしめき合ふことはかまはぬのであるとする。

かやうにして出る帖毎に又壁に掛けられる幅毎に一々研究を繰返して居るうちにしかし誰れ人もこれならば珍品で結構なものであると一致したものが數十點のうちに相當あることはあつた。けれども珍中の珍として永く吾人の印象に残るものはこれである。即ち

第一、何子貞紹基の細楷の書帖 (大冊)

第二、記焦山の瘞鶴銘古拓の序跋

文人の幽齋

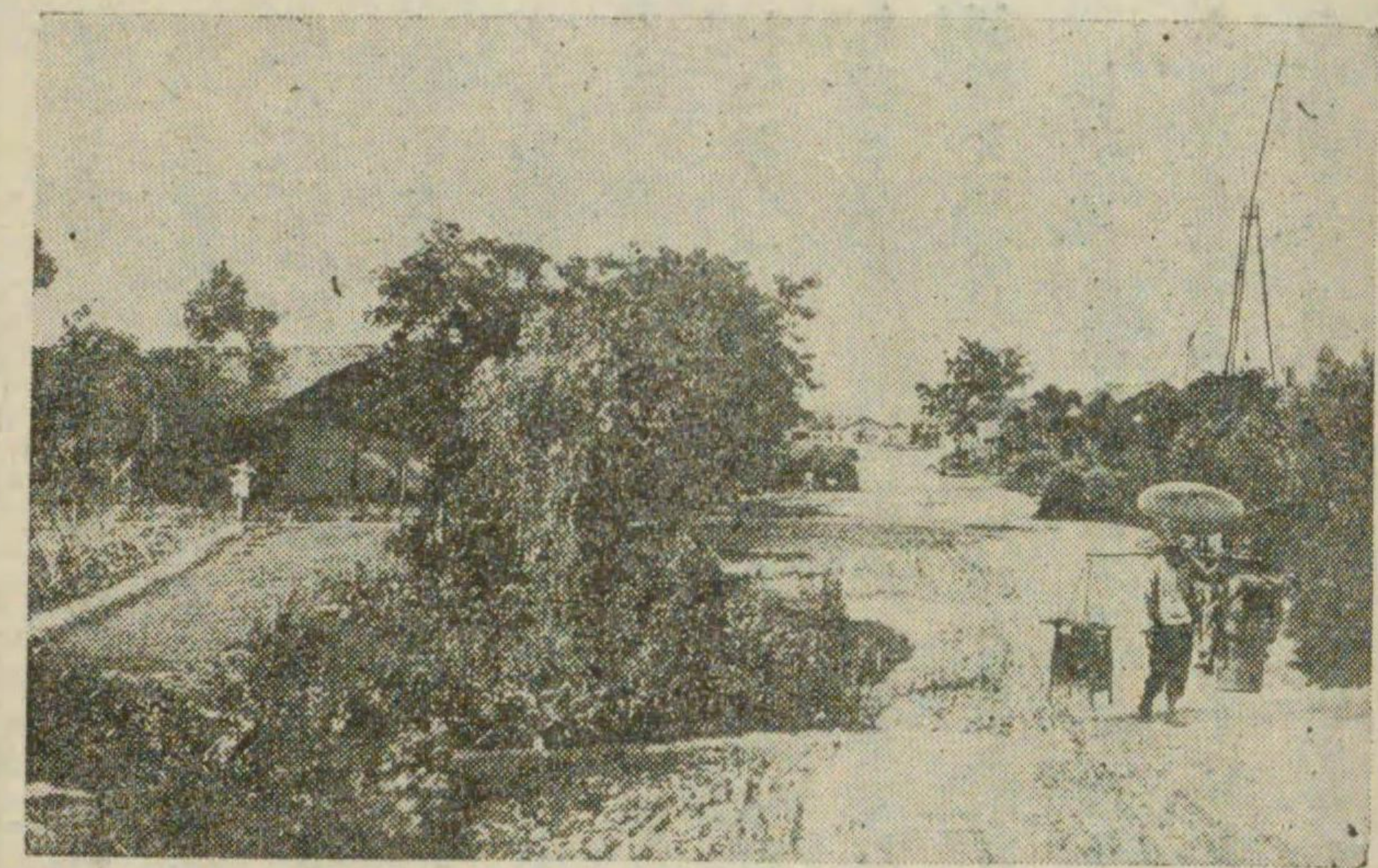
大支那系

第三、王若水の老梅に樹下の満月の畫幅 (紙本)

この三點のみは實に逸品であつた。王若水の梅花の枝は殊に伸び伸びと天に沖し氣韻の高い畫風を示してゐた「これも多少の疑ひはあるけれども」とは楊君のあとでの批評であつた。紹氏の邸では僅か三個點鐘ばかりの研究ではあつたが一々好資料についての臨床講義があつたので非常に興味を深かつた。門を辭し去つて自分共は附近の西觀音寺胡同の柳園といふに楊君からのもてなし「ひるは私の故郷の四川料理の便飯を」とのお呼ばれ、楊君は四川軍にも縁故淺からざるの文雅の士、四川重慶の魏國平老臺なども舊知の間柄であるとの事で自分どもとも馬が合ふのである。柳園は靜かな茶館であるがその中庭に遊び四周の室の軒端に扁額を見ると何れもその文字が又面白い。曰く洞天。曰く、飲齋。曰く食徳と皆何れも振つた佳句である。又對聯を見ると群賢畢至、勝友如雲なんてうまいことを云つてゐる。半日の清遊を了へて一同相携へて入燕の三上先生を旅館に訪ねお疲をねぎらひ、そして天下の楊歡谷君を博士に紹介し小憩の後東華門外に白堅君邸を訪ねその重寶珍什を拜觀すべく一同白君の東導で入京早々の三上老先生を主賓に乗物を此に飛ばしたのであつた。

七十七 文人を訪ねて (その二)

味趣・俗風



湖北漢口外郊に見る田家の幽趣、此の邊一帯はねつるの支杖林立せざる見

文人の幽齋

此の支杖畫聯合會の日支文人界に知られてゐることは、數年來のことであるが、北平の故金縷城君や故陳衡恪君、それに參政院の周肇祥翁(養庵翁)などは支那側の肝煎りとして既に日支間双方に知られてゐる人々である。中にも周肇祥翁は聯合會の會長として公私激務の間を心からよく金君などと共に斡旋せられてゐることも周知のことである。自分は愛硯家の楊晋翁から紹介されて周翁秘藏の古名硯を拜觀すべく且つ又金石古玩、思想問題などに就きこれと問題限定することなく或る日北平西城、頭髮胡同の邸に同翁を訪ねたのである。同翁へは楊晋翁から豫め自分の訪問の意が通じてあり自分の趣味のことも略先方に了解されてゐたものであるから同邸に到るや直様古硯の陳列されたる客廳に案内せられ後房より尙幾多の端溪が逸品の翁

自らの手で運んで來られた。物は十の八九すべて端溪であつた。その水巖の名品には水が注がれ廊下から持ち出され明るみに出して色々青花紋、馬尾紋、火捺、魚腦凍、檳榔紋、呂紋などの實際に就いて意見の交換が始まる。檳榔紋と五采釘との相違も説明せられる。自分は東都武内金平翁の水巖五采釘の絶品のあることを語り支那幾萬の古硯中未だかくの如き頂好の五采釘を見ざることを力説したのである。又翁は先般來北平の愛硯家が端溪石品中に紅絲紋を數へ之を端石の名品と稱し天下の紅絲石となせり果していかゞなものに哉との問ひがあつた。北平の愛硯家許卓然楊晋諸翁多くその説に傾いてゐる。自分はどこ迄も天下の紅絲石は唐代以來知られてゐる所の山東は青州の硯材であつて廣東から出てゐる石材ではないとのことを辨じておいた。又許然翁、楊翁などの稱して紅絲となせるものは硯史に見えてゐる語ではあるがその實端石に見ゆる紅絲斑はどう見ても紅絲の纖維を明示してゐないことをも附言しておいたのである。

しかし文墨の餘韻ある談をなしてゐる時柄にあまりにキツパリしたことを斷定的に云ふなどは考ふ可きことである。多少のゆとりをおいて語る可きものである。況して主人の藏品中に所謂端石中の紅絲と云ふものゝ見出されるべきなどは殊に考へて物を云はなくてはならぬかも知れぬ。同道の愛硯家土屋禎二君なども話し合ひ先づ日本での是迄の研究はその邊にあるのであるが尙將來の研究

に俟つことにしたいとそこへゆとりをつけておいたのである。

周翁は我が黨の士で金石殊に古代の石は中々澤山集藏してゐる。北魏から唐にかけての墓誌銘の出土品など手頃の大いさのものをいくつとなく愛藏してゐる。或は漢代あたりの穀物を容るゝ爲めの南蠻式の長罌で素とより釉薬がかゝつてゐないものを持つてゐる。その古硯趣味などは翁の愛石趣味のホンの一部分のものでその他の方が多いのである。かう云つた愛石考古趣味の文人は支那に各地に相當に多い。その藏品を仔細に研究して見ると何が發見せられるか判らぬ。現に周翁のコレクションの中に一種異様の出土の大壺が發見されたことは既にも述べた通りである。これは日本の米俵を横にねかした恰好をしてゐるものでその胴腹の中央のところ三四寸の圓筒の口がついてゐる。全體が素焼であつて釉薬などはかゝつてゐない粗末なものである。兼ねてから自分は北平の考古癖の人のうちに行くとき々見當たるものであるが未だその用途も判明せず勿論名稱も何と云ふものか判らない。一尺大のものがあるかと思ふと三尺に餘る大きなものもある。例によつて主人をつかまへこの出土品について高見はいかゞかと思ひ訊して見る。すると即座に周翁はこれは三代以後戦時用として盛に使はれてゐた兵器の一でその名は「諸葛鈴」と云ふ。諸葛孔明が戦時に之を陣中で用ひてゐたものであらう。地下に埋めおき筒型の口もとの處だけは地面に現はしその戦時敵軍襲來

の有無如何その襲來の方面の距離如何など云ふことは手に取る如く之で探知することの出来るものである云々、物は至極簡單なものであるが日頃熱心に自分が問題にしてゐたものだけにその回答が釋然として自分の胸に這入り理解がついた。謂はゞこは地中の無電の如きものであるとの事が判つた。何の線なきに敵の襲來の有無から方向まで明かにすることが出来る。まことに重寶なものである。今から千六七百年前の昔は戦争をどうしてゐたか、此の諸葛鈴の一物を介して見て想像して見る丈でもいかにも支那の戦争らしくて興味がある。自分は硯が橋渡して意外なる考古學的、兵略的の貴重な資料として興味ある諸葛鈴なるものを見せてもらつたものである。しかし多くの支那人は大抵聞いて見てもわからぬ。答の出来るものは少なかつたやうである。

十九 支那翰墨閑話

七十八 支那實業家の風流味

支那に遊んで、各方面の紳士淑女に接して見ると日本に於ける社交社會と特に異つた氣持がする殊に支那の實業家に接して、其の趣味を語り、風流な生活の半面を叩いて見ると、可なり興味のあつた話題が、津々として盡きないのである。こゝには主として江南地方の實業家を訪ねた時の印象を基にして、文墨の趣味談を試みて見よう。

支那の實業家は日本の實業家の如く、朝から晩まで其の専門の仕事のみ没頭してゐるのではなく相當な身分の者であれば、文人的趣味を半面に有してゐて、其の住宅を訪ねて見れば、左ながら文人的生活そつくりの暮をしてゐる様子が見えるのである。談偶々壁間の對聯の事に及び、之は結構な筆蹟ですと云ふと、主人は云ふ。

「どう致しまして、此の書は眞蹟を隔つること紙一枚の物です。」
と打明け話も切り出すのである。

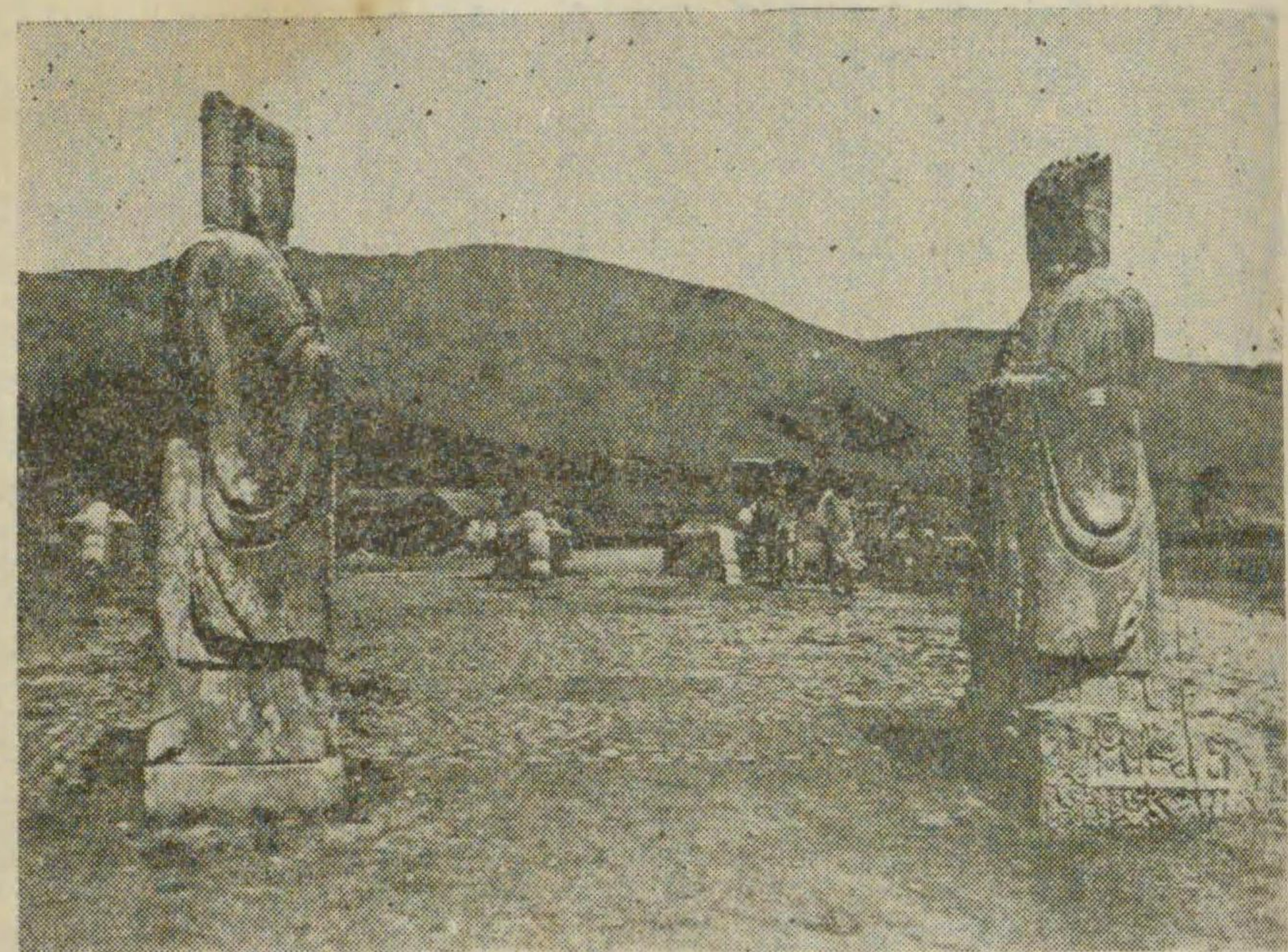
大支那系

最近江南は浙江省紹興の田舎餘姚に客となつてゐた時も此の句を聞いたのであつた。翰墨談中此の眞蹟を距つる紙の話は自分は良く文人其他から聞かざるゝ話であるが、日本人の耳には一寸耳新しく感ぜられるのである。勿論支那畫先の剝き方に通じた方や、支那表具師の剝紙秘法を御存じの方ならば、譯なく分る話ではあるが、其の紙が二層紙、三層紙と幾層にも重ねて漉かれた物である時には其の一等上層の面に筆が當ると揮毫の墨色が最も鮮かに現れ、運筆の妙味も眞蹟だけに直接に感受せられるのである。ところが、中層または下層の面となると勢ひ其の所謂其の眞蹟を隔つること紙一枚であるだけそれだけ其墨色もいくらか不鮮明になり、運筆の妙味もぼかされて感ぜらるるに至るのである。争はれないのは隔紙の問題如何と云ふことなのである。もつともいくらか其の朦朧體になり、何となく勢が失はれて、墨色の洗ひ去られた後の形を呈した物の方が古色蒼然を喜ぶ支那古玩家には却つて歓迎せられる場合もあるであらう。

七十九 書畫に對する風懷

支那で書畫を中心に翰墨談に耽つてゐる時は、始終其の鑑賞法や其の傳來の徑路のことが話題に上り、殊に宣和の印や、希古、石渠閣の圖章の有無などが重要視せらるゝ様である。無論又其の翰

風俗・趣味



江蘇省南京城外紫金山麓明孝陵見石人偉觀

支那翰墨閑話

墨の根本の問題たるその卷軸扇面、畫帖等が果して眞物なりや模倣なりやの點に就いてもかなり重要視された議論も出ないではない。けれども多くはさういつた際どい抜き差しのならぬ問題に切り込んで行くと云ふことは控えて置かなくてはならぬとの考へを持つて、當らず觸らずのところを徘徊してゐる様である。日本人の常識からすると書齋や應接間に掲げる物は苟も人の口に問題視せらるゝが如き物は出して置きたくないと云つた潔癖性の氣分を遺憾なく漾はせてゐるのである。と云ふのは日本人の氣持ではそれが氣に掛るのみならず自分の見識にもかゝはつて、自己の無學を表はし、無趣味の人間と見られる恐れのあると云つた調子で、ひどく氣

大支那系

にするのである。ところが支那人には概して其の邊が呑ん氣に出來てゐるのか、よしんば其の書畫が後人の模倣であつたにしても、大して氣に留め様ともしない。其の明らかに偽作であつたとしても平氣で居る人さえあるのである。

眞蹟を隔つること一枚や二枚の物は、まだ宜しい方の部である。似て非なる物とか、或は全然似ても似つかない別物であつたとしても別段主人はこれを意に介してゐない様なことがある。けれどもそれは必ずしも主人公の無學とか無趣味とか云ふ點から來てゐるのではなくも始めから頓着してゐないのである。斯ゝる平氣の態度でゐても自分の面子や見識に拘るとは思つてゐないのである。そこは其の人の幽しい性分であり、そこにまた一種の懐しみを生ずる譯なのである。兎角物事を峻嚴に考へ、怪しい偽物は一步も許さんと計り力瘤を入れる時は、物に間違ひの生ずることはあるまいが、而しそこに人間としてのゆとりがなくなり人間味が味はれなくなる氣持がする。

支那社會に見る翰墨生活の要諦は實にこゝにあると稱し得べく、又全くさうあつてこそそこには各種各様の書畫や美術工藝が、燦然として豊富に榮てゆくのである。元來翰墨の趣味たる、さうその眞蹟のみ、正系の物のみとか狭く小さく局限する譯には參らぬ。若し假りに文人にしろ役人にしろ、商人にして、自己一流の眞蹟主義からして大客廳、小客廳から書齋の壁などへ持つて行つ

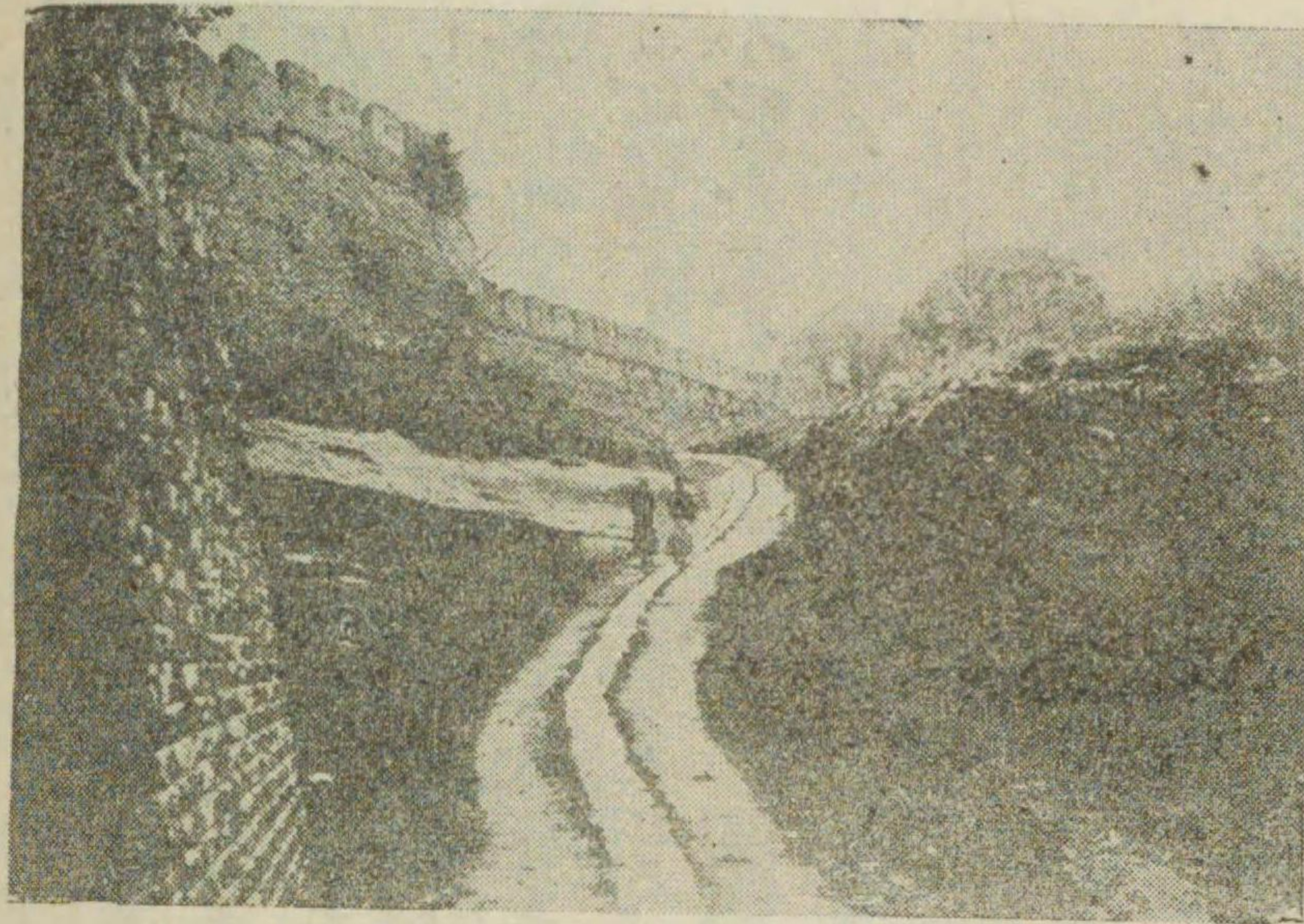
風俗・趣味

て貴重なる古人名流の眞蹟のみを吊してゐたとしたならば、果してどうであらう。來謝の客のある時には總ての客と云ふ客が垂涎三尺褒めちぎることであらう。その場合にはいつ何時でも之を贈物として之を外し贈呈の止むなきに至ると云ふことが現實に頻々起つて來るのである。文人生活や役人生活の上には斯うした抜き差しならぬ場合が随分あり、その實際の體驗から窮地に陥つたことをしみ／＼感じてゐるのである。まさか人に贈るに粗末な物で好いと云ふ心持でゐるのではあるまいが、上司の所望もだしがたく、心ならずも贈呈の止むなきに至つたりなどした經驗から、自ら之が一般の風をなしたものと察せられる。これは餘りに穿ち過ぎた話なりと云はるゝかも知れぬが支那の社會では有りさうなことゝして解釋せらるゝのである。

八十 風人高士を偲ぶ

釣屠、宰相を隠し、塵士、公卿を出だすとはえらい難しい語の様であるが、自分どもが好く市井の巷、肉店の門聯等に見る文字である。或は又一竿の風月、萬頃の煙波とか、短蓑、密雨を衝き、横笛清風を弄すとは、江南の魚舟又は義渡の船頭の苦に見るおきまりの聯句なのである。其の他或は江岸に漁家小廬を窺へば、平地の煙波、白鳥横はり五湖の風雨沙鷗を伴ふなどと、之また頗る詩

趣に富んだ正楷の文字で頻りと吾人の視線を牽いてゐるのである。これが若し単に自分共は支那の



趣哀る見に内城壁赤縣魚嘉省北湖

都會城内や、田舎へ漁舟に遊びてたゞ生肉の臭生ま
生ましい肉店の主人や、薄汚い船頭を相手に話をし
てゐるだけでは、別段何の風情も起らない。のみな
らず、固より之を風流人視する等云ふ氣持にはなり
得ないのである。ところが支那ではどうかするとか
くの如き肉屋の老爺あたりに見るからに學者らしい
ものがゐたり、偉人らしきものがゐたりなどする。
故あつて肉屋を開業してゐるのであつて話をしてみ
ると古書に通じ人品も高く話ごたへのする隠君子然
たるものをよく見出すことがあるのである。吾人は
その職業の如何よりもその人格の上に風人高士と云
つたものをかうした市井の間に見出すことは支那の
城内を歩いてゐるとき却つてよく體驗するのである

二十 支那の宗教に見る風俗人情

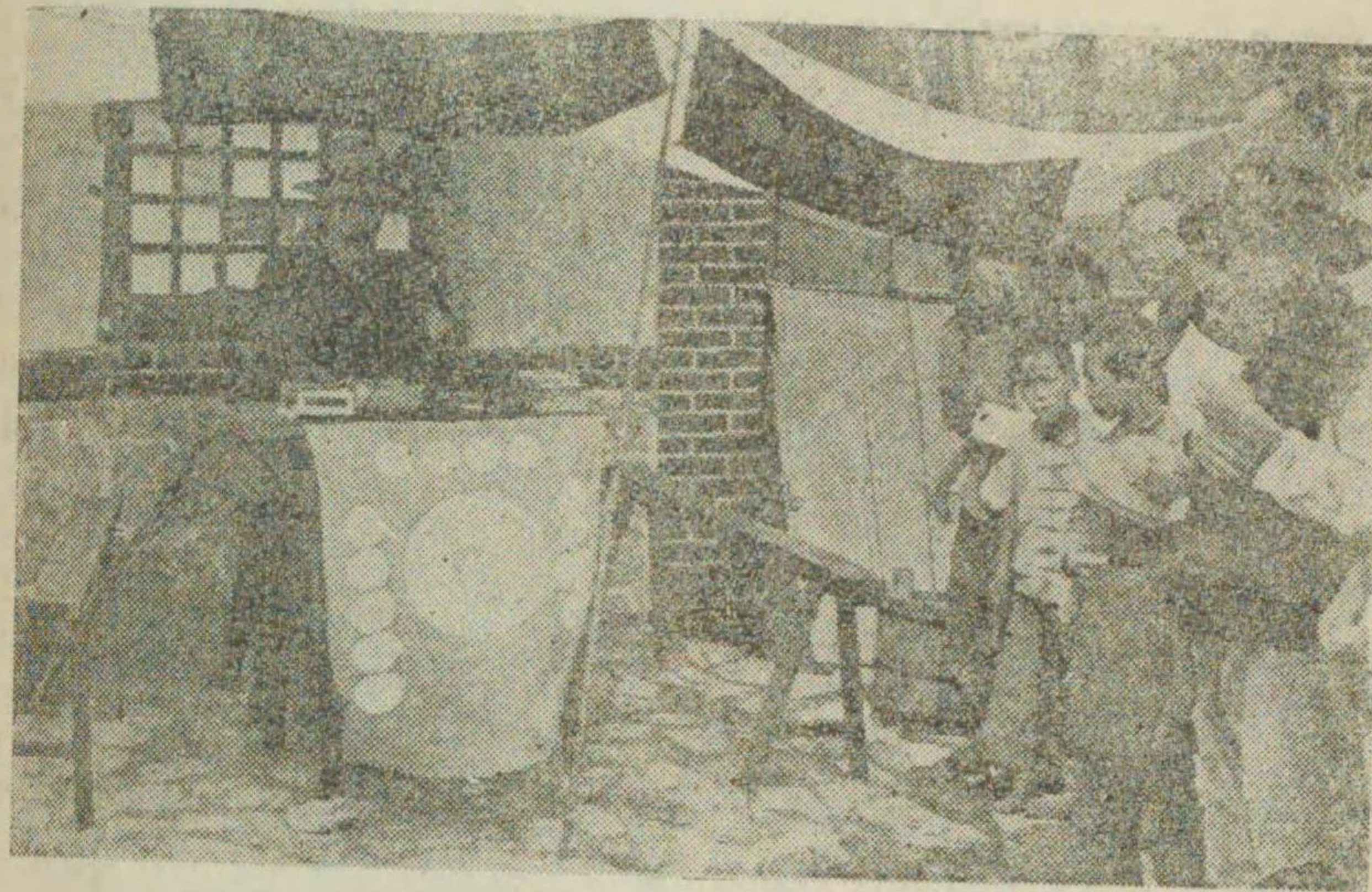
八十一 支那現代の精神生活

支那民族の現状はその政府の力が一般人民に對して安寧秩序の維持を保障してゐるでなし生命財產の安固を計つてくれてゐるでなし殆んど支那人の日常生活は自分自らが自分の生存を圖つて行くの外道なき情態である。いかに無實の罪に服さなくてはならぬ破目に陥つても之を自ら立證して控訴する如き方法も實際立つてゐないのである。すべてが支那は泣寢入りと云つた有様で今日誰れ人に向つて訴へて行く可きか。全然たよるべきものがないのである。可愛さうなのは此の支那の住民である。支那社會で生きてゐる良民たちである。裁判所や警察もないではないが情實纏綿でたゞ行きなり訴へて見たところ物になるわけもない。その間の裏面の事情はすべて住民は知りぬいてゐる。

されば支那現代の良民の日常生活と云ふものは唯不幸に遭遇したらあきらむるの外なしと云ふに止まりいかに無理な仕打ちにあはされても唯我慢して自分でこれ迄の運命だと考へ直して弄ば

支那の宗教に見る風俗人情

大支那系



上海市中路の塾師、眞寫撮影を珍らしつて見てゐる
女兒の隈界る

れてゐるの外に全然方法はないのである。これは支那人が平素國家を信ぜず政府を信ぜず、役人を

信ぜずつまり國民としての立脚地から爲政者に對して何等なつかしみを有してゐるわけではなく又之を當てにして見たところで、始まらぬと云ふやうな考がすべての國民のあたまたに深刻に刻み込まれてゐるのである。それが習慣となつて自己と政府とは無關係のものである。政府は人民の安寧秩序などを一々圖つてくれるものではないものだと言つて人民の方でしまつたのである。最早や何としたつて人民の方では今更ら驚かない。それだけに自分自身でやらなくてはと云ふ自治の考と云ふものが、非常に強く働いて來たのである。同時に悲觀して見たつて始まらぬと云ふあきらめの心が遂に習ひとなり樂天思想の方へと化して來たのである。又支那人くらの樂天的

風俗・趣味

な呑ん氣なものは少なからう。日本人であれば當然くよくよして思ひ切りのわるいやうな事でもすつかり彼等は安心してこぼしもせず平氣にやつてゐる場面を見て感心させらるゝのである。斷頭臺上の露と消え果つるべく死刑の宣告を受けた人間にしても最後の瞬間に少しも恐れた顔を見せず平生と少しも變らぬ態度でゐらるゝと云ふが如きことは誰れ人もその現場を見たものゝ少なからず驚かざるゝ點である。どうしてその時變な氣持にならぬのであらうか。死を見ること歸るが如しと云ふが實にその通りである。つまりこれは死後を別段變つた世界に見てゐるのでなくあの世は現世の延長に外ならぬと見てゐる氣分がその根柢をなしてゐるのではあるまいかとも思はれるのである。

目に一丁字なき手合どもでもその死ぬと云ふことをたいした問題にせず死を見ること鴻毛よりも軽く死そのものを恐れてゐないと云ふことはたしかに日本人などゝ違つてゐるのである。これは支那そのものゝ社會情態が平生餘りに残酷であること、又その場合が頻繁にあつてあたまが既に麻痺してゐる關係もあらうと考へられるのである。それから古來の大規模な事業、驚天動地の偉業をなしたつた人傑であつてもそれが最後の幕を見れば實に悲惨なる場面を見せてゐるものがあつて飛ぶ鳥も落とさん勢を示してゐた豪者も刺客の爲めに哀れな最後を遂げるものも少なくない。近く

大支那大系

は浙江で孫傳芳に反旗を示し自ら杭州城によつて督軍となり澄してゐた例の夏超御大の最後の幕の如きはその最も悲惨を極めた殺されかたであつた。その袋に入れられて十七度も突刺され、財産のありかを自白せしめたと云つた如き仕打ちは珍らしくないのである。

支那人本来の思想からすればすべてその歡樂の生活を好み、歡樂の前には國家なしと云つた氣分になつてゐるのであるが、それも實はその平素の世相の反動から來たものと見られるのである。その實支那人の日常生活はすべて歡樂をことゝしなるべく陽氣に又なるべく吞氣にやつて行き悲觀して見たつて始まらぬと云ふ氣分が著しく高まつて來た。されば日本に見る心中をして死を求むると云つた如きことは殆んど支那では聞かないのである。心中の必要に迫まれるほどに支那人人は行詰まらないのである。何とか局面展開が行はれるのでその邊は實に心得たものである。人間としてはその方が徳であると思はれてゐる。政府は政府として頼みにもならず役人は役人として當てにもならぬことを承知してゐる。かれらは勢ひ思想上一つの大きな諦の世界を新規に見出し樂天氣分で自己を内省し又人生そのものを樂天氣分で大きく色づけて行かうとするに至るのは當然の歸結であると思ふのである。

八十二 面子論と宿命論

支那の人々にはメンツ(面子)と云つて體面のことを八釜しく云ふ。殊に紳士であるとその面子論を楯にとつて随分物を面倒にする場合もある。必ずや名を正さんと云つて名義の立たぬかねは受取らぬなど云つたやうに八釜しく云ひ立てる。そのくせ腹の中ではどうだつてよろしいのだとかなり碎けた考を持つてゐる人であつても、所謂世間體を作る爲めに面子論を八釜しく持出すのである。これは支那現代生活にはかなり重く見られて又濃厚に觀察せられてゐる問題である。

日常の精神生活殊にその樂天的思想の働いてゐるその反面に此の面子論なるものは相當現代人のあたまをかなりひどく支配してゐる。又實際今日頗る重要視されなくてはならぬ問題でもある。支那の紳士社會は一つにも二にも此の面子で以て立つてゐると云つてもよろしいのである。支那の紳士連中が社交上の方面で一番意を用ひるのは此の面子の點である。時には損徳を超越して此の面目の爲めに一大奮發をなすことを敢へて辭しないと云ふこともある。固よりその自分の顔に係はると云ふことになるときは最早や紳士として仲間に齡されなくなること示すわけになる。紳士でなくとも誰人も此の點にはひどく氣をつかふのである。時折日本に出かけて來てひと稼をしようとする

支那の宗教に見る風俗人情

風俗・趣味

大支那系

支那料理人の如きでさへもその國許で友人故舊と別れの宴を張り、見送りの行をそれ相應に盛にしてもらつて日本に来る。ところが日本に来て見ると身許に腰を入れて引受けてくれるものゝない計りに神戸でも横濱でも上陸がむづかしい。當人はいくら云つて頼んで見てもその筋では香ばしい返事をしてくれぬ。遂には何としても致方がなく心ならずも本人は生れた本國へ歸らざるを得なくなる。このとき自分はよく船中にて支那人から相談を受け哀訴歎願何とかしてもらへないかとせがまれるのである。曰く。

四三〇

「今更ら歸國するわけにもいかず、さりとて日本官憲でいけないと許さないものを上陸するわけにもいかぬ。商賣變へをするならば上がつてもよいと云ふがどうしたものであらう云々」

無理からぬたのみである。かれらがその面子論からして歸れないと云つて少面子少面子と云ふのも尤なわけである。面目のない次第はたとひ低級な手合だつて同じことである。よくその面子の爲めに進退谷まりデレンマに陥れるものを見る。現代生活に此の面目の問題はかなり重大な意味をもつてゐると云へるのである。ところがその面子論もいよ／＼ぎり／＼まで行つて遂に何とても仕方がないと云ふことになれば最早やさうばかりも云つてゐられなくなりこゝに大きな運命の力に支配されてゐるわけだから如何ともなすこと能はずと云ふことに氣がついて来る。これは自然の順序であつてそこに來るより他にいくべき道はないのである。但しその場合支那人と云ふものは面子論で以つて最後の處まで突つ張れるだけ突ツ張るのである。その間の我慢力の強いことゝ云つたらぬ随分吐き出せる丈吐き出しもする又相應紳士であると投げ出しもする。そして専心その面子の保持に努力する。けれども前に云ふ通りトコトンまで行つて行詰つてしまふと云ふと重荷をおろした如き態度に變はつて、急轉直下運命論者になりすつかり諦らめるやうになる。支那の人のメンタル・プロセスは大體この徑路を辿るのである。又辿らざるを得ないのである。

そこを考へて見るにその面子論で突つ張つてゐる間は倫理問題として又は社會上の問題として自分を考へて固くなつてゐるのである。ところがその範圍を一步踏み出し之を運命に結び付け天地自然の法則に支配されてゐることに氣がついて來て自己だけの力で以つて抵抗して見たつて始まらぬと云ふやうになる。こゝである。こゝに始めて一種の人生觀を自分自身に感じて來るやうになるのである。支那では良民が悪官吏にせしめられたり、又兵隊馬賊に虐げられたりしても唯泣寝入りで終るのみであつて如何にもしがたい。その爲め訴へるところがない。止むなく不幸にかゝること

風俗・趣味

も結局天運によつてきまつてゐるものであるとの運命論に支配せられそれと自分で諦らめさせられるに至るのである。これも政治の罪に外ならぬのである。その何と叫んで見たところで訴へる處がど

支那の宗教に見る風俗人情

四三一

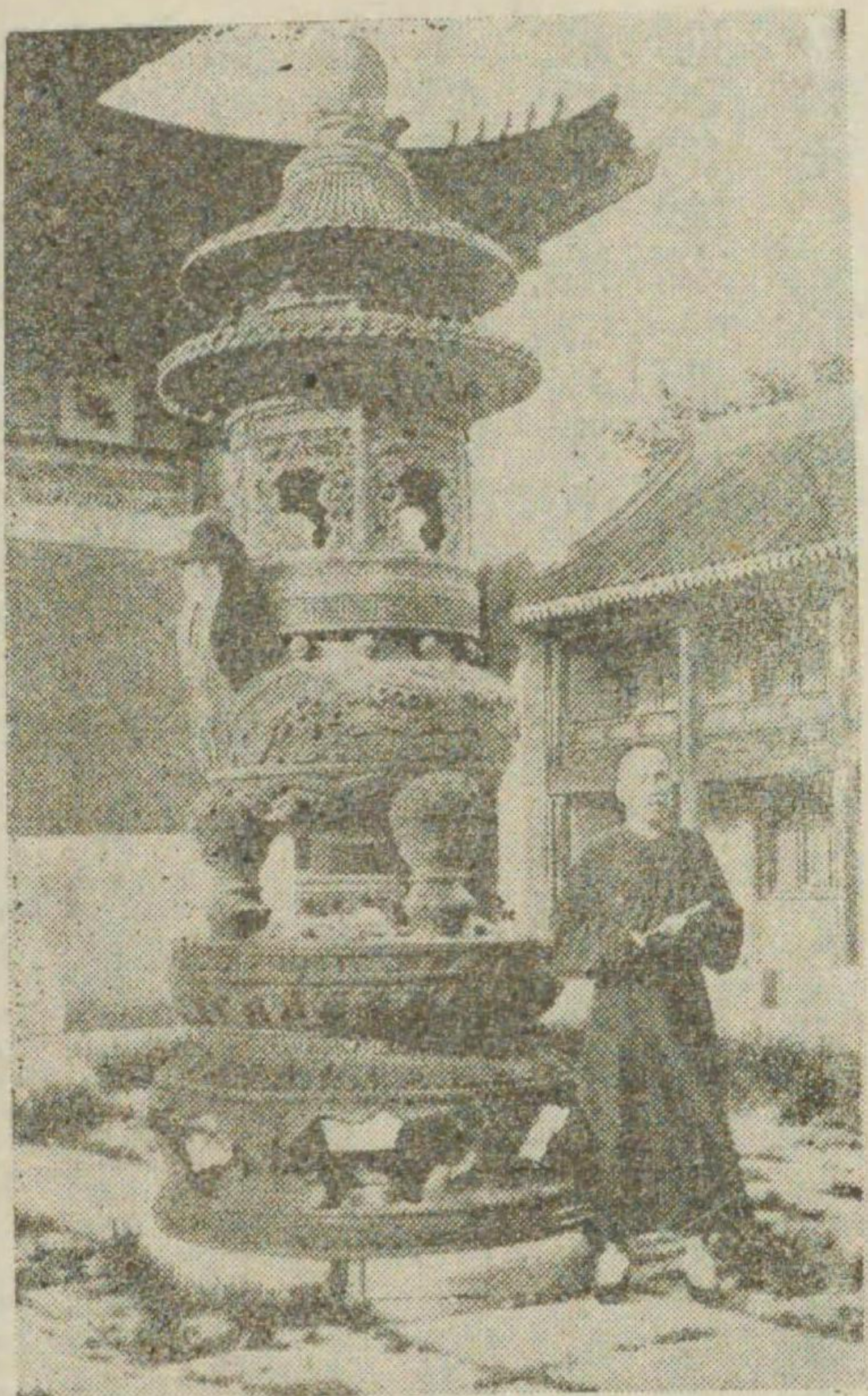
大支那系

こにも自國領土内にないと云ふに至つては氣の毒なものである。がどうも外に致し方がないのである。こゝに支那四百餘州の良民族に對して最も同情に價すべきものが存してゐるのである。わけても民國十六年共產黨氣分の最も濃厚であつたあの頃、湖南湖北の天地に土豪劣紳呼ばりの盛であつた。あの際の如きは罪なきに當時どれ位良民紳士が殺害せられたことか判らぬ。湖南の碩學葉德輝翁の殺された不祥事もその時であつた。而かも葉翁の遺族は之をどこへも訴へることが出来ない下手をすれば又遺族そのものがいつ何時殺さるゝに至るやもしれずと云ふ危険を見せつけられたのであつた。さればかくの如き不幸災害を被むりたる上は唯之を運命化し天運としてあきらめるの態度に出るの外仕方がないのである。

八十三 迷信の威力

支那現代の精神生活に對してやゝもすれば世人は支那は儒教の力によつてすべてが統一せられ孔孟の教によつて大衆が福利厚生のを得てゐるものである如くに見てゐるものが多いであらう。ところが支那民衆の大多數と云ふものはさうではない。儒教を以つてさも絶對の力があるものと考へて居るのではない。國家構成の上とか爲政者の自己擁護の精神とかのうちはたしかに孔孟の道も

風俗・趣味



北平喇嘛寺和宮內境に見る字塔 延年鐵塔

よつて決定せらるゝものが多いのである。病氣危篤なときに用ひらるゝ靈藥にしたところで半ば漢藥的効能の著しきものがあるにしてもその裏には迷信が手傳つてゐる。神經が手傳つてゐる迷信の力で癒ると云ふものも少なくないのである。と云ふのは道教的信仰から種々、神々をかついで

支那の宗教に見る風俗人情

大支那系

るによつても判るのである。或は年中行事に見ゆる魔除を行ふ場合の如きもその加持祈禱の黄符に
いかに多く貼札の用ひらるゝかの一事を以つて見てもこれは判るのである。或は死後棺廓埋葬の場
合に風水説に見ゆる如くその埋むる方位場所の選定がどれ位その家の吉凶を決定するものなるか。
殆んど無條件に深く信ぜられてゐると云ふのも、確に迷信から來てゐる證據であると云へる。その
最も廣い民衆の精神生活は殆んど大半在來の古傳説或は根もなき迷信から出てゐると云ふことは支
那の社會を觀察する上に頗る注目し價することであつてこれが支那人の宗教思想の根柢を色着けて
ゐるものと見られるのである。

支那には相當智識階級の人々にしてもこの迷信の威力には或る程度まで従はなくてはならず、又従
來の古い慣例のうちにも迷信を中心に發達したものがかなり多く見出さるゝのである。冠婚喪祭に
見る各地方の風習のうちには殊に迷信がかつたものが多い。土地公、娘々廟、城隍廟の如きも
のにその迷信的體拜祈禱の多く存するは世人も知る如くである。迷信は又時として政治運動などに
巧に利用されて敵對行動をとらしめ流言蜚語を放つてはその迷信を煽る如き方法をとるものもある
本來愚民の信する迷信はその數も多く又愚民を煽動し又之を利用することは容易である關係上つ
まらぬ迷信そのものでも頗る重用なはたらきをなすに至るのである。迷信だからと云つた調子で以

風俗・趣味

て之をけなししてかゝるやうではよろしくないのである。
迷信のひろく行はれてゐる社會は云ふまでもなくその教育程度の低い處であり、且つその精神情
態も極めて單純なところであるは云ふを俟たないのである。しかしいかなる人々といへども迷信か
ら來つてゐる社會現象を無視するわけにはいかぬのである。その迷信もその信じやう次第ではそ
の地方に好結果を持ち來たし、ローカルの神々に祈禱をかくることによつて土民の安心を勝ち得べ
く、たしかにその祈りの方法によつて危篤に陥れる父母の病を全癒するに至ることもある。又それ
を深く信ずるものもあるのである。之に對してわきからその迷信なるが故に信ずる丈の價値なきも
のゝ如く云ひなして否定したりするの必要は少しもないのである。しかしその迷信そのものを十分
信じては見ても尙且つ父母の病がそれによつて持ち直し得なかつたとしたならば最後はどうするか
全く没法子である。メイファーツで仕方がないと云ふことになるのである。けれどもそれにしても
その迷信の力そのものを利用して驚天動地の仕事をなし得るものもあるし、國家の轉覆を期圖し得
べきやうな場合もあるのである。その愚や及ぶべからずなどゝ云つて之を不問に附してゐるやうな
ことをすると却つてその爲めに自分自身が愚を見るやうなことにもなるのである。
支那民衆の大多數は日常何を信じ何れを自己の力と頼んでゐるのであるかを見ると氣の毒に堪へぬ

大支那系

ものがある。政府も官吏もあてになるものでないときめてゐるかれ等民衆に在りてはたゞ彼れ等の信する寺々へ参詣して自分の胸のうちを語ると云ふことこれ丈である。これには佛寺に参詣するものもあるが、それは清明節とか或は法事を営んでもらふ回忌々々の場合くらゐのもので多くは佛寺の方よりも一般道教がかつた寺の方が多のである。支那民衆が俗間信仰の的となつてゐる道観寺院、祠堂はその數も甚だ多く又その何れにしても手向けらるゝ香華の盛大なことゝ云つたら素晴らしいものである。門前市をなし又門内市をなし雑踏を極めてゐるのである。中には必ずしも之を信仰してゐるからこゝに集まると云ふわけではなく全く縁日氣分で以つて集まり來たるものも多いのである。しかしその集まり参詣し來たるものが神前に香華を手向けたり元寶と云つて銀紙で作つた馬蹄銀型の紙を焼いたり又御馳走を籠に入れて持ち來たり之を神位の前に供へたりすると云つたおきまりのことをする外その禮拜の後で竹のおみ籤を引き吉凶判断の文字の印刷された黄紙を求めてその文字を讀んでもらひ、自分の心配を解いてもらはんとする善男善女たちもかなりあるやうである。その神符による暗示が何より當てになるものであるとして之を唯一の慰安となしてゐるとは氣の毒なものであると思ふ。

風俗・趣味

た支那の社會情態を少しも解せず又かれらに少しも同情なき人々はやゝもすればこれら寺廟道觀に集まれる日頃の民衆をつかまへて之を頗る低級なるものなりとなし單に迷信に囚はれたる半開の民なりとして見縊るのである。同情の眼をもたずしてたゞ巷に群がるかれらの精神生活を一瞥するときはその低級の感じのするのは無理なからう。けれどもその平素かうしたお寺、道觀、祠堂以外どこにも訴へて行く可き處のない恵まれざる民衆であることに氣がついて見ると餘程その感じが違つて來るのである。支那は國情が動亂騒ぎの連續情態で以て外人にはどうしても香ばしくなく見られてゐる傾がある。従つてすべての社會現象を判定せしむべき世相がだらしなくとられる傾がある。その間支那古來の歴史を通觀し社會の實際情態を見て來るときはすべて同情を禁じ得ないものがあるのである。日本人は支那人一般に最も同情を表すべき立場に在り。又最もよく理解のあべき關係に在るに拘らず殆んど支那民衆に就いての事情が判つて居らず又たとひ判つたところでむしろ之を半開民族視せんとするの傾がある。その支那城内の寺院廟前の雑踏せる光景を見ても之を低級不潔なる賑ひに過ぎぬと見るのみであつて更に深刻にその寺廟そのものに民衆が引つけられなくてはならぬ根本問題のある處にまで遡つて考へるものは少ないのである。

支那現代の精神生活のうちには又排外思想の氣分があり之を若し何か或る導火線を得たならば忽ち支那の宗教に見る風俗人情

ちを高調力説せんとする空氣が認められるのである。これは職業化して今日では立派に排外屋の策動によつて實現せらるゝに至つた。必ずしも英米が憎いとか日本人が面悪いとか云ふ意味ではないのである。つまりはその働ける間に相當する日當がもらへるからその示威運動の行列に加はり旗を以つて練りあるくと云ふのがその實情を物語つてゐるのである。

そしてそれには悲壯な大道演説をやるものがあり、又排貨の手きびしい運動に従事するものがあり、又その印刷物を作るものがあり、大勢は時々繰返さるゝボイコットによつてどれ位高められてゐることか判らぬ。しかし一面から云ふとそれも單に一部の青年者流の仕事になるからやる丈のことで永久にそれを主義主張にしてゐるわけでもない。かれも一時、これも一時と云つた考である。手合ひが多いのである。たゞ現代思想のうちにはその不平等條約徹底とか租界回收とかの熱が時折思ひ出したやうに高まりそれによつて民族的の地位の向上を期せんとするの運動がかなり八釜しい。この種の運動に加はる人々は例の迷信がかつた信仰に這入るなど云ふことは之を馬鹿にし低級視し寺詣でなどは一切やらないのである。曰く寺は愚民百姓だちの參るべきものであつて自分共はむしろ世界の潮流に乗り出した民族自決だ、不平等條約の廢棄だ云々と嘯いてゐるのである。かゝる叫びが又たしかに現代生活の精神的活動の一現象となつてゐることは注目し値することである。これは一面に樂天的な呑ん氣な氣持ちと相矛盾した感じをもたせるわけになるのであるがそれが支那である。いくらでも矛盾は支那社會に互に存在し得るのである。一方にいくらあきらめの考へが強くなり宿命論を考へるものも多くあつても他の一方には對外關係の如きどこ迄も從來のまゝおかれ

ては國の面目はふみにじられると云ふので盛に八釜しく云ひ立つるものも出來て來るのである。又之を高調力説するのも實は自己の面目の爲めにもよいのである。この國際的義憤から中華民國の面目を立つるやう唱へることはたしかに青年どもの意氣に對してふさはしいことである。同時にそれが又青年だちの仕事にもなると云ふわけである。かれこれして民國現代の精神生活はかなり複雑に活いてゐるのである。吾人は宗教方面に關聯した實況を述べるに先立ち大要その精神活動の輪廓に就いて大體を紹介しておく次第である。

大支那大系

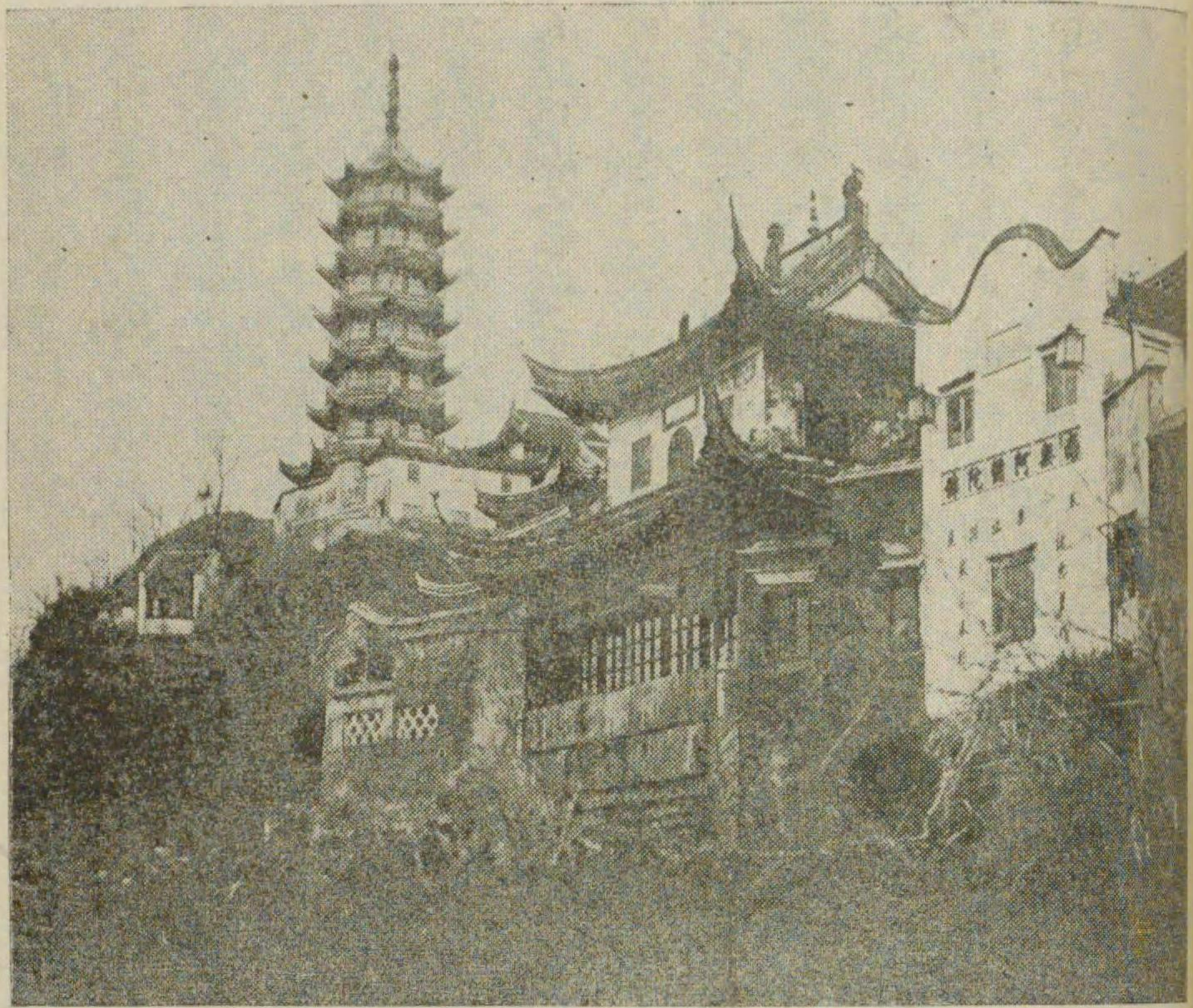
二十一 支那の佛寺

八十四 都鄙に見る寺廟

長崎で福濟寺、崇福寺などの支那寺巡りを試みて見ると、その規模に於いては著しく小さく出てゐるが全體としての構造は洵に支那南方に見る禪寺そつくりの感がある。日本では古社寺保存會の方で之を國寶に撰定せられてゐるが、その眼でもし支那都鄙各地に見る寺廟を観察して見ると實際ゆかしい寺で勿體ない位荒廢してゐるものが無數にあるのである。

最近建築學會から刊行せられた支那建築の寫真集成を見るとそのうちにも雄なるものがかなり網羅されてゐる。臨濟にしても曹洞宗にしてもその各宗派の古寺の輪奐の美は高く碧空に聳え過去數王朝の間民衆の信仰を集め來たつた偉大な力を聯想せしむるのである。その六朝隋唐以來の古刹にして兵燹にかゝりしこともなく今日まで持ちこたへて來た者も相當にたくさんある。見ると、その山門樓門の大なる、八大天王殿、大雄殿、大雄寶殿などの文字を入れた扁額の偉大なる、放生池の大なる、四天王の立像の華麗雄渾なる、又その僧坊、客堂の多き、又その鐘樓のゆかしく仰ぎ眺め

風俗・趣味



江蘇省鎮江郊外丘上に見る金山寺の全景

支那の佛寺

らるゝなどすべてそれら巨刹の建築は日本のそれに比し著しく雄大に大まかに出来てゐるのである。巡錫の遊士をしてさすが支那大國の佛寺なるかなと歎ぜしむるのみである。觀光 雅客どもの誰しもよく訪ねる北京の法源寺、臥佛寺、碧雲寺、八大寺の如き、又長江方面では歸元寺、秀峰寺、甘露寺、金山寺の如き又漸江、靈隱寺、虎跑寺、七塔寺、天童寺、育王寺と云つたものに就いて考へて見てもその山門を入れれば直ちに一種大陸的佛寺の威塞せらるゝ如き靈感に打たれるのである。しかしそ

れと同時に支那寺は不思議に、吾人の如何にその境内に踏み込んで行つても虚心な態度で迎へられてゐると云つた暖かくて氣樂な呑ん氣な空氣の漲つてゐる點を著しく直感するのである。自分ながら不思議にも感ぜられたのである。長崎あたりの支那寺を訪ねてもさう云ふ氣分になれぬのである。支那に渡つて支那の佛寺に遊ぶときは忽ちその一切衆生を濟度してゐる山門であるといふことがあたまに來るせいでもあるか。事實は日本のそれと變はる筈はないのであるが左程支那では窮屈に考へられないのである。支那寺は都鄙共に大まかであつてがらんとしてゐる丈に人に迫らないところがある。日本の寺は自分だけの感じかも知れぬがブル階級や富者に力をおいてゐるかの如き臭氣が抜けないやうな先入主があつて純でないやうな氣がしてならぬ。

支那の寺廟はその裏面の經營がどうなつてゐるか、その點の立入つた話は出來ないが大體廬山方面の禪寺にしても又浙江方面の大きな禪寺にしてもよほどの不動産を持ち優に多勢の山僧の生活を支持し得るのみならず壇家によいものをつかまへてもゐる。山西、聖壽寺あたりの古寺になると山境壇下など云ふものはなくても、立派にその山を有し畑を有してゐるので庫裡には困らぬ丈の粟だの小麥だのを貯藏してゐるゆたかな所を見た。しかし寺廟にも色々通りがあつてその衰微した寺になると殆んど衰れたもので北京黃寺の如きひどい番僧の出て來て遊士に巧みに強要するものがある。たりその他南方地方でもかなり乞食同様の乞食坊主を住ませてゐる古寺も少なくないのである。

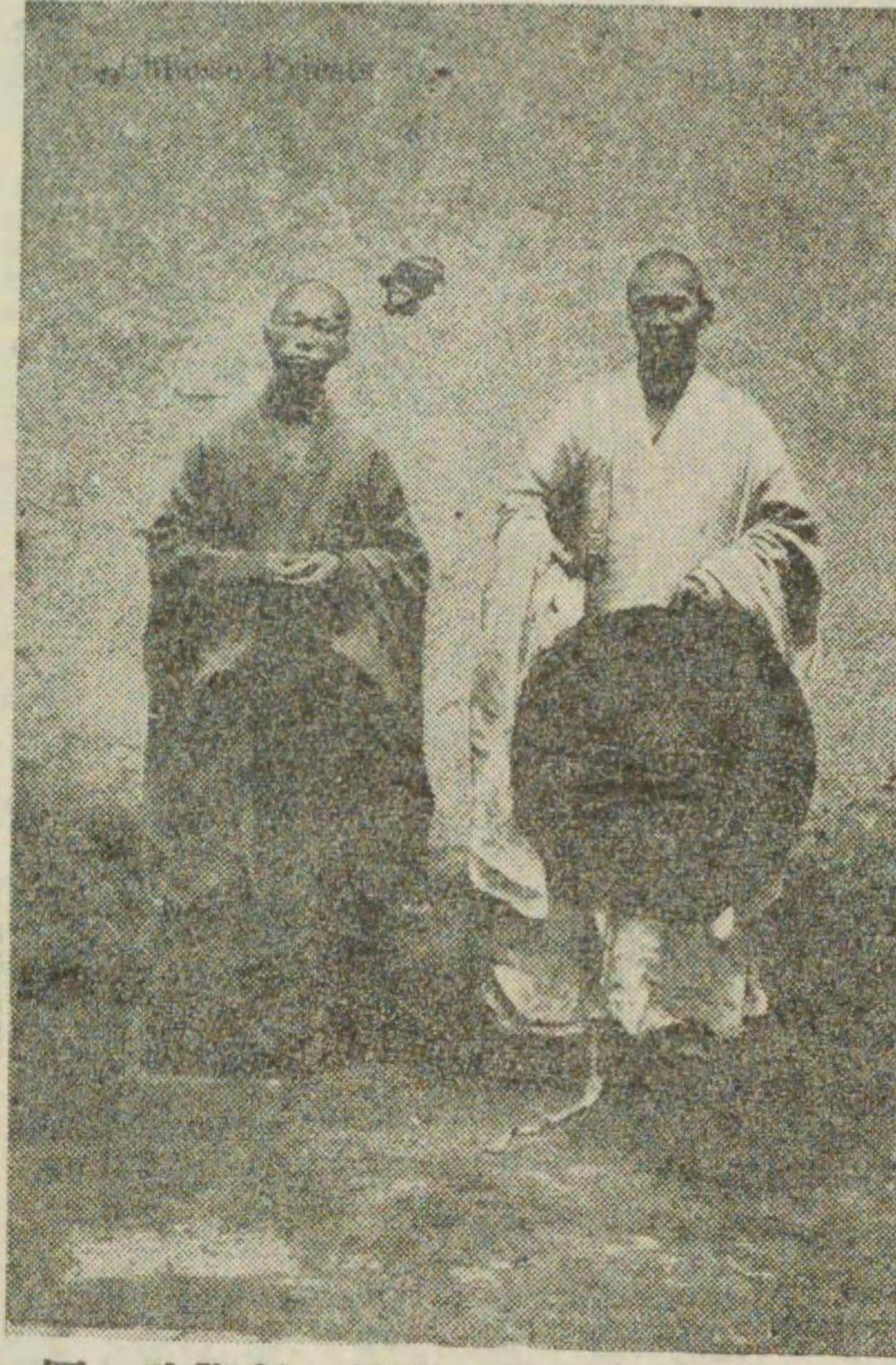
八十八 山寺の僧侶生活

山寺の高僧、大和尚、大禪師と云つた住持でもその數多の山僧と讀經でも擧げるやうな正式の場合には紅、紫の禮装をしてゐるゝが平素その書齋に於て書見などしてゐる時は不斷のまゝで例の袖の長い墨染めの衣を身にまとうてゐるゝのである。自分は時折り、大和尚や禪師の書齋に通され卓によつて、畫僧だの詩僧だのを集め墨戲に耽つてゐるゝ場面に接することがある。

茗茶を喫しながら書架を背景に窓近かい書卓で書を談ずる趣味は何とも云へぬ。とりわけ、江南の清明の時節雨紛々でしつとりとした日に綠蔭に文墨を弄し久しぶり大和尚達の聲咳談笑に接するなど懐かしいものである。この意味から湖江に遊ぶ度毎に自分は慈谿の池畔に普濟禪寺の定法大禪師を訪ねることにしてゐるが山門古塔舊の如く山手にかゝつた高所の書齋の大禪師を訪ね水野梅曉師來訪の話なども出たり、山村年中行事の挿話も出たり或は又禪寺に評判の素菜精進料理のもてなしなどもある。陶然と酔つた氣分で山僧どもと相交じり裏の松山へ蕨狩りにと出かけるなど殊に思ひ出が深い。

大支那系

定法大禪師の人格はいつも接する度ごとに自分親らからだも解ける感じのするぐらゐ温容漲り徳化の洵に偉大なるものがある。北支那ではとかく山寺生活の聯想が香ばしくなく甚だ不愉快な場面を見ることが多いのであるが江南地方は殆んどそれがないのみならず、浙江あたりの寺々は殊に感



江南京禪寺に見る禪僧の脚姿、二十點の灸痕を灸め戒めなど

じがよろしいのである。わけて寧波は弘法大師の上陸地點でもあり日本との由緒も深く又その全體の土地の風土、氣候生活様式も日本と何となく似てゐる所が多いのである。従つて山寺生活なども比較的日本のそれと類似せるところが多いかと思ふ。

寧波城内は曹洞宗の觀宗講寺の如き自分は最近之に遊んで僧坊に入り大和尚と語り素菜のもてなしを受けあまたの僧と卓を圍み道を談じた次第であつた。舟山列島の普陀瑠珈等に遊ぶものは多くこの觀宗寺にも訪問をなすの慣習になつてゐるがすべてかうした山寺巡りが無雜作に出來ると云ふこ

とは支那なればこそと思はるのである。

支那では山僧そのものゝ心がその國の大なるだけに又その山門の構への大なるだけにすべて大まかでさはりのよく、雲水の來たり泊するものに備へられてゐる譯でもあるか、五十名や百名くらゐ泊せしむべく客堂のあるなどもかなり立派な設備を施してゐるのでと云つた調子である。日本では日本の社會のせち辛くなれるところが自然と寺の生活にもひゞいて來てゐるが支那は殆んど之とそ趣を異にしいかにも寺らしくゆとりがあり訪ねて行つても居心地がよろしいと云ふのは事實である。吾人はお寺の氣分は日本も支那の山門の如くあらめたいと思ふのである。又それだけでなくは嘘だと思ふ。支那の山僧が墨染めの長袖をまとひ山門を去來せるあのゆつたりとした様子を見るといかにもその大陸的であり本當の僧侶なるものをしみんと感ぜしめるのである。

八十六 禪寺と禪僧

風俗・趣味

月は古寺に明かに客初めて到り、雪は空庭に満ちて鶴未だ歸らずとはよく禪寺の山門に見る文字である。或は禪堂の聯に七重の寶樹、金界を圍り、一片の氷心玉壺に在りと云つた佳句や、春は花宮に到り、苔石潤ひ、雨は竹徑を過ぎ野泉鳴くなど云つた妙句を讀むと身はいつしかその禪寺の庭

支那の佛寺

大支那系

に在ることを想記せしむるのである。即ち、

月明古寺客初到。

雪滿空庭鶴未歸。

七重寶樹圍金界。

一片冰心在玉壺。

春到花宮苔石潤。

雨過竹徑野泉鳴。

など、云つたやうな聯句の山門氣分を造つてゐる場合が多いのである。日本では葷酒不許山門の程度以上のものは見えず文字禪の妙趣を見出すと云つたことは殆んどない。支那は流石は文字國だけあつてその點は一般の風習と同じくトイヅ（對子）で以つてその氣分を作らせることになつてゐる。實によい方法であると云はなくてはなるまい。

尙支那の禪寺はその周圍の環境がよく注意せられ江南廬山あたりの禪寺であると廬山の南麓に持つて行つて海會寺、棲賢寺、慈航寺、萬杉寺、秀峰寺、歸宗寺と云つた風に相當な距離をおいて配置されてゐる。殆んど飛び飛びに隔りがあつて綠蔭に蔽はれ、後方には天下の名山廬山を背景と

風俗・趣味

してゐるのである。その他杭州西湖方面の禪寺にしても、鎮江甘露寺にしても、寧波天童山にしてもすべてこれである。この禪寺の周圍の環境が考へに入れられてその位置の定められてゐると云ふことは大層よろしいことである。人里遠き閑散な天然自然の背景に恵まれてゐる山寺でなくては本當の修業は出来るものでないとせられてゐる所に深い意味があるのである。かくありてこそその禪僧に眞の大自然を受容れたる禪機を感じしむることも出来る。三峽宜昌峽のうら山の秘郷に見る靈泉寺の如きはその點から云つて尤もな位置におかれたものと思はるゝのである。

自分共が同じく支那遊歴中に各處で茗茶を煮ても人里離れた禪門、山寺に禪僧を相手に鳥を聴き溪流を聞きつゝ語りあつた方がどれ位自然に近く又禪道にあこがれ得るか判らぬのである。讀書三昧に耽る場合にしてもさうである。支那の禪僧が何となく大まかであつて自然と相通するの妙趣を體得してゐるの概あるは蓋しこの邊の加減もあるかのやうに思はれる。

支那の禪僧はその一概に讀書に耽溺し念經に囚はれてゐると云ふよりもその常に大自然に接しその自然の空氣に自ら全身をこめて解けて行かうと云つた奉仕的氣分がある。それ故何となく禪僧には自然そのものゝ延長の觀があり茶禪一味の濫い趣を見させてゐるとは云へ大自然がその禪味の背景をなしてゐるの觀があるのである。それ故禪宗には臭さ味がなくて淡泊な所があり大きいとこ

支那の佛寺

支那大系

ろがあつてよろしいのである。こゝが却つて人を牽きつける點となり又人を感化する點となるものと觀ぜらるゝ。自分が現代支那の佛寺にあらがれ江南の禪寺めぐりを試みるものこゝに興味を感ずるからである。支那大自然のうちに各所に禪寺を見出すと云ふは自出の支那行脚に一種の禪味を添へてゐるとも見らるゝのである。

八十七 客堂物語

江南の禪寺のうちでも育王禪寺くらゐその構への宏壯にしてその規模の大きく、又その僧侶の多く且つ客堂の備への完備せるところはあるまい。天童にも訪ねて行つたが育王の方が遙かに新しくもあり設備萬端行届いてもゐる。寧波に渡るものは半日の運河を漕いで郊外の氣持ちのよい處を航行して行くならば譯はないのである。その僧侶には四五百名の山僧を包容してゐる文に客堂も優に九十人や百人を宿らせる餘裕を有してゐるものがある。

客堂には大客廳を有し梓の大圓卓や八仙卓、十景椅子を始め壁に對聯、鐵畫四君子の古雅なるを掲げその應接歡待振りも至つて懇ろである。まゐれば、客堂に案内され自分のために一室を提供せらるのである。ドアは扉二重になつてゐて、大きな寧波ワニスのかゝつた黄色の寢臺や八仙卓

椅子、機木の類は云ふも更なり馬桶尿瓶の便壺に至るまで用意され毫も旅館の設備に劣るところがない。むしろ寧波城内あたりの營業本位の支那宿よりも一層清楚にして掃除もよく行届き居心地がよろしいのである。寧波に一夜を過す位ならこの育王の客堂に出かくる方が氣がきいてゐると思ふ。

先づ接待係りの笑顔よき若い衆は請めに應じて八大天王殿から寶殿、靜觀(坐禪室)庫裡、鐘樓佛足石各所を隈なく案内してくれ又大和尚の處までも名刺を取次いで面會の機をつくつてくれる。育王も天童もその大和尚の書齋は最も奥深い山手の方で京都の東山のやうに松山を背景としてゐる閑雅幽邃のところである。大和尚に茶を請ぜられつゝ、暫し語らひ、何れ當山に客堂に籠もつてゐる身なれば時々訪ねまゐるべしとの挨拶にこれを辭し先の廊下と違つた方の道を案内されてこんどは臺所、炊事場の設備、規模を見せられその廣きに驚かされたのである。油茶、油條、豆腐、胡麻油、豆腐乾などすべてそのうちで作つてゐる光景など素晴らしいものである。

客堂に歸つて來れば又熱茶を請ぜられる。隣室にもどちらから見えたか實業家らしい相當な紳士淑女の一家族がお籠もりに見えてゐる様子を見る。聞けば一週間以前から見えて通夜などしてゐた事との事であつた。精進料理で晩飯をとり紹興酒でよい氣分になる。詩僧畫僧なども話しに來る。

風味・俗風

大支那系

支那古代史の話やら文學やら趣味談に花が咲く。尼さんの外たいてい客堂近くにゐる坊さん達は食後遊びに見えるので可なり賑ふのである。やがて接待係りが案内に見える。

「只今から本堂で夜のお勤めが始まりますが御都合で出らるゝなら御案内を申し上げます」

とのことにそれではと案内せらる。廊下をぐるぐ引まはされて堂に入る。八時半になると讀經が始まる。堂内の中央奏樂のところにのみ眼を注ぎ見てゐると日本の大寺に見るそれよりか樂器も多く賑やかで深みもある。向つて右方には他の客堂の家族たちの見えてゐるのが燭燭の明かりで窺はるゝ。やがて奏樂が終るとどちらからか判らぬ、がともかく堂内井戸の底から聞ゆるやうな聲で静かな落付いた念經が始まる。自分はたゞ謹んで之を聞いてゐた。しかしどこら邊りにゐる名僧の發言なるかを確かめるに心を配つてゐたのであつた。

すると思ひもよらぬ堂の天井裏の方で恰かも正面の普賢、文珠の兩菩薩の像の前に地上から三四間もあらうと云ふ高い宙に昇つてゐる和尚さんからそれが出てゐるのであることが判つたのである。燭の明かりでその下に不思議な梯子のあることが判つたのでやつと肯首されたのである。念經の内容などよく判らぬ自分は唯かうしてその堂内の不思議な設備だの奏樂のことなどにのみ注意してゐたに過ぎなかつた。そしてお勤めが終るとひと通りそのあたりの樂器の様子とか壁に藝術的の作りつけになつてゐる極樂の圖とか菩薩の像とか隈なく參觀しそれがすむと又案内せられて迷はないやうに燭に足もとを照しつゝ部屋に歸つて來たのである。廊下各處に「小心燭」と火の字を倒さまに書せられた貼札のたくさんあるのを見たときは大寺の炎上の恐ろしさを思ひ出さずにはゐられなかつたのである。

又この頃寧波觀宗寺に遊んだときは大和尚の根慧住持と語らひ隔意なき歡談に時を費やし打寛ろいだのであつた。自分に何日ぐらゐ逗留が出来るかとの問ひを發せられ、

請住幾天可否。

と云はれた自分は七塔寺から天封塔など懐かしい處があるので一々お寺めぐりをやる積りであるからゆつくりしたいが何日と日はきまらないと云つた。根慧住持はかつて水野師にも親交があり上海本願寺の小笠原彰眞師にも親交がある。水野梅曉先生佛教精通云々の話も出て談は次から次へと花が咲いた。住持は又かつて日本に遊ばれたことがあり、鶴見の總持寺の印象など殊に深かつたと見えて次の如く語られたのである。

前年八月初旬。僧帶有五十餘人到横濱及東京神戸三處做追禱佛事。貴國僧衆甚爲歡迎上有一月時即回中國。我在貴處總持寺。到過其寺甚大莊嚴僧規亦好。

支那の佛寺

風俗・趣味

大支那系

住持の面目今以つて見る如き心持ちがする。そして住持自ら觀宗講寺内部を客堂、庫裏、賄所とすべて隈なく案内せられたのであつた。此の寺の素菜便飯もおいしく頂かれたのであつた。又大雄寶殿前の放生池は清淨で魚躍り嬉々としてゐるのがやさしく眺められたのであつた。

八十八 榮ゆる寺と亡び行く寺

支那の寺は全體から云へば亡び行く寺の方が多いのであらう。わけて北支那の各所をあるいて見ると盛な寺と云ふのは少なく荒廢に傾き狐狸の巢となつてゐるのが多い。従つて山僧と云へば乞食坊主を聯想せしむるやうなのが多いのである。ところが南方にまゐると豫想は裏切られ隨分立派な寺が多く浙江天竺の上天竺、中天竺、下天竺の如き春の清明節の頃になると毎年幾十萬の善男善女が寺詣でをするので杭州西湖附近は爲めに青の頭陀袋を下げた連中が殆んど列をなすの壯觀を見ると云つた位である。榮ゆる寺と云つては變に聞こゆるが大變な募化、賽錢のあがりだかであらう。事實又その天竺にそのシーズンに行つて山僧の立廻はりかたを見て居るし參詣の手向けた紅蠟などはその禮拜する人々の爲めを慮つてか、その手向けて未だ幾何もならぬにすべてその燭蠟は抜き取り火を吹き消しては空箱に投げ込んでゐるのを見るのである。恐らく燭蠟屋の店の方とその坊

風俗・趣味



北平城内喇嘛寺雍和宮の經讀後堂を退す喇嘛僧の群

支那の佛寺

主とは關係があつてこは山僧の役徳として別途收入になつてゐるものと考へられる。天竺の寺の町でもその裏面に活躍する支那僧のぬからぬ處など看破する時は愛憎がつきるのであるが、こゝが支那の支那たる處である。榮ゆる寺にはかくして僧侶銘々までもが一種の利得を當てにすることが出来る。附近の寺町の珠數屋、香料屋土產物屋、飲食店、宿屋と云つたものを始めかなりその地方人民の經濟をゆたかにすること日本の大和、天理教附近の比でないのである。そして榮ゆる寺には靈隱寺や育王の如く比較的新しく造營されたやうなところもあり又どん／＼修繕の届く寺もある。無論こは檀下の喜捨に缺つのであるが南方では白蟻の害で柱楹の取り代へとか「たるき」の差しかへとかかなり大仕掛の營繕を見ることがあるが、すべて寄附で出来てゐるやうである。それ

系大那支大

から支那寺では日本の寺のやうにその寺の境内へ持つて行つて墓地を作ると云つたことはなく陵墓は別に郊外の廣い處に設けられ田舎でよく見るやうに土饅頭の累々として續いてゐるところがあの通り各處に見出さるゝのである。又地方によつてはその自家の田畑の間に塋地を定めてこゝに風水説に従ひ方向をきめて墓を作つてゐるものもある。

亡び行く方の寺と來てはその訪ぬるに住持もゐるではなし、僧坊は毀れ古塔は傾き、ありし昔の庫裏の竈のあともなく見る影もなくなつて化け物屋敷の觀を呈してゐるのがある。或は又掠奪破壊の厄に遭ひ一物を餘まさずやられたものなど見るも哀れな情態になつてゐるのである。廬山天池寺とか東林寺西林寺とかの如きは廢寺同様になつてはゐるがまだよろしい方である。北平の黃寺や通州の大觀廟、寧波の天封塔と來ては全く狐狸の巢で乞食の住まひとなつてゐるのである。要するに現代の支那寺はその立派な大規模のものを求めんとするならば奥地の名利深山の古寺に

之を求めなければならぬ。峨眉山や五台山、九華山、廬山と云つたやうなところにはそれ〴〵昔から名利が残つてゐる名僧も之にこもり有徳の大禪師として又大和尚として高くその品位を維持することが出來てゐるのであるがそのあまり開けた地方となると兎角廢寺が多く名僧も少くなるかの觀があるのである。

二十二支那現代の儒教

八十九 儒教不振の事情

中華民國、國民政府が三民主義によつて學生を教育し國民を率ゐて行かうとする大方針からすると、從來の孔子教は政策上抵觸することのみ多く、國民政府の存續する限り儒教の復活は覺束ないであらうとは夙に世上傳へられてゐるところである。

されば孔子祭なども本年限り（民國十七年）で亡くなるであらうとは支那でも傳へらるゝ所である。南京の大學院から孔子祭廢止令さへ出てゐる位であるから今歲秋の孔子祭が濟南城內孔子廟で營まれたのは恐らくその最後のものであつたらうと取沙汰してゐる者もあるのである。聞くところによるとその孔子祭の催しも治安維持會によつて營まれたのだと云ふことである。時代の變遷と云ふものは恐ろしいもので孔子出世の地曲阜に於いては最も猛烈な運動が起り孔子祭廢止運動は固よりのこと、城内の各所には「打倒衍聖公」だとか「孔林、孔廟國家恒産」だとか又は「衍聖公制度反革命的制度」など、云ふポスターが目立つやうに掲げられてゐるのである。孔子以來七十七世の

味趣・俗風

大支那大系

間聯綿と續いて來た孔家衍聖公府は過激なる黨員の反感の的となり、男女平等を目的とする婦女協會なるものが神聖なる孔子廟内に事務所を設け、孔子の墳墓、聖林が廣東軍官學校出身の青年將校等によつて冒瀆されつゝある有様なども周知の事柄である。その爲めであるが、當代衍聖公の叔父に當たる孔寧祝氏は時事の非なるを概しこの程、孔廟保衛官の榮職を辭した程であるから今秋曲阜では勿論孔子祭は行はれなかつたのである。固よりひろい支那のことだから省によつてはそれに反對もあつたであらうが大體は三民主義の徹底を期する上から之を廢止すべしとの論の多くなつたのは是非もないことである。

しかし南京に於ける十月二日の國民政府會議の決議を見ると、孔子の誕生日を以て孔子祭日に設定せられてゐることが公式に示されてゐるところから見ると必ずしも孔子祭を無視してゐるのではないらしい事が判るのである。三民主義と儒教との關係又その解釋に就いては慎重に考ふべきことも多々あるのであるがしかし儒教そのものが一般民衆の日常生活にあまりたいした影響を持つてゐないことだけは事實である。それよりも通俗的な色々の道教的色彩を帯びた信仰の方がどれ位民心に深く刻み込まれてゐるか。その邊のことを考へて來ると實に雲泥の差があるのである。一般の民心は儒教そのものから直接何等かの御利益が降つて來なくては物足りなく感ずるのである。その點になると儒教は治國平天下の大道は説いてゐても直接自己の生活を濡ほしてくれるものは何もないのである。

儒教は從來とかく官僚の宗教となつてゐてその天子なり治者なり政府筋なりのものから利用せられた形が濃厚であり、その方面の財力によつて孔廟の建築營繕の事も行はれてゐる。山節藻梲の五彩の美もあれば黃裳柱楹輪奐の美も十分に出來てゐる。けれども多くはその孔子廟の美はいかに美であつても人民は之を自分共の美として考へてはゐない。孔子廟はつまり天子の宮殿、皇宮の延長見たやうな感じしか起つてゐないのである。從來の治者はたしかに孔子廟を以て單なる行政上の具に供したまでであつて之を以て人民、そのものゝ廟であると云ふ氣分は興へてゐなかつた。さればこの廟はいかに輪奐の美を發揮してゐても何だか爲政者の私有物にあらざるまでもその爲めに作るどころの延長建築物くらゐの考へしか持たれてゐない。

九十 孔子廟參拜

日本人が孔子廟に參拜する時と支那人のそれとは著しい氣分の上の相違があるやうに思ふ。これは日本人が論語に對するときの氣持を支那人のそれに對比しても略似たやうな結論を見るこ

支那現代の儒教

風俗・趣味

大支那系

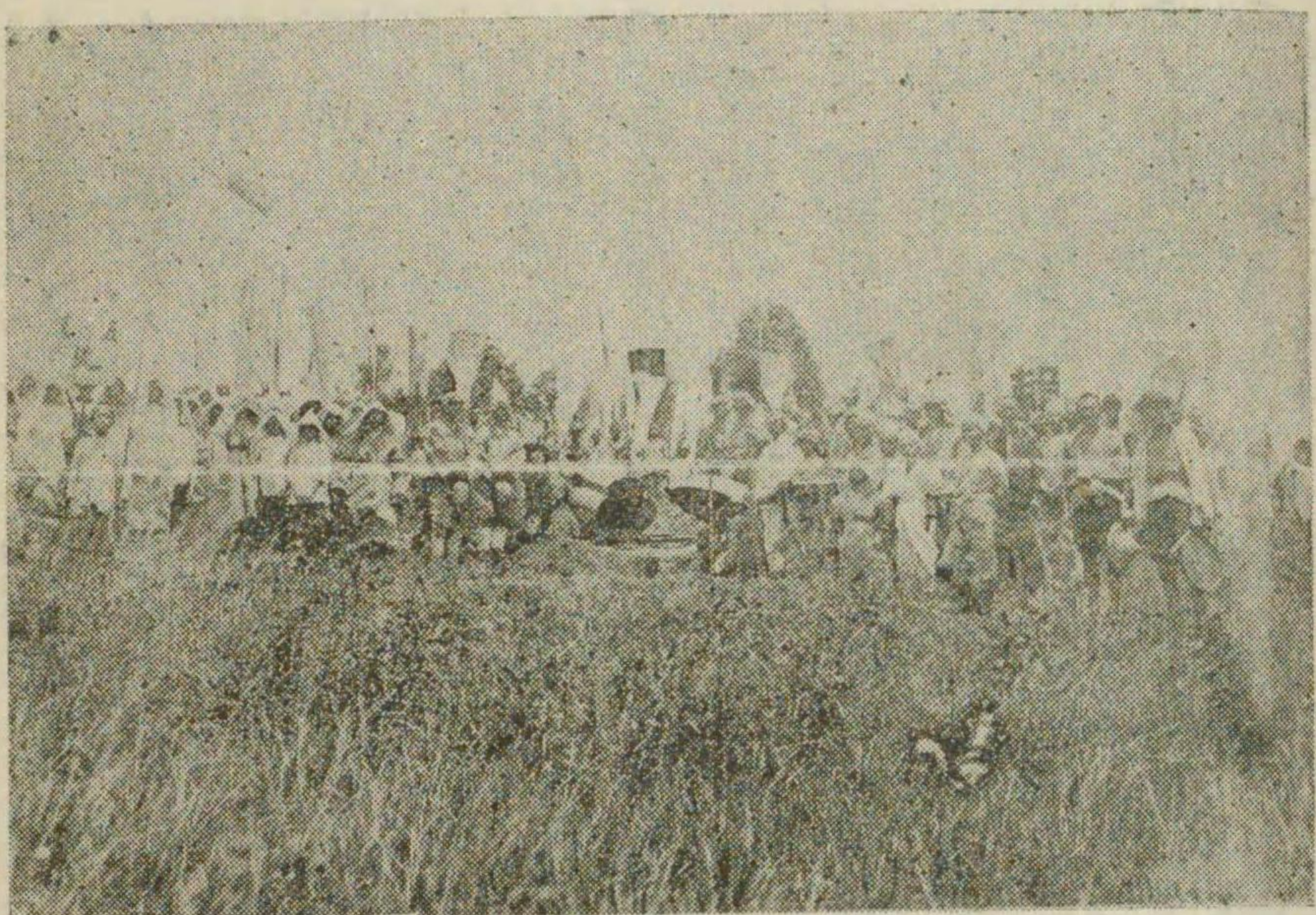
とが出来たのであつて日本人の方は全く純なところが有り唯各人常にその徳行を慕ふところに終始してゐる。ところが之に反して支那人の方では之をよく實際化し政治生活の上に取り入れ純政治上の具に供してゐるところがある。こゝがよほど双方の氣分の上で違つてゐるところである。

支那では爲政者の爲めに元來孔子廟は相當以上に必要な具に供せられてゐるだけそれだけの修理の事にも十分力が遣入つてゐる。従つて官費で以つて營繕の事もやられてゐる。それ故孔子廟は人民の方では自分だちの廟であると云ふ氣持ちがしてないのは固よりのこと頗る冷淡であるやうに見える。俗官とか御用學者とかの官邊系統のものは別としてその他のものは殆んど問題にせず孔子廟なんか關せず焉であるとして澄ましてゐるのである。又實際上から之を見ても孔子廟へ態々參拜に出かくる人民などは殆んど絶無と云つてよろしい位である。特別の學者とか外人觀光客とか寫眞撮影のアマチュアとか云つたものは之を訪ねることがあつても一般民衆にとつては何の事もない。

孔子廟そのものゝ方でも平素一般民衆や行人どもをして之を參拜せしむるやうに晝間開門でもして參詣者を迎へるやうな態度でゐられるところは殆んどなく、いつでも固く門を鎖ざして内に番人をおいてゐると云ふが普通であつて全く來たるものを拒絶してゐるわけである。その文廟を訪ねた

成殿に歩を運ぶものでもあるとすれば番人、看門が之を好機にうるさくメンチエン(門錢)を強要して

風俗・趣味



中央に安置せられたる棺木は父母の柩を前墓に別に別を惜む。福の建風の俗

支那現代の儒教

て來る。いくらいくら出さなくては扉は開く事罷ならぬと云つていやに頑張つてゐるのである無論誰れでも入れると云ふ開放主義をとつてゐるときは泥棒の心配が絶えないと云ふこともあつてあらう。しかしそれは道教のお寺に於いても同じことであるが道教の方はすべて開放主義であつて而かも何等泥棒の心配などしてゐるものはないのである。

孔子廟では意外のことに廟内の常詰めの番人どもが内職に廟の寶物や屋根の瓦などを持出し外人客を目掛けて之を賣り付けてゐるものがある位である。されば名こそ孔子廟で天下萬民の爲めに存して堂々としてゐるやうであつても事實

上、人民そのものに精神的に結びついてゐるものとは思はれないのである。それと云ふが上述の如く文廟はもとく爲政者の爲めの官僚氣分で維持されてゐると云つてもよいものであるから別段その地方の人民だちの精神的に禮拜に來るものゝあることを必ずしも要求してはゐないのである。孔子廟の方がそれであるから人民の方でも同じやうな心持ちである。双方が冷淡であるから孔子廟によつて兩者の心から結び付きの出來るなど云ふことは固より望むべからざることである。

人民の方から云はしむれば孔子廟はいつも知らぬ顔をしてゐて人民の生活に關係のない態度をとつてゐる。例へば

- 一、病氣の平癒の祈禱にしろ、
- 二、惡魔禁厭の加持祈禱のことにしろ、
- 三、煩悶苦惱の解決（神籤）のことにしろ、
- 四、風水地理の占卜、

など云つた類のことをその廟内かどこかでいくらでも絶つてよい方に解決してもらひたいことがあるのである。ところが孔子廟の方では元來かゝる卑近な事は一つも取扱つてゐない。爲政者でない民衆は無論かうした手近いことで直接の御利益には接して居らず之を孔子廟から望めると云ふこと

にもなつてゐない。

自分共がこれ迄いろく支那都鄙を巡歴して各寺廟を視察して見るにその市井の巷に見る城隍廟とか文昌帝とかニヤンくミヤオ（娘々廟）乃至は土地廟あたりにはすぐ判かる通りその廟では門内門外にいかにも民衆氣分の漲り著しく人間味のある點に興味を唆らるゝのであるが之に反して孔子廟の方は全く民衆の心を離れてゐて殆んどその出入せる人影だも見ることもなく、春秋の祭祀にしたところで唯その祭祀に關係のある役人、官僚系のものゝ之に集まり來ると云ふだけで誠に民衆ばなれのこと夥しいものがあるのである。孔子廟は各省各地何れの城内に在りても唯輪奐の美や高莊雄麗の趣を添へてゐると云ふ丈であつて民衆の之に寄りつくものが殆んどゐないと云ふことそのことだけでも既にいかに平素人民と没交渉のものになつてゐるか云ふことが證明されてゐるやうな氣持ちがしてならぬのである。

されば今日國民政府が三民主義を標榜して民族、民權、民生の三大方針を力説するの必要もないくらゐそのモットーは天下を風靡してゐるが孔子廟そのものは一般民衆の氣受けがよろしからず又日常生活の上にも縁が遠いものと見られ従つて何等重きがおかれてゐないのである。そればかりでなくむしろ邪魔物扱をされてゐる所もあるのである。國民黨の連中が山東の孔子廟そのものを

大支那大系

没收せんとするの勢を示して来たのも又故ありと云ふ可きである。唯從來天子の力や又これまでの政府の力が充實してゐた場合に於いては之が光を盛に放ち利用され又之を政治上の具に供して治國平天下の目標にしたこともあつた。しかしその政府や又爲政者の力の衰へて来たときには仕舞ひである。廟は殆んど荒廢に歸して見る影もなくなり全く狐狸の巢で踏み込めない位にひどくなると云ふのが落ちである。恐らく今日以後は孔子廟は益々その荒廢の度を高むるの運命になつてゐるのではあるまいかと想像さるゝのである。

九十一 文獻上に於ける儒教

今や儒教の實際上の權威が地に墜ちて殆んど顧るものなくなつたと云ふ實情が上に述べたるが如きものであると云ふことが判つて來ると現代支那の儒教の實況は日本人が日本の書物のみから想像してゐるものとは丸きり違つてゐる事が判る。支那の社會では自分の見るところは孔子廟はつまるどころ官僚式に爲政者の具に供せられそれ以上にはひろく利用せられてゐないのであるから勢ひその範圍が儒學者の筆の上とか治者側の手ですまり治國平天下の上のみにしか現はれて來ないのである。されば民衆自身から見ても自發的に孔子廟を尊敬してどうすると云ふことなどは先づ殆んど

考へてもゐないのである。

風俗・趣味

孔子廟なり又その儒教の教理なりを文獻の上からのみ眺めてゐるときは實に立派なものに見える孔子教は實踐道德の大道を述べたものであつて、その爲政者側からの言葉は實に堂々としたものである。書物の上には實に見事に現され儒教の生命は實にこゝに在るものと察せらるゝのである。元來儒教そのものは日本人の考へてゐる如くさうその窮屈な固苦しいものではない筈である。支那人は極めて氣樂に解してすべて之を日常生活のことにも編み込まんとしてゐる。日本では今日之が江戸時代のやうに實地に政治上に應用せられてゐた時代とは異なりたゞ單なる書物の上の解釋文字の末、字句の講釋にのみ止まりそれ以上にたいした任務を示すだけの力がなくなつてしまつたそこで愈々以つて名ばかりのものとなつて實際的にはたいした事も出來ず權威がなくなつてしまつたと云つてもよい位になつた。今日のところではどこ迄も文獻の上、書物の上でやゝ之を學問的に尊敬してゐると云ふに過ぎぬのである。つまり今日では固より儒學者の本意ではあるまいが事實は誰れが何と云つても唯ペーパーの上の儒教となり了り畫に描かれた餅と同じやうなものに世間から取扱はるゝに至つたのである。いかに之を否定しようとしても世人は既に皆相場をきめてゐるので之を反駁しても始まらぬと云ふ所來てしまつた。

しかし儒教は果たしてかくの如き力の弱きものとなり果てゝゐてよろしいものであるか。そのペ
 ーペの上の學問に止まりせめてもの慰安を得てはゐるが實際社會からは最早や葬り去られ南京國民
 政府からも日本の社會からも始んど問題にされなくなつたかの如く見らるゝにまで窮迫した情態に
 立至つた。こゝの點はよほど考へなくてはならぬところである。この點を反省し今日の流れを察し
 て今日の宗教界なり又思想界なり毅然たる一大教訓を樹立し之をして世人の崇敬の的となさしむる
 だけの大業が出来るかどうか。又世人そのものにも之によつて自己の精神的の糧となし得る氣持
 があるや否やその邊の問題になると頗るデリケートになり頗るむづかしいことではないかと思ふ。
 儒教が文獻の上のみの教へと云ふやうな眠つたものではなく今や翻然覺醒して本當に現代人の深
 刻なる心胸まで立入ることの出来る教へであるかどうか。固より深刻に立入ることの出来る教理も
 十分に含んでゐることは判つてゐる世人が儒教のこれ迄の形で以つて之を取り入るゝ氣持があるか
 どうか。むしろそのもつと變つた新しい形式、新しい説きかたを以てしなくては受付けなくなつた
 のではあるまいか。儒教學者は徒らに世を嘲つたり世を悲觀したりすることに終ることなくむしろ
 進んでこの點に着眼し民衆の濟度に努力せんことを望むや切なるものがあるのである。つまり儒教
 は今日の現代思潮なり現代社會意識なりと云ふものを一歩先んじてよく理解しその蘊に嵌まるだけ
 の新しい智識を有しその間の氣分を理解してそれに満足と興へるやうな行きかたをして欲しいので
 ある。それだけでなくは所詮今日の學問界からも實際社會からも取り残されて行くにきまつてゐる。
 こゝに儒教の活路の見出しがたが存してゐる。

九十二 儒教を超越せる支那人

日本人はその純な正直な性情からして論語に教ふる所に反する行動をとるなどは氣がとがめる。
 孔夫子の教ふるところはどこ迄も遵奉しなくてはと云ふよい心掛けがある。倫理道德の根本義はこ
 こになくはならず、日本人が真正直に之を標準として考へてくれてゐると云ふことは誠に美しい
 事である。儒教を奉ずるものがこの氣分であるし又こゝにその根本觀念を置いてゐるのであるから
 孔夫子を尊崇するの念も亦頗る篤い。
 近來その儒教の思想が時代に合はなくなり窮屈であるとかあまりに形式に失すとか非難するも
 のが出て孔子の教から寧ろ好んで遠ざからんとするものがたくさん出て來た。そこで儒教は近來の
 思潮からは時代おくれの教へでもある如く云はれるまでに至つた。これはどこ迄も日本人からは
 儒教學者が實際生活に於いて遠い迂遠なことを吾人の日常生活に強ひてゐるのであると云ふ風に

大支那系

見られてゐることを裏書きせるものである。と云ふのは日本人はつまり儒教とか孔子教とか云ふ看板に對しあまりに正直に又あまり之に重きをおき過ぎる傾きがある。世間でも云ふ孔子の教へなどあまりに勿體ないとか君子の道は凡人の常道でないとか云ふ風に敬遠主義で以て見てゐるのであるがその實正直な所孔夫子の教にもすぐの役に立たぬ所がかなりあり日本では最近殊に儒教などと云へば之を食はず嫌ひをしてゐるのである。東京の市中で儒教の講演の催さるゝときなどを見ても青年たちはてんで寄りつきもしない。たゞ時代おくれのしてゐるらしいあたまの古い連中が數人そこへ集まつて來るぐらゐが關の山である。これは一體何を物語つてゐるのかと云ふと儒教が世間から畏敬され遠ざけられ之を問題にすることさへもしたくないと云つた空氣の漲つてゐることを裏書きしてゐるためだと察せられる。

その點に於いて支那の人々はどちらかと云ふとその極めて新しい所謂新人連中は別であるが多くの支那紳士連中は矢張りどちらかと云ふと表面上君子を以て自ら居り、都合のよい時は仁義も説き惻愍の心も宣傳することはする。そして利慾のことなどはおくびにも出さず全く君子然としてゐるのである。しかし一つ都合のわるいことに出くはすときは論語の論の字も言はなくなる。否孔子教の廢止論までも唱へまじき勢を示すに至るのである。その邊になると支那の人々はゆとりが

風俗・趣味

あり實にシヤアシヤアしたものである。別段論語を恐れたり之を尊重したりする氣分も見えないのであつていつでも之を利用してゐる代り又いつ何時之が無用論を唱へ出すかも知らぬ。實に自由自在なものである。そして少しもそこに囚はれた心持がないのである。さればかれらは決して之を以て正直に人生の日常行動を束縛してゐるものと云ふ風に窮屈には見てゐないのである。

もともと論語なるものは人生の日常行動から飛び離れたことを云つてゐるものではなくむしろ密接な關係のあることを述べてゐるのである。それを今日では日本人はひどく固苦しいものとして敬遠主義を採つてゐるに過ぎないのである。が支那人はその處は氣樂に利用しその用のない時分には之が超越的態度をとつて澄ましてゐるのである。その邊は日本人の考へてゐる孔子教觀とはよほど違つてゐるのである。

支那人がこの頃三民主義を標榜して之を社交上にまた國交上に利用して來たことは最近の支那局面に特筆大書すべきことであるがこれ迄もその儒教の思想を標榜したり又その論語の句を翳したりして之を社交上に又國交上に應用してゐたことは最も氣の利いたやり方であると考えられてゐるのである。今日でもその社交上の辭令を巧みにし相手の氣持を反らせず彌が上にも持上げて人を喜ばせるやうなやり方をするのは儒教から來た洗練せられたやり方である。世間にはいかほど國民革

支那現代の儒教

命の思潮が漲つて行かうとも儒教の教への中で自己の社交に都合のよい文句メンツ（面子）を發揚して行く上に調法な文字と云ふものはどこ迄も利用されて行くことゝ察せられるのである。かくして支那民族は極めてゆとりのある自由な立場から儒教を超越してやつて行き而かも儒教を捨て、しまつてもよいと云ふ處にほかされたやうな一種大きな民族性が現はれてゐるのである。

二十三 支那現代の道觀

支那現代の道教は儒教や佛教とちがひ直接支那人の生活に關係の有るものと見られてゐる爲め之が信仰の厚く大衆を相手にその精神的結合を固くせるところは恐らく支那の宗教現象のうちで、最も顯著なものと云つてもよろしいのである。わけてもその民衆の迷信と結付いた道觀の年中行事の如きは到抵佛寺や孔子廟などで夢想だも及ばぬものがあるのである。

支那道觀と民間尊信の關係は支那大衆の信仰問題を研究する場合には最も重大視するべきものである。それにも拘らず日本では此の道教方面のことが殆んど知られて居らず、儒教研究の爲めに蔽はれて日蔭になつてゐるの觀がある。支那人の廣い意味の精神生活を見んと欲すればよろしく此の道教の研究、道觀の觀察に深く意を拂はなくてはならぬのである。今こゝにはその道教の尊信されてゐる情態や雲水の生活俗間信仰のことから民心吸引の魅力、將來の道教の力などについて簡単に卑見を述べて見たいと思ふ。

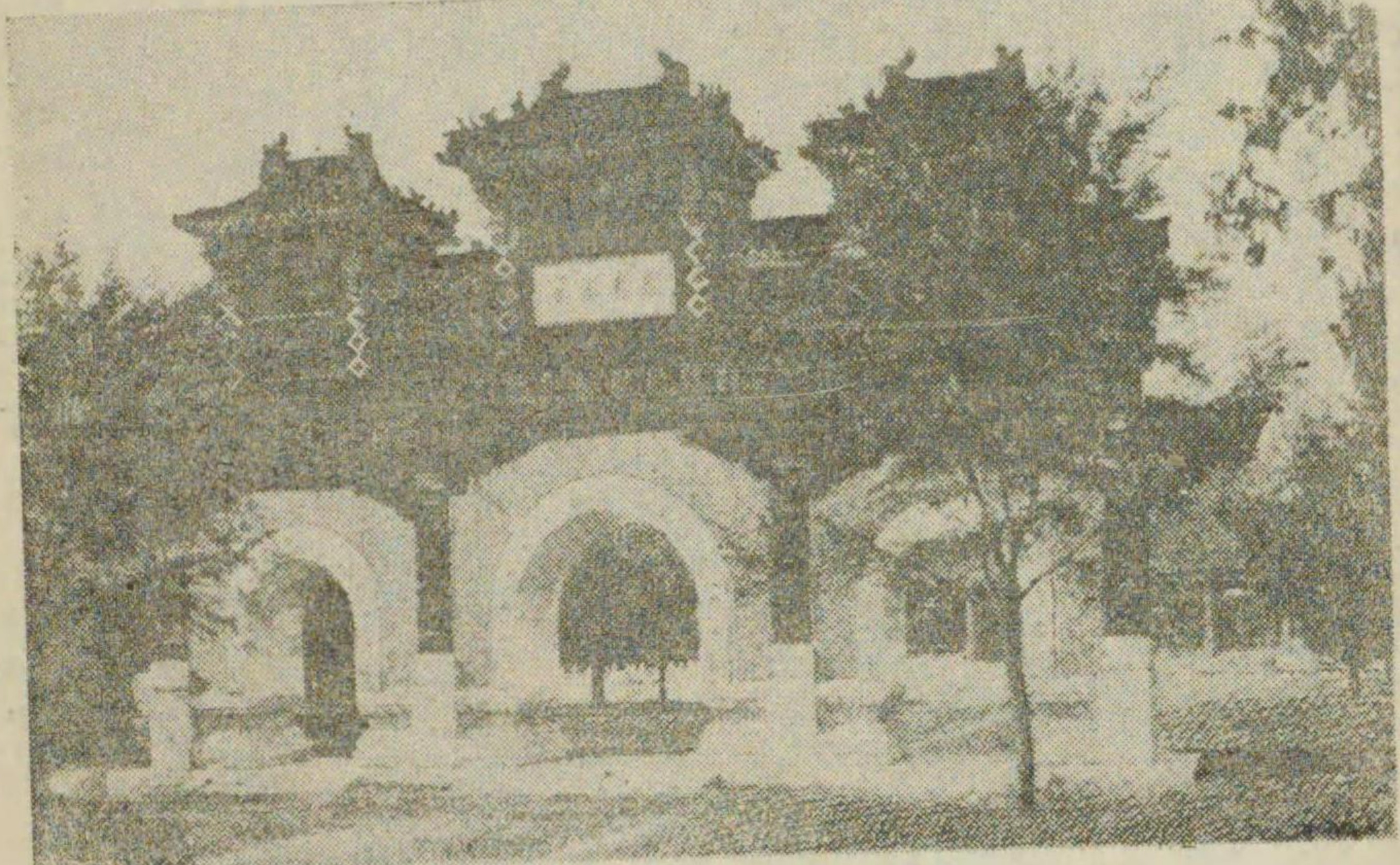
大支那大系

九十三 北平の白雲觀

北平の白雲觀に蘇州の玄妙觀。南滿洲の千山などと云へばその道教信仰に興味を持つものは必ず指を先づ屈する有名な巨利である。今日地方に見る幾多の道觀、清道觀などと來たら、その規模の廣大なる點から見ても著しい隆盛振りを見せてゐることが判る。蘇州に遊んだものはその城内の士民が孔子廟に懐かしみを有するか、それとも玄妙觀に懐かしみを有してゐるかを比較して考へらるゝならば誰しも比較にならぬほど孔廟の淋しくそして訪ねる客の少なきに比べ、玄妙觀の方は四時朝夕いとなく大變賑つてゐる現象を見出すであらう。これは孔子廟は單なる爲政者本位に出來てゐるに反し玄妙觀の方は即ち民衆本位の尊信を博してゐるに據るものであることは云ふまでもない。

北平、白雲觀にても同じことであつて、その北平界限で毎年正月元旦から十九日までの御開帳までの間の賑ひと來たら驚く可きものである。幾萬、幾十萬と云ふ善男善女が之に參詣する。そのうちでもあらゆる階級、あらゆる方面の乞食どもが集まつて來て一般參詣者から喜捨を受けるのである。それは一般參詣者の間では凡そ道教の神様はどこにゐるかかわからぬ。乞食の姿をして來てゐるかも知らぬ。決して人間は、姿だけでは決すべきものでないとの考からして、ひどく乞食がもてるのである。そこに一種脱俗した面白い思想があつてその白雲觀の祭りの名物呼び物となつてゐるのである。

味趣・俗風



北平雍和宮拉摩寺境内に輝く白雲觀の樓

支那現代の道觀

また白雲觀には有名な窩風橋と云へる石橋がその門内の境内にあり、その舊曆正月の祭りの時ではその石橋のそばの窪くなれる地べたに持つて行つて敷物を布き道士が端坐してこゝにお勤めをする。その間一般參詣者は橋下の輪の中に懸かる鈴に持つて行つて、銅兒子の銅錢を投げ當てるの奇習がある。容易にその鈴に當たらぬのであるがそれを努めて投げ當てるやうに盛に投するのである。自分は最近北平は西便門外を白雲觀へとさびた田舎路を行き、門を入り周道兄の室に至り友人完道君の紹介で色々

大支那大系

道教雅俗の清談を交はし、又揮毫などをもなしたる後「長春」の大文字の影壁に鮮かに眺めらるるを賞し各道院、殿堂の幽玄なる祭壇を逐一めぐり案内せらる。周道兄の道室に入り熱茶を請ぜられ、静寂の氣に打たれつゝ道教の話をしてゐると身はいつしか深山白雲の郷に在るの思ひがする。乾隆皇帝の使用せられてゐたと言ふ自然木の根の複雑を極めた阿片用の寢臺など、殊に物珍らしげに眺められた。又その寢臺の背景に掲げられたる正楷の屏風の文字は顔真卿流の能書と拜せられ、自分は飽かすいつまでも見て居たかつたのであつた。

白雲觀の祭りの時を避けて、平素靜かなとき之を訪ねゆつくりと境内を視察見學し時にはその門を入りて右側雲水の大室などにも入り心もゆかんばかり老若色々の雲水と語り、その甘肅陝西、四川の奥地各省より難行苦行を積みつゝ北平まで來たる間の苦い經驗談だの、又その各雲水の背に負ひ山川を涉つて來る時に用ひた旅具の水のつゞら、尾籠の話などかなり興味の深い話が交換されたのであつた。

道觀の門前市をなし、民衆の歡樂氣分になれる時を見はからひ之に遊ぶのも固より研究上その資料を得ることも多いが又かうしてその平素靜かなとき道觀を訪ね雲水と山水を語るのも自分の趣味に合ふところがあつて何となく自分自身が黄河の上流を渡り、又峨眉山上に半輪の月を賞してゐるの感に打たれるのである。

九十四 大自然を採入れたる道教

儒教や佛教と異なり道教は支那の自然を採入れ天地自然宇宙を打つて一丸となし、之をその道教の氣宇のうちに收めてゐるところに愉快なところがある。老子とか莊子のうちにもその天地自然の大を採入れて天長地久の思想や大鵬の話を始め實にとつともない大きな話が歌はれてゐる。時には取り止めのつかぬ、又手で掴むことの出來ぬ大きな對照物を想像の許す限り採入れ譯なく之を取扱つてゐる。

風俗・趣味

道教の寺觀と云へば山上一望千里の形勝の位置を占め、又天地幽明の境とも稱すべき絶好の勝地に建立せられてゐるものが多い。山東泰山に登りたるものはその南天門外、絶頂の巖上に持つて行つて碧霞元君廟と云ふた如き有名の廟が堂々と輪奐の美を示し巍々乎たる藁を碧空に聳やかしてゐるのを見られたであらう。いかにも道教の寺らしくて嬉いではないか。固より山東泰山には孔子廟もあれば、金剛盤若經の經石峪もあり、まるで儒教佛教道教何れもが互に競争的にその勢力を天下の名山泰山山上で現はさうとしてゐる。支那宗教界の道場と云つた觀を呈してゐるのであるが、わ

大支那系

けて泰山には朝陽洞であるとか廻馬嶺であるとか、その他伏虎廟と云つたやうな道教關係の建物が登岱の路を擁して次から次へと見出さるゝのである。かうした名山に持つて行つて道教の寺廟をおいたと云ふ思ひ付きが洵に處を得てゐることと思ふのである。

儒教が君臣父子夫婦等の人事關係の五倫の道を説くなどすべて社會國家家庭的人を對象として、秩序安寧の方面を力説し、仁義禮智信を云々せるに反し、道教はかうした人事界の細かい事は眼中におかず社會も國家も自己もすべてを超越してたゞ大自然を採入れ、自然の理法に叶ひ自然無爲にして治まると云つた見地から、宇宙間のことも自然界のこともすべては永遠的のものであり、一々これにこだはつてゐたつて仕方がない。むしろ自然にまかせておいてもそれで決して崩れるものではないと云つた氣持ちを極めて椽大の筆もつて力説してゐるところあたり殊に儒教以上の力が見えてゐる。この趣は全く支那民族自然の自由な氣分に合つてゐるのである。そして自分が支那南北各地方にあるいてゐると例へば

- 龍王廟 土地公 老君廟 火神廟 風神廟 藥王廟 城隍廟 灶神廟 娘娘廟 紫雲洞 仙殿
- 玉帝殿 (三皇五帝) 眞人府 元帝殿 三官殿 禹王廟 神農廟 天后宮 萬壽宮 周仙王 張
- 仙殿 財神廟 關帝廟 竈君廟 玄壇廟 三官殿 三清殿 東嶽廟 水神廟 文昌廟 痘神廟

眞武廟 道院道觀各種

と云つたやうな三十幾種の道教の寺觀を見出すのである。こまかく注意してゐたらまだ地方的に色の歴史傳説信仰を持つてゐるものが見出さるゝであらうと思ふ。こゝには唯その最も普通に出くはすもののみを列挙して見たのである。固よりこれらのうちにはその最初の大自然を歌つたものばかりでなく、その地方の鎮守の神として日本の八幡神社のものもあり、又安産の神、雨祈ひの神、臺所の神、水路の神と云つたやうな色々なものも分派して出来てゐるのである。がともかくその道教系統の寺觀の榮えてゐることは之によつても判るのである。さればその大木山にあたる處のその白雲觀とか玄妙觀とか千山とか云つた巨觀がその大衆の信仰の厚いと云ふことも偶然でないことが判るのである。

九十五 迷信を利用せる道教

支那の田舎の山境に這入つて見ると、多く道教關係の寺では龍王廟と云ふのを見出すのである。こは四時よく白雲を生じて雨を呼ぶに適した山上幽玄なる秘境にある。と云ふのは農村で早魃日照り続きの時農夫の參詣祈願を主たる頼みとなせるところであるから、一般農夫の目から見るとそのよ

支那現代の道觀

風俗・趣味

大支那大系

く年に度々山上雲霧を呼び、降雨を呼びさうな位置にあることが必要なのである。

江南江蘇地方の如き相當開けた農村といへども時に降雨のなく、農家の心配をまさせてゐるときなど、民心は唯一つに雨を祈るのみである。その時龍王廟に祈願をかけるは固よりであるが、更に南京地方では先年も孫傳芳あたりに頼ひ出で雨を降らしてもらひたいとのことであつた。當時孫大人は五省聯盟總司令の要職に就いてゐるときでもあつたし、總司令の位置と云つたら云ふまでもなく飛ぶ鳥をも落とさんず勢を以てゐるのであるから、民心を得て降雨の祈りをたのまれた以上苟しくもするわけにいかぬ。そこで天文師をしてよく天候低氣壓の來るときを俟ちいよいよたしかにその翌日は降りさうだと云ふ日を見定め天下に觸れを出し、總司令閣下の雨の祈りがあると云つて安心させるのである。そしてその翌日都合よく一天掻き曇り降雨があつたと云ふので、電雲を待ちわびてゐた江南の農夫どもから一層その總司令大人の徳を頌するに至つたと云ふことがある。

たはひもない話のやうではあるが、支那では道教的の迷信は行政上にいくら大切なことか判らぬのである。時には龍王廟以上のことを演ずることが大切なのである。又湖北宜昌三峽の裏山に自分分が數度分け入つたことがある。このとき土地の石門洞内の奥深きところ巖窟内に矢張り龍王廟と云ふがあつた。足もとも全く知れぬほどの幽玄なる洞内で懐中電氣を携へ這入つて行つたところが

風俗・趣味

たるところのことゝて、かゝるところにかうした雨神を祀れる廟宇を見るとは洵によく出來たものである。



浙江省杭州吳山關帝廟に參詣せし善男善女、巡禮の禮、春の清明の節の光景を示す

水の音がしてゐる。愈々深く入つて見ると千古の清水が溜まつてゐて、清冽の水の如くそして水の深さは測り知れない。洞窟の先きは暗くて判らぬが少量づゝ水が落ちてゐるものと見えて、水の落る音が洞内にひゞき渡り闇黒の洞窟内にも龍蛇の出現を見ないのでないかと疑はしめたのであつた。山西省汾水の西、天龍山上にも北齊時代の石佛石窟がありその上に龍王廟と云へるさゝやかな古廟が見出されたのであつたがひどく廢頽してゐた。その位置からするとこゝは黄河の北方に當つて、天に連なる高山山彙の一角で雨を呼ぶに形勝の地を占めてゐる所であつた。驟雨よく來

大支那系

又浙江は西湖のそば吳山第一峯の頂上に持つて行つて、城隍廟の巍巍として聳えてゐるものがあるとか、その他、關帝廟であるとか老爺廟であるとか風神廟とか云つたものがよく山上の一角にその輪廓を現はしてゐるのを見るのであるが、何れも之にはそれぞれその地方の深い迷信的信仰があり、その位置が俗界を超越してゐる處であればあるほど、更に御利益も多いわけであると考へられてゐるのである。その迷信に就いてはその祈願をなせる後に果してその自己の希ふ如く効果の現はれ來たるかどうかは疑問であるが、たとひ効果がなかつたとしてもそのときは最早やメイフアーツ(没法子)と云つて「仕方がない」とあきらめるのである。それ以上は神にねだらない。神に訴へるのが最後の手段であるにそれで願ひが叶はたくば、最早やそれまでだと見切りをつけるのである。しかしそこまでになる迄は低級な迷信家になると種々の供へ物、山海珍味をこしらへて神前に陳べ、他の人々にも之を見せびらかし爆竹を鳴らし元寶と云ふ銀紙を焼き、香華を手向けて盛にやるのである。そして祈りが済めば手向けた御馳走は残らず提籃に入れて持つて歸るのである。つまり祈りを捧ぐる間だけ神前に並べて神様にその香氣のみを獻じたと云ふまでである。そこらはどこまでも支那式を發揮してゐて見る目もをかく感ぜらるゝのである。

九十六 祈願禮拜

風俗・趣味

道觀にて信仰あつき民衆どもい來たり集まりその胸に念ずる祈願をかけるときは、實に珍らしい光景を呈するのであつて自分は常にその場面に接するときは注意を怠らず、そばで見つてゐると云つては濟まぬが傍觀を許してもらつてゐる。すると先づその供へ物が神前の卓上に並べられる。祈願者はその件につれて來たものと一緒に藁製の圓座の上に膝まづき、三跪九拜の禮を取るのである。それをいかにも莊嚴にやるのであるが、それには必ず爆竹と香を焚くこと、紅蠟を點すること、それに銀の元寶を焚くことこの四つの方法を豫めやつて先づ心を落ちつけ悪魔を拂ひ、神の靈を現場へ呼んで來ると云つた準備行動があるのである。それが出來たところで目を殆んど閉ぢて口に名號を唱へ、家庭に重病人でもあつて祈りをするのであれば、口中で何かその意中のことをしきりと口ずさんでゐるのである。そのとき南方では竹で作つた聖筭と云ふものを用ひ、之を地上に投じてその一つが陰を他の一つが陽を現はすやうに出て來ると之を以つて自分の祈りの叶つたしに見る。そして安心して歸るのであるが、又中には神籤により黄色の紙符を買ひ求めてそれによつて大吉、吉、凶、大凶などの運命を神に問

ふものもあつたりなど色々である。要するにこれらの祈はもと、迷信に始まつたものであるからその御利益がどう現はれようと致しかたはないのである。唯その神前に供へた品物が錢高を餘計にかけて拵らへた御馳走であればあるほどよく利き目があると云ふので、雞の丸煮であるとか鴨子の全焼であるとか果物點心いろいろのものを提籃に入れて二人三人して持つてまゐるのである。

そしてその祈願に出かけるものは多く女であつて、男子である場合は少ないのである。若しその祈願をこめてゐる女が纏足せる老婆であるとか、無邪氣な乙女などであるときなんかは見てゐても可憐な氣持ちがするのである。ところがその寺廟内には支那はどこでも乞食がたくさんゐて寝ころんでゐる。その節寺まわりの人々の足音に目をさまし供へ物のあるときなどは特に目を丸くして視線をそれに注いでゐるが、あとで全部提籃に入れて持つて歸つてしまふので當てが外れたと云つた顔をしてゐる場合など一寸面白いのである。

かやうにして道教の廟觀はその迷信がかつた神を祀れる寺の方が參詣者の多い事は勿論である。その城隍廟とかニヤンニヤンミヤウ(娘娘廟)とかであると門前内市をなし大變な雑踏である。飲食店、覗き繪、手品、輕業、玩具屋などの露店が出て非常な賑ひを示すのである。支那はどこでもかうした處に出かけて見ると、雨天以外の日はいつでもお祭り騒ぎで東京のお縁日以上である。全く

く巡警などの力をかりることなくして、唯平和的に行はれて行くのである。昔しからこれが支那平民娯樂場の觀を呈して大衆はかゝる處で一日の歡樂をつくし家なきものもこゝで食事を辨ずることが出来るると云つたやうに出来てゐるところが支那社會の民衆氣分を見せてゐるものと見てよいのである。

九十七 道教思想の將來

道教の寺觀はかやうに見て來るとそのたとひ迷信的とは云へ民心の吸引について絶大の魅力を有してゐることがわかる。支那大衆の信仰的結合力はこゝに統制せられてゐると云つても差支ない位である。されば地方の清道觀が修繕せらるゝとか、又白蟻の被害で全部改築せらるゝに至つた場合にでも寄附金の喜捨が甚だ多い。又柱檼葺瓦、神位祭器、儀仗、山門など何れも立派なものがあるかの民心に關係なき儒教孔廟などの荒廢してゐる情態とは丸きり選を異にしてゐるのである。かくしてたしかに道教の寺は支那民衆に對して深刻な或るものをつかんでゐる。そこが道教の生命である。儒教や佛教はこの點になると何となく力が足りない。殊に孔子廟の如きは北平と曲阜の二者を除いて考へると地方の文廟大成殿と云ふものは、實にひどくなつてゐる。北平の孔廟でも民衆の

大支那大系

信仰と云ふやうなことは空駄目である。一部の學者と政府當路者が之を尊信してゐる位のものとし
か見られてゐない。そこになると道教は地盤もひろく且つ深いので道教關係の寺々の多いこと、そ
の種類分派の榮えてゐる點から云つても大變なものである。北平朝陽門外の東嶽廟であるとか、又
泰山の麓に見える岱廟の如き、その他各地の道教の寺觀の參詣者の多き事實を以てしても大體現代
支那の道教が人心にいか深く食ひ入つてゐるかとよく判るのである。これは臺灣に渡つて見ても
同じことが云へる。吾人は道教思想の將來と云ふものは支那思想の將來についてよほど重大な關係
を有してゐるものとしてこゝにこれを紹介いたしておきたいのである。

二十四 北平回教寺に發見せし秘話珍談

奥底の知れぬ支那四百餘州の風俗人情のうちには随分腹を抱へて笑はせる話もあり、又奇想天外
の話題もあるが最近自分が北平で支那風俗研究中從來にない體驗實查を試みた點をこゝに挿話とし
て一二述べて見よう。

北平の風俗のうちでは宗教關係の隠れた儀式仕來りうちの随分風の變つたものがある。けれ
どもその宗派の信者以外のものは餘り近づきもせず又強ひて深入りをしようともしない。その爲め
兎角世間に知られず秘せられてゐる觀がある。

支那の宗教方面と云つても孔孟本位の儒教とか各寺院に見る佛教の方などにはたいした變つた奇
習も見出さない。ところが回教とか道教とか云つた俗間に廣く普及してゐる熱烈な宗教信徒の間
にはかなり見ごたへのものが多いのである。わけて道教方面には迷信がかつたものに目醒まし
い奇習が豊富にある。更にその毛色の變つた宗教で回教に就いて見ると普通他の一般民衆には固
より日本人などにも全然新らしく又奇異に感ぜらるるものがあるのである。而かも之は迷信からで

風俗・趣味

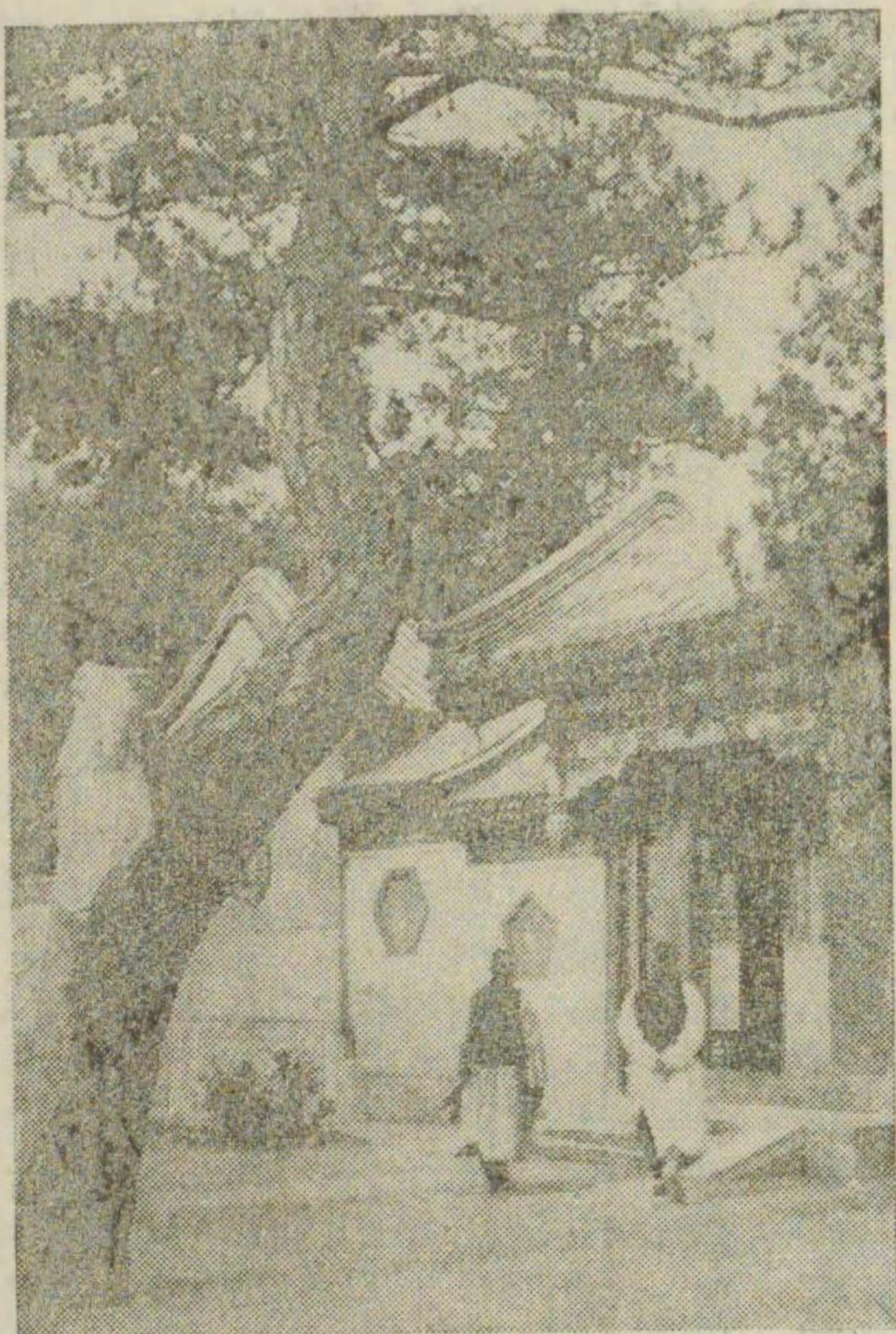
大支那大系

もなく、又他から強迫せられたのでもなく全く回回教徒自身自發的にむしる敬虔の念から出てる奇習なのである。それがそのやり方の餘りに眞面目であり眞摯な態度で勵行されてゐるのであるから可笑いどころか却つて參觀者自身の精神情態を莊嚴に引締め一種敬神の念に驅られて來るやうな感じさへ與へてゐるのである。

支那には全體で五千萬からゐると云はれてゐる回回教徒は西の方甘肅省から陝西、山西、河北にとひろがり傳はり山東、青州あたりまでも來てゐる。かれ等は南方は又長江から廣東あたりにも擴がり素晴らしい勢を有し一大潛勢力を發揮してゐる一種崇高な信者である。こはもともとアラビヤ方面から起り中央亞細亞から甘肅にかけてどつさり居る。支那東部は東するに従ひ山東あたりは比較的少なくそれでも濟南や青州邊まで來てゐる。青島とか日本にはまだ這入つて來てゐないやうである。此の回教の信者が毎日毎日繰返してゐる。お勤めのうちその禮拜堂の薄暗きピラーの間に立ち、アラビヤ語の經文を唱へて一同崇高なる禮拜の形式をとれるところまでは別段之を特筆するほどのこともない。しかしその禮拜堂へ出入のことに關係なくその信者が必ず大淨、小淨と云つてその各一日に五回宛大沐浴、小沐浴を取り行ふその身體の各部分部分を洗ふその點なのである。自分は北平にゐて有名なその大きな回教寺院に一度ならず參觀にまゐり禮拜堂へも研究的の態

風俗・趣味

るものはこれ等回教の寺院に遊びその信者が大淨小淨の沐浴に没頭することの極めて嚴重なるを見る時は必ずしも支那人が民俗として風呂を怠り嫌ふの風のあるとの考へは根本から間違つてゐたことに氣がつくのである。同時に又支那の民衆のうちに回教徒くらの潔癖性のものであること



北平萬壽山内境に見る廻廊の外観と遊歴人の影

度で參詣したのである。其回教の大寺は、北平の宣武門外牛街に在り、二個寺ある。
その一、シータス 回教西天寺
その二、トントース 回教東大寺(勅建禮拜寺)

と云ふがこれである。西大寺には教長楊德亮(明遠)アホンと云ふがあり、東大寺には玉瑞蘭(子馨)アホンと云ふがあつて自分たちを心から取持つて呉れたのであつた初めその信者川村狂堂翁の紹介があつたので大變便宜を得たのである。若し支那をよく研究せんとす

北平回教寺に發見せし秘話珍談

大支那大系

もわかるのである。北平には城内に約一萬戸の回教徒の家があると云はれ、信者は頗る嚴重に沐浴のことを考へ一日に大淨五回に小淨五回と云ふことにきめてゐる。又その湯も獨房内に、極めて神聖な湯として當てがはれてゐる。その全身湯浴みする大淨の外には局部局部の小淨が取り行はれる。經典の文言を默唱しながらいと念入りに兩手、指間、兩腕と隈なく之を淨め、又顔面の各部、目となく鼻孔となく兩耳朶となく之を清め又頭部が懇ろに洗ひ去られそれからしてしもの方が又それは特別に丁寧に細かく洗ひ清められてゐるのである。凡そその銘銘孔といふ孔は之を苟しくもしない。潔癖性の國民と云ふものは恐らく何れの國民であつてもさうであらうけれども回教徒は又特別である。大淨の場合よりも小淨のときの方が細部に亘れる丈にその仕事もこまかく又これは獨房を出でて共通の長い腰掛に座を占め、そのお勤めの様子徑路順序が手に取る如く參觀せらるるのである。殊にその一種異様に目せらるるはその信者が小便を済ませたあと左手をいつまでもズボンの褲子内に秘しその手を抜き出さないことである。何れはその左手を取り出し小淨の洗方に移るのではあるが、それまでには大低三十分ばかりもかゝるのである。左手で以ていかなる仕事をなせるわけなく長時間を要するのであるか、と尋ねて見るとその理由が振つてゐる。

「小水が一滴たりとも残つてゐては不淨であるから十二分に五指を以つて之をしごきしごいてそして絞り出してしまふのである。之には特に意を用ふべきである」云々

このことであつた。こは回教徒といはずアラバ一般の風習であるが右手は清潔にして神聖なるものとせられ左手はすべて上に述べた類のことに當てがはれてゐるのである。それにしてもかくまで長時間に亘り手を放すことをしないと云ふのは以つて如何にその場所に一點の穢れも留めないと云ふ祓ぎはらひの氣分の存するか、察せられるのである。女人に就いては又別に女人専門の寺がありそれには男子を參觀せしめないことになつてゐるので之を視察する機を得なかつたのである。こは函館のトラピストのそれと同じく矢張り八釜しく區別されてゐるのである。

かくの如く回教徒沐浴法はつまり心の淨化が根本となつてゐるのであるからしてその W.C. の用足し後のお勤めと來たら大變なものである。それが一日に五回の小淨と大淨とを勵行する内規になつてゐるから、若し信者以外のものから見るときは洵に繁瑣に堪へぬやうに考へらるゝのである。固より信者自身に業務の都合上とか又來客の爲めとかでおきまりの如く出来ない場合の生じたる如きときは次ぎの勤めのときに必ず二回分の時間をかけて丁寧に行ひ淨化すべきことになつてゐる。かくして早朝とひる前午後と薄暮及び夜十時頃とすべて五回になさるべきものと規定せられてゐるのである。

風俗・趣味

大支那大系

本來支那人は世人も知る如く例の方面の研究に就いては男子は十の六七まで皮かむりのもので衛生的方面から見てもその回教徒となれるものは幼少のとき割禮の方法によつて皮を切解しその從來行はるる四種の方法により専門家に囑してつとめて衛生に叶ふやう手術を受くることになつてゐるのである。さは云へ南支に行つて見ると北方ほど此の割禮を受くるものの少なき偽めか日本人には珍らしく感ぜられる位に未だその脱帽せざるもの多きを認めるのである。

北平宗教關係の風俗奇習の裏面にはかうした衛生的理由に根據を有してゐる話で尙尼寺の挿話があり、又清朝以來その魚が水からあがつて困つてゐるのにも似たる例の宦臣の身の上の哀話情話の濃やかなるものもあつたりその個人的に就いて之を語れば氣の毒なものもあるが、世の中の移り行く風俗の裏面を物語るにはよく深入りして探索しておき研究家にとりては珍談の一片鱗ともなると信ぜられる者があるのである。

九十八 アラビア文字と清真回回の招牌

アラビアから新疆甘肅陝西にと東漸し更に山西河北は固より山東の大半にまで浸浸乎として波及して來た回教の底力は南支廣東方面に又中支長江流域各地方にと非常に勢を以つて傳播し來たり、今や全支を通じて四千萬乃至五千萬の教徒を各省に見ると云つてゐる。北平の城内だけでもその回回の信徒は戸數にして一萬戸を下るまいと云はれてゐる。儒佛道の方面の從來既に世に知られてゐる消長に就いてはこゝに暫く措き今このホイホイ(回回)の北平に漲る空氣とその消長に就き大要を調べて見たいと思ふのである。

北平の大街を歩いてゐると寺院の門に「清真寺」の文字を讀むこと多くそしてそれに羅馬字ともつかず滿洲字ともつかず一種の線で横書きされた扁額を仰ぎ見ることがある。これは云ふまでもなくアラビア文字であつて、清真寺門額の特徴となつてゐるものである。しかし北平の市中には更に漢字で以つて店舗の壁面や看板に持つて行つて次のやうな簡單な文字を入れてゐるものを隨處に見る。それと氣がついて見ると實に各街衢到る處に之が見出さるゝのである。即ち、

回回。 教門。 西域。 清真。

清真回回。 回回教門。 西域回回。

西域教門。 清真教徒。 清真教。

風俗・趣味

などであるのがこれである。もとを正せばこは唐代ウイグル(回紇)として知られた塞外國名の回回の回を重ねて回回となしたものであること云ふまでもないことであるが、今では北平であらうと山

北平回教寺に發見せし秘話珍談

大支那大系

東であらうと唯ホイホイと發音をする丈でその回教徒たることを眞覺せしむるに至つたのである。普通に支那では回回とはたゞ猪肉(豚肉)を食べない人々であるとしてのみ知られてゐるのであるが事實支那各省何れの地方にゐる回々も豚を食べないのみならず豚の話をするだけでも嫌つて忌避してゐるのである回教徒の信仰心には豚を嫌つてゐるに就きてでなくその回々たることに就いて餘程深刻なるものがあるものと見えてその苟しくも回々の信者となつてゐる以上路傍の露店商人どもであつてもその屋臺の側面には必ず回々と云ふ文字を入れてゐる。又その剃頭的(床屋)の箱であらうと甘栗屋の包み紙であらうと回々ならば吃度之を記してゐるのである。又北平ではよく見る如く菜館、肉店であらうと、食料品店であらうとちやんとした店舗を構へてゐるものはその入口の壁に持つて行つて回教の文字を塗込みにして現はしてゐる。そればかりでなく別に又その回々たるしるしの招牌を高く掲げてゐるものもある。殊に又興味深く感ずるのはその文字の外に回教信者の禮拜用の黒帽や沐浴用の土瓶の繪など描いて掲げてゐるものがあることである。その文字も墨書のものばかりでなく眞鍮や銅を用ひて浮き出しにした高雅なものもあつてその回教徒たることを誇りとしかなり強く高調してゐることが判るのである。

儒教とか佛敎道敎基督教とかには此れ迄あまりかうした社會的存在を高調した氣分の現はれは

風俗・趣味

認められないのみならず、さう云つたマーク式のものも何も拵らへられてゐないのであるが、回教徒相互の間であるとその間暗々裡に御互回々であることの默認の方法が採れてゐるとは興味のあることである。又事實回回は内心他の信仰心を持つものよりも一段精神的に見て上位に在るのだと云つた氣高い自負心でもあるのではないかと云つたやうに見えてゐる。それ丈に又身を持つことも嚴であり自重してゐる所もたしかにあるやうに思はれる。されば北平市中に於いてもそのアラビア文字を壁面に見、又清真回回回回回の文字を仰ぎ讀まるゝところと云ふと思想上にも信仰上にも社會的に見て、健實なる或る物が漲つてゐるやうに見られるのである。自分が年來支那民族に就いて觀察してゐる範圍内にて此の回々の信徒ぐらゐるその信念の厚く且つ時としては如何なる社會的運動の勃發をも辭さないと云ふ勢を示してゐるものはあるまいと思はれる。勿論これまで河南の紅槍會とか滿洲の大刀會と云つた團體にはかなり手厳しいものもないではないがその宗教團體の方にて此の回回の如きものは他に多く見ないのである。從來世間では此の回回を一種の眼で見えてゐるものがあり、又日本などでは殆んど問題にもせず注意もしてゐなかつた位のものであるが、しかし、その實力と云ふものはたいしたもののである。固よりその武器を持つてゐるとか、兵力が強いとか云ふ方の意味ではなく彼れ等の精神的結合力の強烈なること又その敵愾心に深刻味を帯びてゐる

大支那大系

ことその點にかけては他に類を見ないのである。とても儒教とか佛教とかは之に比すべくもないのである。たゞ道教だけはやゝ之と趣を同じうするものがあるがその行きかたが違つてゐる。ともかく回回の看板なり回々の禮拜帽の掲げらるゝ所には一種侵すべからざる強烈なる團結力の潜在してゐると云ふ事實は争ふべからざるものであることを注意したいのである。

儒佛道の日本の社會に這入り込んでゐることは非常なものでむしろ日本に傳來してから特別の發達をなしたものと云はれてゐる位のものである。ところが如何なる故か始めから回回ばかりは日本の國土に這入つて來なかつた。これは日本の國體と相容れぬところがあるのかも知れぬが、不思議に日本に傳はつて來なかつたこと又は特に附言しておく必要があるのである。従つて日本から支那に遊んだものは支那に於いて初めて此の回回の文字や招牌を見るので異様な感に打たれるのである。それだけに又物珍らしくも感ぜられるのである。

九十九 回回の菜館と澡塘

北平の市中を歩いてゐて料理屋の看板を見ると「西域飯館」とか「西域菜館」とかその他回回、清真などの文字の冠せられたのがよく見當たる。それから又肉屋で羊肉、鶏肉などを賣つてゐる店

の招牌を見ると大抵回回とか清真とか書いたのを見るのである。殊に北平城内の西南隅の部落は菜市口から牛街方面を中心としてあの邊り一帯は殆んど回回教徒のみのである。従つてその方面の肉屋と云ふ肉屋はすべて皆羊肉の老舗のみである。とりわけ山東から來た尻の部分の恐ろしく



北支那の下の層民社會に見るさま

く豐滿な恰好せる羊肉の逆さまに幾頭となく並べ吊された店が幾軒となく見出されるのである。かう云つた羊肉の店は固より回回であるにきまつてゐるがその他牛街から教子胡同あたりへかけての民家と云ふ民家は聞いて見なくともすべて回回と斷じてよい位である

風俗・趣味

その外北平市中は東單であらうと西單であらうと又一般に東城から西城にかけて此の回回系統の老舗を見ることは實に多いのである。わけても前に云つた料理店肉屋の外に菓子店、食料雜貨店、澡堂（風呂屋）と云つた商賣向きになると回回が夥しいのである。

北平回教寺に發見せし秘話珍談

大支那大系

支那の事情に迂かりしてゐるものが動もすると出先で食事をせんと料理店に上りその回りの文字の見さかひもなく菜館酒樓に登つてゐる。そして豚肉の珍味でも何でも出来るもの位に思ひ込みそれを注文などして頼でもない事になることがあるのである。然かし御馳走そのものから云ふと格別豚肉の珍味のなくとも結構十分なる料理になすことも出来るのであるから、別段不足を感じる事もないのである。例へば北平であると東安市場の北の出口のところに見る西域菜館の如き自分たちも時々實地にこれへ出かけて見ることもあるが決して普通の料理に比べて劣つてゐるとは思はぬ。むしろ進歩した羊の珍味がこゝに來た爲おいしく頂けるわけである。しかし若し北平の通人として純回々のうちでも回回氣分の濃厚に漲つてゐる菜館と云へば何と云つてもニウチエー(牛街)方面に出かくる事であると云ひたい。これは千客萬來客も飯館もすべてが即ち回教徒のみであるから全體の調子が回回的である。外に萬事が頗る儉約第一主義に出來てゐるやうに眺めらるゝのである。北平の回々をよく研究調査でもして見ようと思ふものはかうした純なる回回氣分に浸つて見なくては本當の回回の民衆と云ふものは味へないのである。その地方は随分立派な堂々たる紳士連中も出這入りをしてゐるのであるがその取つてゐる所の料理は割りに簡單なものである。自分ども友人と二人で出かけて行つても銅子兒の百五六十文も拂ふときは十分腹を鼓することが出來ると云つた調

俗風・趣味

子である。普通北平の中央から見ると東興樓とか、新華樓、厚德福あたりに比べ場末であるが爲めさほどに知られてゐないのである。しかし回回の本當の空氣、民衆生活の氣分はかう云つた界限に限つて漲つてゐることに氣がつかねばならぬのである。次には澡塘即ち風呂屋であるがこれ亦回回の文字清眞のアラビア文字が北平市中各所に散見してゐるのである。自分は初め之に對して誤解をしてゐたのである。此の回回の文字の掲げられてゐる澡塘こそこゝには回回教徒の入浴者のみの出入するところではないかと云ふやうに思つてゐた。それだものだから自分でその風呂屋に行つて見れば、民衆風呂のことではありその割禮された信者の實物の形なども見らるゝものだらうぐらゐに考へてゐたのであつた。實際その調査をして見たいのもりもあつて態々回回風呂に行つたものである。ところが豈圖らんや事實は豫想に反して唯そこに普通の回回でない民衆が入浴に來る丈のことであつた。看板にある回回とはその主人公經營者が回回教徒であることを示せるのみであることが判つて、大笑ひをしたこともある。かうした失敗談などを繰返して見ると色々際限もないことであるが要するに北平の回回研究にはよほど露骨な考へではあるが遠慮なくどしどしと見て廻らなくては本當の深刻なところに到達することは出來ないのである。

大支那系

日々の日常生活には職業の上にも頗る云ひにくい事ではあるが徹底したところを営んでやつてゐるものがある。回々そのものは一般に子供の時分に必ず陰部の割禮を受けなくてはならぬと云ふ重大事件があるのである。これは日本人の如き代物を持つてゐるものには餘り必要のないわけであるが支那人には知る人は知つてゐるやうに大抵必要とするのである。と云ふのは支那人の代物を見て知つてゐるものならばこゝに多言を要せずして理解せらるゝのである。あまり露骨にこゝの處は話が出来ないので靴を隔て、痒きを掻く思ひがあるのである。これも致しかたがないのである。委細は面談にゆづりたいやうな氣持ちもするが、要は割禮はその病氣よけを意味すると云ふ衛生上の考から之を受けると云ひ傳へられてゐる。或はそれも本當のことであらうと思はれるのである。話は岐路に入つたが元來回々に飲食店とか風呂屋とかを職業としてゐるものゝ多いと云ふことは回々本來の氣分思想が物を清潔にし清淨にしたがると云ふ傾を持つてゐる故そう云つた風のことにかけては最も適してゐるのである。その茶館、澡塘が多く回々の仕事になつてゐると云ふのもそれで首肯せられるのである。そこへ氣がついてから北京の市中を観察して見ると一入興味が唆らるゝわけである。

百回回の翡翠老舗

回教調査のことで自分が牛街トナース東大寺の楊德亮（明達）アホンを訪ねてゐた時のことである。ひとりの回々信者常文慶（星恒）と云ふ翁に會つた。宣武門外菜市口教子胡同路東四十一號と云ふに住まひがあり翁は何でも前門外に立派な翡翠店を持つてゐるとの事であつた。前門の德源興あたりはさうでないかも知れぬが、多く北京の翡翠老舗は回々が多く、又相當その産をなしてゐるものがあるとの事である。回々は滿洲地方は別として多く支那内地のものも貧者が多いのであるが獨りこの翡翠商を營めるものは、懐が豊かであり又何かにつけて清真寺營繕の事などにも面倒を見てゐるとの事である。回々の間では學校の問題でも何でもその事に當たつて難問題となるものはいつても費用の點である。その場合に少しでも出資の負擔に堪へ得るものは自然その間に實勢力が得らるゝわけであるから、その意味に於いて回々の間に翡翠商のゐると云ふ事は強い。譬へかたがや、穩かでないかも知れぬが、猶太人に寶石商を營んでゐるものゝ羽振りのよいのと似たやうなところもあるのである。

常星恒翁の如きは其の東大寺の官寺の回回信者であると云ふばかりでなく自らその暇のある毎に

風俗・趣味

大支那大系

寺にまゐり沐浴を行ひ、禮拜に参加してゐるのであつてその壇下中でも錚々たる筆頭の方であるとの事である。自分も直接會つて少時話をして見たが平素回教帽を戴き温容よく人を引きつける丈の徳を備へアホンや學生(修業中の小僧連を指して呼ぶ名)よりの信任も篤いとの事であつた。かうした翡翠を取扱ふ商ひが上述の澡塘や飯館と一種概念的に共通した「清」と云ふ考のあるは見易きの理である。がその「清」淨を好む所からその品物を取扱ふ職業を好みたる意味は勿論明かにあるのである。これは尙自分が羊肉屋などの店頭を實際に行つて見るに存外衛生的にしてその潔癖を貴ぶの習慣の熱烈なるに想ひ併せるときはそこに又よく腑に落ちる所があるのである。

支那では一般にその従事せる職業の上下を云はずその仕事の如何によつて人間としての位に貴賤の考を伴ふと云ふことがあまりない。人は人たり、吾れは吾れたりと言つた考がしつかりしてゐて動かないやうに見える。殊にその回回連中と來たら内心むしる普通の人士よりも一段上位に在る位の考を持つてゐる爲め自分の娘をば回回以外の方から求めらるることがあつても之に應諾しない丈の氣ぐらゐを持つてゐると云はれてゐる位である。又一般市民の方からもこれは自分の一種のデリケートな見方かも知れぬが回回と云へば一目おいて見ると云つた氣分があるのである。それは回回であるが故に卑下する如き卑屈な感情は全くないといつてもよろしいのである。否、寧ろそのいざと云ふ時の一致團結力の強い事にかけては驚く可き美點を有してゐるのである。回回の最も多く密集してゐる牛街西大寺あたりからその界限一帶の町々を視察かたがた實地に踏入つて見ると町そのものはどちらかと云ふと寂れてゐる。廢頽したルインの墟のやうな感じがする。これは北平城内の多くの町に行つて比べても確かに寂しい印象を得るのである。けれどもその地方にはどこことなく、精神的の一種底力のあるものが漾うてゐるやうに思はれる。そこに又回回に對する緊張氣分を以つて眺むるの傾向をも生じて來るのである。

百一 教子胡同の東大寺と牛街の西大寺參詣

風俗・趣味

北平城の内外には回々の清真寺は大小三十八個寺からの多數の寺があるとの事であるがそのうちに最も大きな官寺はと云ふと東大寺と西大寺とであらう。殊に西大寺の方は勅建に係り屋根の瓦も黄色の釉藥のかゝつたものが用ひられ檐柱も五彩に塗り飾られてゐると云ふ工合で古くなつてゐるとは云へその間頗る輪奐の美を光らせてゐるのである。

東大寺と西大寺は何れもその境内はひろいが、その特色として目につくものはその門を入れば、沐浴の水房子があり淨井、湯釜を備へ、奥に講堂、アホンの室、禮拜堂などのあることである。門

北平回教寺に發見せし秘話珍談

大支那大系

内の感じは北平の孔子廟とか喇嘛寺の雍和宮乃至は白雲觀 法源寺あたりへ參詣した時の氣持ちとは全然違つてゐるのである。日本にも勿論かうした寺はないからその經驗をこゝに聯想せしむることとはむづかしい。けれども強ひて云つて見るとその寺内水房子のあたりから大釜に湯を沸らせ冬季堂内湯氣に充ち満ちてゐる光景など何となく風呂屋澡塘に入つた氣持ちを聯想されてならぬのである。とりわけ西大寺の方に行つて見ると堂内水房子は全く支那風呂式の香氣に満ちその天井の低い薄暗き水房子のあたり信者どもの沐浴せるものゝ相集まれる有様は何となく蒸し風呂のやうな氣分がしてゐるのである。かう云ふのも自分が正月頃の冬の光景をのみ見ての批評に過ぎず、夏は如何にやと云ふゆとりをこゝに残しておきたいのである。

さてその東大寺西大寺に於ける回々の沐浴の方法を見てゐると之に大淨と小淨との二つの洗方がある。これは特に此の寺に限つてあるわけではなく清眞寺一般に在る沐浴の方法であるがこゝに回教信者の日常のお勤めとして一番特色ある點が認められるのである。と云ふはその回々が禮拜の始まる前には必ず此の沐浴の行をなすのであるがこの沐浴は必ず毎日如何なることがあつても信者たる以上日々五回の沐浴を勵行するのである。そのうち大淨は全身沐浴であつて、小淨の方は陰部、手足、指の趾の間、口、耳、鼻、顔の各部に亘り念入りに洗ふのである。その間約三十分からの時間

風俗・趣味

をかけて靜かに念經を續けながら洗ふのである。うはの空で他人と話をしながら洗つたりしてはいけない。極めて謹嚴な態度で洗ふのである。女子の回々の爲めの寺も近來出來てはゐるが多くの男子の爲めの寺であつてその寺に出かけて來て沐浴するが便利でもあり、水湯も必ず備へられてゐるのであるから自由である。大淨の小房子と小淨のそれとは自ら別々であるが又局部を洗ふところは特によく出來てゐて身を屈めて洗ふのである。その時は外部から見透かされぬ丈の低い屏がついてゐる。誰人もこゝに來たつて初めてこの大淨小淨の實景を參觀するものは一種異様の感に打たれ又興味をも唆らるゝのである。尙この興味のある沐浴についての詳細は後に述べることとしてここには更に寺内回教徒の印象に就いて今少しく述べて見ようと思ふ。

先づ回教徒同士の間禮であるがこれは如何なる方法を探つてゐるか云ふにかの儒教流の手を拱いて互に揖するの形式にのみ見慣れてゐるものには頗る風變りに見えるのである。と云ふのは第一その出會ひがしらに或は失禮して別れると云ふ時に右又は左(必ずしも極つては居ない)の手を胸の處に當て、敬虔の意を表する。格別その首を垂れるとか頭を上下に動かす程のことはせず視線で以つて目禮をするのである。自分だちも回回の處では左の手を擧げ紅葉の如くひろげ胸に軽く當て、挨拶してゐたのであつた。郷に入つては郷に従ふの形式を探る方が双方御互に氣持ちがよろし

いのである。尙その禮拜に取りかゝる時の事であるが之には嚴かなる擧手の禮を採る。それは直立した姿勢で以つて兩手を擧げ兩母指を耳朶の後方に當て掌を開き前方に向けるのである。そして至大無極なる眞主に向かひ一意専心敬虔の情を以て拜し俗世の邪念を除き清調の音聲を以つてアラフ・アイコバルと禮拜の名號を唱ふるのである。これは眞主は至大無極なるものなりとの義であるとの事である。此の擧手の禮が終る時はその手を靜かにおろし臍のあたりで組み合はせる。その手の組みかたは左方の手を軽く握りその上を右手で以つて攔んだ形にかるく握るのである。そして注線は直立中常に叩頭する時のあたまたの着く所に注いでゐるのである。かうした禮拜の形式そのものよりも自分共にはその念經のアラビア語の音調抑揚頓坐が最も印象深くきざみ込まれたのである。即ち、之を假名で示して見ると

ピスミンリヤー・ヒールライ・ハルマー・ニールライハルミー・アルロー(以下略)
(仁愛慈悲なるアルラーフの名を奉じて云々)

この念經を聞きつゝその回信者だちの立ち並べるを見渡す時はその儒佛道の寺院の様子と全然異なつてゐる丈に別天地の感を深くさせらるゝのである。これらの念經のとき禮拜に加はるものは所謂學生だちが多いのであるが外部からその時間時間の禮拜に駆け付けて来るものも少なくないものである。

自分どもかうした回教の寺院に入つて見るとその見るもの聞くもの總べて變つてゐるので研究を峻らるゝことは非常なものである。その禮拜に擧手、叩頭、端坐に就いてもまだこゝに述べつくしてないのであるが兎も角むつかしい定めがあるやうである。それだけでも物珍らしく異様に感ずるけれども東大寺、西寺大共にそのアホンの書齋に到りアホン(大和尚、大禪師に當る教長のことを回教にてはアホンと云ふ)を訪ねて見ると親しく喝茶などの挨拶の下に暖かい氣分で談話も取かすことが出来る。卓上にはかなり古びた皮表装のアラビア原語の經典が大化總歸四典要會など云ふ漢字の經典と一緒に置かれてある。その部屋は別段に莊嚴に飾られてゐると云ふわけではなく、むしろ普通の書齋兼居室と云つた形である。従つてアホンと會つて話してゐても何となくそこに親しみの情の通ふものがある。先年自分は函館の郊外ツラピスト(修道院)を訪ねたことがあるがそこでは一種冷めたい暗い感じを得た。今その時の事を思ひ出し之を回教のそれに比べて見ると自分の氣持のせいかわりかアホンの方が暖か味のあるやうな感じがするのである。殊に西大寺教長の玉瑞蘭(子馨)アホンの如きはその先君の喪中に在り白のつまみのある回教帽を戴きこちらの問ひに對し腹藏なく何事でも答へて呉れる。又アホン自身としても來年は北平教長の間より選拔されてアラビアに幾人

大支那大系

か團體を遣り聖地に巡錫させることゝなつてゐる。自分もかゝる機會を得たいものだ云々など愛嬌交りに率直に語り出でたりなどしてゐた。

談は又アラビア文字の經典の話からアラビア文字の書法の話に移るとアホン自ら筆を執つて一例を書いて見せる。その筆と云ふは筆軸の竹を斜にそいで鋭く作られたるものにインクを含ませ音をさせながら書くのであるが何の事はない、ペン書きの式である。そして右方より左へと横に行くのであるから、英語などの左より右へ行くのとは違ふ。自分が倣宋活字の名刺「後藤朝太郎」を出し之を指し今アラビア字で音譯すれば如何にと云へばすぐ即座に書き添へてアラビア文字の書方を示してくれる。かう云つたアホンの自分に對して示してくれる氣分は一般支那人の社交性から來てゐる氣分であるから特に回々であるが爲めにと云ふ譯でもあるまいと思はれるが然かしとに角、氣持がよいのである。そして禮拜の時間が來ると合圖が鳴る。するとこれから禮拜ですから一寸失禮するところこちらの知らぬものに會釋する。そこへ例の學生が來て禮拜堂へとアホンを案内して行くと云つた式なのである。

尙別の印象であるが日本では寺のうちでは殺生するものを見ないし、又支那でもあまり寺領内では露骨に生き物を殺すことはやらないものゝやうに考へてゐた。ところが西大寺に訪ねて行つたと

風俗・趣味

きのことであつた。教長の室に這入る前堂の後方の空地で回教の僧が二三人鶏を十羽計り卵子を以つて屠つてゐる場面を見せつけられたのであつた。豚には縁のない寺であり、羊肉や鶏肉ならば當然構はない處であるから不思議でもない譯であるがしかし自分共の寺にゐると云ふ傳統的の氣分としてこゝに殺生の場面を見せつけらるゝのは一種異様に感ぜられたのであつた。しかしこれも一回の寺内にゐて見た鮮血淋漓の生ま生ましい光景でこそあつたけれども元來支那の人々はその性を屠ることは習ひ性となつてゐるわけである。その點から考へて見ると之を異様に感ずるなどは餘計なことであつた。佛教の方で殺生を戒しめ寺は精進すべきものと云つたやうな囚はれた型に嵌つてゐた自分を自分に判つきりと氣づかないでゐたのであつたと考へ直して見ると氣が樂になつたのである。

支那の寺ではかく鶏が屠られたり大仕掛けな沐浴場が設備されたりと云ふことを云へば一種異様な感に打たれるであらうがそこが回々教の寺であるからすべて差支なしと理解すればすべて腑に落ちるのである。普通の佛寺や道觀乃至は孔子廟などはかりを見てゐた眼で回教の寺を見るときはその餘りの變にの多きに驚くのである。北平城内の寺々のうちにはかの有名な雍和宮と云へる喇摩寺が寺として一番變つてゐることは誰れ人もよく認めてゐる所である。しかし喇摩寺の方は餘り